

---

Clean a wish

E N

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Clean a wish

### 【Nコード】

N6368P

### 【作者名】

EN

### 【あらすじ】

悟空中心の気まぐれDB短編集。時代バラバラ。ギャグだったりほのぼのだったり？女性向けです。

## 初めてのタッグ戦

「は、…」

苦しげに息を吐けば、誤魔化していた痛みが体を軋ませた。それなりに修行してきたつもりだ。それでも目の前に立ち憚る人物は無傷に近かった。

兄だと、名乗ってきた男だった。

己の出生を伝え息子を力強く奪い、悪事に参加しろと言われ拒んだら、案の定こんな事になった。

「どうした力カロット、遊びは終わりか？」

こっちは全力だったのに、憎たらしい限りだ。なあ、おめえもそう思うだろ？

「抜かせ。手抜きの貴様と違って新技くらいあるぜ」

こちらもあの男同様、小憎たらしい返事だが今だけ敵じゃないのが幸運だった。

「おめえを、信じていいのか？」

この場合、力と信頼とどちらを信じて良いのか迷ったが、言葉にすることを躊躇しなかった。

そうすれば、皮肉な笑みと声が返される。

「さあな」

まあどの道、ほかに方法がないのだからそれに賭けるしかない。  
失敗したら、死ぬのかどうかなんて考える暇なんて無い。

嗚呼でも、これだけは気付いた。

好敵手とか、クリリン達とはまた違った親友を、そう呼ぶんだろう  
と感じた。

なあピッコロ。

んな事言ったらおめえ、怒るんか？

だけど、おめえが強く拒まないと思えてしまう己は、やっぱり馬鹿  
なんだろう。

己は、おめえの皮肉ったらしい笑顔を見てしまうと思ってしまう。  
嬉しくなつてこそばゆくて時々、本気で踵落としを喰らわせてやり  
たいくらい、殺意が沸くんだ。

お互い「死んでしまえ」が口癖になればいい

呼んでみたけれど

「天さん」

聞き慣れた呼び方だが、言った相手が違う事に呼ばれた本人は一瞬、固まった。

「ご、悟空？」

「おう、なんだ？」

それはこちらの台詞だが、悟空の横にいた餃子も驚いて黙り込んでしまっていた。

驚いたまま固まる天津飯を、悟空は見返し首を傾げた。

「オラ、変な事言ったんか？」

「うん、変な事言った」

いまだ固まる天津飯に変わって餃子が頷いた。

「悟空、いつも天さんなんて呼ばない。どうしたの？」

「う？ いんや、オラ昔いつちゃんだけ、呼んだことあったぞ」

『なんだって？』

天津飯と餃子の声が重なる。

昔とはどのくらいまで遡るのだろうか。

「……、もしかして。あの時か？」

あれは確か、ピッコロ大魔王との最終決戦の時ではなかっただろうか。

あの時は状況が状況だった為、聞きそびれたが。

むしろ、あんな古い記憶をよく覚えていたと逆に感心したいくらいだ。

ここは問えば良いのだから、思っていれば、悟空が先に応えた。

「天津飯って美味そうな名前だかな。あん時に呼んでたら、オラ腹減って力入んなかったぞ」

笑えばよいのか呆れて良いのか、時効になってしまった昔話に、天津飯は軽い目眩を起こす。

そして笑い話にするには、あまりにも洒落にならない昔話だと、天津飯は無表情で頭一つ分低い悟空の額を力いっぱい小突いた。

## 永遠

どこか遠い昔の記憶。

霞のかかるぼんやりとした思い出の中の景色は、少しだけ不安にさせた。

いつかの場所へ再び訪れたのは、偶然に過ぎなかった。

あの頃はとも、賑やかな雰囲気が出た所だと思っていたが、なかなかどうして。

岬から見渡す海は日差しに美しく静かな蒼の輝きを見せている。

その岬の側で、白く清潔な墓標を見つけた。墓の前には少し枯れ掛けた花束。

歩み寄って墓標に刻まれた名を見る。

「だあれ？」

耳によく響く声が背後から聞こえた。

振り返れば、少女がこちらを見て立ち尽くしている。

青のジーンズに、羽の生えた帽子。不思議そうに見上げてくる大きな瞳を眼鏡で隠してしまっている。

そして右手に持つのは、墓標に飾られた同じ花。

「博士達のお友達？」

歩み寄って問いかける少女に、己は曖昧な顔をした。

「おめえ、一人で此処守ってんのか？」

一度だけ少女は首を傾げ、意味が分かったのか小さく頷いた。

「だって、アタイのお家は此処だもの」

「、そつか…」

この少女と出会ったのは随分と昔の事だ。

己は成長し、少女はあの頃からずっと少女のままだった。

「寂しくねえのか？」

頭を撫でてやれば、少女は首を横に振って顔を綻ばせた。

「博士ゆってたよ。みんな遠いお空に行っても、ずっと友達だって」

寂しさから来る強がりなんかではない。

いや、少女は初めから寂しいという感情などないのだろう。

人の手で造られた存在だが、少女の心はしっかりと少女自身で組み立てた「感情」だ。

ただ、少女は人の死を理解していないだけだ。

だがそれを不憫だとは思えなかった。

単純に羨ましかった。



「ねえ、おじちゃんだあれ？」

あの頃と、全然変わらない。

美しい瞳は、少女を深く愛した人達の優しさや暖かさを強く残していた。

「オラは、」

名前を名乗れば、君は思い出してくれるかい？

己は大人になってしまった。

己も少しづつ大切な人達の逝く姿を見てきたから。

今日、一番の親友が逝ってしまった。

去年は、永遠の伴侶が己を置いて逝ってしまった。

「泣かないで」

ひんやりと、冷たい手が頬を伝う涙を拭った。

君も、泣いたかい？

「お友達、やっと会えた」

永遠の少女は、眼を輝かせて出会った時の思い出ごと包むように、笑ってくれた。

『ねえねえ、プロレスごっこやろう!!!!』  
『プロレスって何だ? 食いもんか?』

それは望遠にも似た

同じだと思っていた視界の中の世界が、思っていたよりも君の視線の方が己より高かった。

それに気付いたのは、ほんの些細な事で。

見つけた、と誰にも聞こえない小声で呟き。探していた人物を見つけた。

名を呼ぼうとして口を開いて、何故か止まってしまった。

長年来の親友は雲よりも高い山頂で、遠い空をじつ、と静かに眺めていた。

なんて穏やかな横顔なのだろうと感じ見つめていれば、声を掛けてこない己を案じたのか手を振ってくれた。

「クリリン、」

昔から変わらずに名を呼んでくれる親友。

けれどまたすぐに、空へと視線を戻してしまった。

隣に歩み寄れば、親友の穏やかな顔が間近で見られた。

「此处、覚えてつか？」

雲が晴れれば莊嚴で美しい森林が見渡せるだろう。

その景色を想像し親友の嬉しそうな問いに、己もはっきりと応えてやった。

「ああ、勿論。俺達が修行した場所だよな」

確かあの山まで牛乳配達した。

あの湖では鮫に追いかけ回された。

嗚呼そういえば、今立っているこの山にも登ったはずだ。

『クリリン』

先に辿り着いた親友が手を差し伸べて来た時は、意地があったけれど。

段々と修行を重ねてゆき、友情が芽生えた頃には己の下手な意地が馬鹿らしく思えたものだ。

最初はお互いの力量に差はほとんどなかった。しかし月日を重ねる毎に親友と再会すれば、親友はいつも己より一歩二歩先へ進んでいた。

親友の正体がどうか、己よりも数倍も勇敢だからとか、そういう意味ではなく、何となしに、もう同じ目線ではないと気づいてしまった。

親友の背中を見送る度、無力さと少しばかりの嫉妬が心に穴を開けた気がした。

そんな自分がいつそう恥ずかしくて、顔を俯かせたことは何度もあったが、そんな己の思いなど吹っ飛ばすように、親友はいつだって笑っていた。

「思えば、オラ達ずっと一緒だったよなあ」

「一緒っていうか、巻き込まれたっていうか…」

「はは、そうかもな」

「…なあ、悟空」

名を呼べば、素直に振り向いてくれた。

誰よりも強い意志を宿したこの瞳を初めて見たのは、きつと3回目の天下一武道会の時だ。

遠い惑星での戦いの時も。

人造人間との戦いの時も。

魔人との全宇宙を掛けた戦いの時も。

変わらず、前を見続けていたその背中に…。

「ひとつだけ、約束してくれ」

最初は、戸惑った。

けれどそれなりに年齢を重ねれば、言わなきゃいけない事もあるんだって分かる。

「行く時は、ちゃんと教えるよ」

親友は少し驚いて、そして悪戯するような笑顔を見せてくれた。

己は、もうお前と一緒に旅は出来ないから。

愛する者と手を取り合って生きる事を決めて、旅を終わらせる覚悟をした時は、一晩中泣いたんだ。

お前となら何処へだって行けるなんて、夢みたいな事をいくつもやってきたからこそ、大人になることがとても勇気がいて辛かった。

「何で、クリリンには分かっちゃまうかな」

「あつたり前だろ？何年お前と親友やってんだよ」

笑い返したお前は、希望を背負った存在だ。

家族や仲間だけでは、きつとお前を縛り付けることは不可能だ。

だから、約束を。

最後のお別れを言うまで、名前を呼ばせてくれ。

『オラ達、離れててもずっと仲間だよ』

『なに当たり前の事言ってるんだよ』

『へへ……』

迷うことを恐れなかった、純粹な気持ちで遠い昔に置き去りにして。雲が晴れた美しい景色は、朧気な記憶を強く色濃く残していた。

きつと、来世でも俺達は出会えるさ

## 二人だけの境界線

あの頃の記憶なんて、きっと素敵に美化されてしまったんだわ。

白髪などまだ目立つ筈もない、自由奔放な空色の髪を流しその女は、  
優しく華やかに、少女だった頃よりも美しく微笑んだ。

恒例行事になってしまった、カプセルコーポレーションのブルマ宅での3ヶ月に一度のバーベキューパーティが終了し、食べ散らかしたゴミを片付ければ、時計は既に夜中の2時を回っていた。

チチや18号、ビーデルと4人で世間話に華を添えながらの片付けだった為、遅くなったのは少し想定外だった。けれどブルマ自身、近頃は忙しい毎日だったから仲間達の再会は本当に嬉しいものだ。

ビーデルを心配した悟飯は送って行くついでに自宅に戻ると言って、帰っていった。大学院生になった2人の後ろ姿を眺めて、また話が続いたのもやはり遅くなった原因でもあった。

悟飯とビーデルを除けば、今夜は集まった仲間が全員部屋で休んでいる。

珍しくヤムチャや天津飯達まで集まったので、今夜はとびきり、楽しく騒げたと言う訳だ。

息子と、息子と仲良く寝ている悟天の寝顔を確認し、長い廊下を歩みつつ証明ライトを消して行けば、ふとブルマは足音を止めた。向こう先の方で、ガサガサと怪しい音が控えめに響いた。

あの方向はキッチンだ。

何となく予想は付いているのか、ブルマは溜息を付き歩みを再開した。

パチン、と軽やかな音と同時に暗かったキッチンが証明ライトによって明るくなる。

奥に設置してある巨大な冷蔵庫の前でしゃがみこむ、特徴的な黒髪が跳ねた。

「孫くーん、なあにやってるのかしら？」

隠れようとした食い逃げ犯の襟首を後ろから掴み上げれば、呼ばれた悟空は変な悲鳴を上げた。

「ブ、ブルマ」

背後にいるブルマを見上げ、乾いた笑いを立てる悟空の両手には零れんばかりに食料が乗っていた。

「あんだねえ、あれだけ食べといてまだ…」

ブルマの声を遮って、悟空の腹から小気味良い音が鳴り響く。照れ笑いする悟空を見て呆れたのか、怒る気がガタ落ちしてしまっ



た。

「しょうがないわねえ。何か作って上げるから、その生肉を離しなさい。ってか、どうやって食べる気だったのよ」

ブルマの問いに、悟空は黒い瞳を瞬かせて応えた。

「そりやおめえ、焼くに決まってんだろ」

「どうやって？」

悟空は絶対、コンロなど使えるはずはない。むしろ壊すのでは無かるうか。夫は実際そうだった。

ブルマの冷たい問いに、それでも悟空は応えた。

「うう、気で…」

生肉に向かって手を翳し何かやらかそうとする前に、ブルマは膝で悟空の後頭部を蹴って黙らせた。

2杯目のココアを飲んだ時には、あれだけあった夜食は皿だけとなつて帰ってきた。請求書つくろうかと思ったが、今更だと気づいて無駄な思考だとうんざりした。

自然と、沈黙が生じてしまった。お互い、話を切り出すタイミング

を見計らっているような沈黙だ。  
それを先に破ったのはブルマだった。

「孫くんの食欲振りには、いつも感心するわ」  
「そうかあ？ベジータも似たようなもんだろ」

そうねえ、とはブルマは続けなかった。いつもなら悟空とベジータの無職に近い態度に少々、どころかなり怒りたい気分だが、今夜だけは違った。

「ほんとに、久しぶりよね。仲間全員集まったのって…」

「う？そっか？ああ、ブルマはわかんねえか」

「ちよっと、なによそれ」

む、としたが、理由はすぐに分かった。

悟空達にしか分からない「気」の操り方で、だいたいの居場所が分かるという以前聞いた覚えがあった。

普通の一般人でしかないブルマにとっては理解できない範囲だが、逆にとても羨ましく思えた。

チチでさえも元は武道家であるし、全く武道と無関係な自分が、その場所に居続ける事が何より不思議な感覚だった。

夫が関係しているとか、息子がそうだとか、それよりももうずっと前から…。

「ブルマは、いつも変わるな」

目を細めて、嬉しそうに悟空は笑っていた。悪戯を思いついたような表情で。

「服装とか髪型とかじゃねえぞ？なんつーか、色んな奴らと出会っ

て、沢山吸収してるー、のか？」

何故か疑問で返された。

たが分かる気がする。

確かに、一般人なのに此処まで仲間達的能力や強い絆を理解できるのは並大抵の精神では保たないと断言できるくらい、様々な事を経験した。

そもそも悟空との出会いから、すべてが始まったのだと思い出した。

ドラゴンボールを探し出した理由など、単なる興味本位に過ぎなかった。

世界に誇る科学者である父の頭脳を強く引き継ぎ、仮にもサイエンティストと呼ばれる己が、古い伝説を信じる気になれずとも探すと決めたのは、あの美しく光る宝玉の中にある微々たる信号に魅入られたからだだった。

その不可思議な信号に導かれ、出会ったのが少年の悟空だった。

互いの第一印象は最悪で、けれど協力しようとして旅を始めた。

仲間と出会い、死にかけた事など数え切れないほどあった。

二度と関わりたくないと思えば願うほど、己は地球の危機をいつも近くで感じていた。

そしてそれはいつの間にか絆に変わり、その中心にはいつだって悟空が居て、それをずっと眺めていたいと強く願っていた己も居た。

「ふふ、偶然なんて愚問ね…」

ブルマに煎れてもらったココアが熱すぎたのか、息を吹きかけた悟空を眺め彼女は鈴のように笑った。

「孫くんは、いつまでたっても変わんないわねえ」

「かわんねえよ、オラは」

「あらそう?」

少年の頃から変わらない笑い声と、大人になった艶やかな笑い声がひっそりとした部屋に響く。

嗚呼、だからだろう。

この笑顔をみる度、諦めないと叫ぶ声を聞く度。

己は変わってしまったのだと気付かされる。

悲しい記憶も、辛い記憶も、苦しい記憶も、彼のように全てを受け入れられず、美化してしまった。

別に彼に話さずとも良いだろう。

きっと彼は変わらず、出会った頃と同じのように笑ってくれるだろうから。

それは、初恋ではない絆

## 小さな友人達

ひだまりの匂いにする。

首に触れるくすぐったさに微睡みが醒めてゆく。

うつすらと瞼を開いて胸辺りに乗る小さな物体に手を伸ばせば、指先に小動物の暖かさが伝わる。

「…、プーアル？」

長い水色の毛並みの尾を、寝息のリズムに合わせて揺らせている。

いつの間にか己の上に乗っていたのか、安らかな寝息を立てて古くからの小さな友人は己に身を預けている。

ヤムチャの傍を離れているのを見るのは随分と久しい気がした。

誰にでも愛想の良い小さな友人は、昔から変わらず皆の傍に存在している。

起こすのも悪い気がしてそのまま草むらで寝そべっていれば、もうひとつの気配がこちらに歩み寄ってくる。

「なんだ、やっぱり此処にいたのか」

「、ウーロン」

「プーアルの奴、悟空探しに行くって言って帰ってこないからさあ、…寝てるのか？」

こちらを見下ろしていたウーロンが、気持ちよさげに眠るプーアルに苦笑して己の隣にぽすん、と座り込む。

「すまねえな、パンの面倒見てもらってよ。あいつやんちゃだから」「いいよいいよ、子守はマーロンちゃんやブラちゃんて慣れてるから」

今頃は、呼ばれ損ねた己を置いて集まった皆はバーベキューで楽しんでるだろうか。

昔から変わらない友人の気配にまた眠りが訪れようとして、ふとウーロンの視線がこちらを伺い見ているのに気付いた。

「どうかしたのか？ウーロン」

「あ、いや…」

戸惑いげに視線をさ迷わせて、小さくウーロンは問い掛けた。

座り込んだ膝の上で両手を不安げに絡ませるウーロンに、悟空は優しいげな眼差しで黙って見守る。

「プーアルが、さ。嫌な夢を見たって言うんだ」

「夢？」

こくり、と頷く様はどうも覇気がない。

「ほら、俺とプーアルは妖怪だろ？」

「あゝ、そうだったな」

別に種族で友人を選んだ訳ではない悟空は、心底思い出したように呟く。

「だからその、」

友の声が酷く不安げだ。

だが何を応えてやれば分ならず、小さく頷く。

「俺達、人間と違って長生きするからさ」

遠慮がちに話し出す友人に、嗚呼そう言えばと己も思考に沈む。

出会った時から、まったく変わらない小さな友人は、時の流れに戸惑っていた。

それ程寿命が長くない人間と、いつか訪れるであろう『別れ』を想像しているのだろうか。

近い未来、ふたりだけになってしまふのだろうか…。

ぼん、とうなだれるウーロンの頭に暖かい大きな手が触れた。泣きそうな顔で振り向いてくる友人に、笑顔を浮かべてやる。

「なあウーロン、お願いがあるんだ」

ふと、出会った頃の記憶が、胸に小さな痛みを与えてくる。

悲しまないで。

泣き止んで欲しい。

そう願いを込めて。

「パン達と、友達になってやってくれ」



君と出会ってから、感謝しても足りないくらい沢山の物をくれた。  
悲しい真実に心が挫けそうになっても、君が望めば、仲間はずっと  
名を呼んでくれる。

「悟空、…」

「泣くなよウーロン」

「だって、」

「なあウーロン」

いつかこの先、

「オラ達の話を、」

沢山の子供達が生まれて

「おめえ達が伝えてくれ」

遠い昔の記憶と共に。

君と歩み続けた道のりは、決して途切れたりはしないから。  
鼻をすする音がふたつ。

胸元に縋る小さな温もりが震えていた。

忘れられない昔話をしよう。

笑って泣いて、悲しくても皆で前を走り続けた、光輝いていた冒険を。

君との出会いは、決して偶然じゃない

## 愛おしい悪戯

水道のコルクを閉め布巾で水を拭き取れば、チチは腰に巻いたエプロンを軽く叩き滴を落とす。

大量にあった皿を綺麗に戸棚に仕舞えば、騒がしかった筈の昼食の風景は鳴りを潜め、リビングは一時の静けさを纏っていた。

昼食の取り合いをしていた父子達は、今頃外で遊んでいるだろうか。大学でなかなか休めなかった長男が、ようやく落ち着き次男と遊んでいる様はやはり兄弟だ。

無理はしないで欲しいが息抜き程度ならばと、チチもあえて何も言わないでいた。

さて、と手を止めていた事を思い出し、次は洗濯場へと赴く。

主婦は忙しいのだ。

洗濯が終われば、今日は予定していた食材を買って、新しい煮込み料理でも挑戦してみよう。

上手く出来ればブルマさんにも教えようと考えながら廊下を歩いていけば、ふと開け放たれた次男の部屋の入り口に目を向ければ、窓の外で誰かが立っていた。

「悟空さ？」

夫だった。

首を傾げて名を呼べば、悟空は外で何かを呼びかけている。

だがこちらは何も聞こえない。

部屋へと足を踏み入れ、散らばった玩具を避けながら窓へと向かう。いまだ悟空は口をパクパクさせるだけで、窓に鍵がかかって居るのだろうかと近距離まで近付く。

そうすれば突然、外にいた悟空が身を乗り出して屈んできたのだ。

驚きに目を見開いたチチに構わず、悟空は目を細めてチチへ顔を近付ける。

軽い音を立てて、2人の唇が合わさる。

その啄む口付けはすぐに離れ、悟空は悪戯が成功したような笑みを浮かべていた。

窓は、もともと開いていたのだ。

風が吹いていないタイミングを計って起こした夫の悪戯に、チチは頬を染めて肩を震わせた。

「う、悟空さ……」

「へへ、おでれえたか？」

「こんなっ、こっばずかしい事。悟空さくらいだぞ……」

それでもチチの怒りは中途半端だ。

僅かに溢れた嬉しさと、恥ずかしさが頬を熱くさせた。

「最初は、チチがやってくれたんだぞ？」

「だ！、だともいい年した男が……」

確かに結婚して間もない頃は、恥ずかしさと愛しさを緬い交ぜにした思いでよく悟空をからかったものだ。

己がキスをすれば、ぎこちなく返してくる夫に嬉しさがこみ上げていた時期もあつが、長男が生まれてからはそんな事は隅に置いて教育や家事に専念していた。

まさか、覚えていたなんて。

ほかんと立ち尽くしていた己に、悟空は嬉しげに自分の頬を指さしていた。

返せと、言いたいのだろう。

小さく溜息を吐き、チチは一歩進む。

悟空がとても嬉しげに微笑むのを見、チチは少し怒りが湧いた。

そして一言。

「寝ぼけてねえで、畑でも耕してけろ」

窓を勢いよく閉めれば、悟空の顔は見事に窓に張り付いて蛸みたいになっていた。

こちらは忙しいのに、阿呆らしいことを考えるのは天才的だ。  
部屋へ出ていこうとする己の背中に、くぐもった声で名を呼んでいた。

外へと出れば、朝に干していた白いシーツが風に靡いていた。  
雲のない晴れやかな空を眺め、今日は洗濯日和だと嬉しげに頷いた。

3時にはブルマが大量のお菓子を持って遊びに来るだろう。  
今日くらいは好きなだけ食べさせようかと思いつながら。

貴方からのキスは、子供のように純粹で心地よい太陽みたいな暖かさを感じた。

微笑む君をずっと見ていたい

## 100年後の未来

目を閉じて、光を見つけた。

例え、自分自身がこんなにも切なくて悲しくて、いろんな物が欲しくてたまらなかった時。

とても大切な出会いをすると、その資格があると言われた。

けれど、不安だった。

自分にはない物をもつ自分自身の中が。

本当の奇跡を信じるまでは。

それは遠い過去と、ささやかな未来が『僕』で繋がった瞬間。

その葬礼は、雨の下ひっそりと行われた。

祖母は天涯孤独に近かった為に親類は居ないが、親しくしてもらった近所の人達が大勢、手伝ってくれた。

「悟空、」

若干、掠れた声で名を呼ばれて顔を上げれば、小学校からの仲の良い友人が、祖母が名付けてくれた自分の名を呼んで、寂しそうな顔をしていた。

「何、泣いてんの」

苦笑すれば、逆に泣かないのか？と訪ね返された。

曖昧にしか頷けなかった。

もう祖母が長くない事は、中学生にもなれば薄々感じていた。

沢山長生きしてきた祖母は、その分だけ体に爆弾を抱えてしまったし、たった2人だけしか居ない家族を、置き去りに出来ないという思いを、祖母が一番案じていた事も分かっていた。

「ばあちゃん、笑ってたんだ」

そして謝っていた。

独りにする事を許して欲しいと。

けれどずっと、『私達』はお前を見守っていると。

友人が大粒の涙を流して泣いてくれた。

まるで、自分の分まで泣いてくれるように。



陽が沈み始めると、手伝ってくれた近所のおばちゃん達は帰っていった。

途端に、酷く静かになった家と広くなった部屋に、胸が軋みそうになる。

昨日までは、こんな部屋など静かだとか寒いだとか広いだとか、そんな事なんとも思わなかったのに。

「パン、ばあちゃん…」

小さく名を呼んでも、もう返ってくる声などありはしないのに。

名を呼べば、もっと苦しくなると分かっているのに、口を開かずには居られない。

視界が涙で歪み、たったひとりになってしまった悲しさに膝が崩れそうになって、ふと外から人の声が響いてきた。

「ほら、老師様が寄り道なんかするから。葬礼終わっちゃってるじゃないですか」

「地図を間違うて迷ったのはお前さんの非もあるんじゃない」

少年と老人と思しき声だ。

拍子抜けな声に涙腺が見事に直って玄関のドアを開ければ、案の定、声の主は家の前に居た。

「あ、こんばんわ」

こちらに先に気づいた少年が、遠慮がちに笑顔で挨拶してきた。外に出て2人に歩み寄れば、老人が自分を凝視して少し驚いていた。

「ほんま、よう似ておるわい」

「え？」

老人の台詞は、よく祖母からも聞いていたものだ。

『本当、瓜二つだよ』

愛しさが込められた瞳が、自分が知らない面影を見ている祖母の寂しそうな顔が浮かぶ。

「似てるって、御先祖様にですか？」

「そうじゃ。あの頃を思い出すのう」

優しげな瞳が細まって深い皺に埋もれる。

だが、自分にとっては目の前の2人は知らない人間だ。

不安げな顔をすれば、老人は思い出したように声を上げる。

「自己紹介がまだじゃったな。儂は亀仙人、かつては武天老師とも呼ばれていた」

「こう見えても、武術の達人だったんですよ」

「こう見えては余計じゃ！！！！」

「武天、老師……」

少しだけ、針が刺さったような痛みが胸に走る。  
知りもしない過去を懐かしむような、痛みだ。

「こやつは、クリリン。今は儂の下で修行をして居る」

「初めまして」

笑顔で、クリリンと名乗った少年が手を伸ばしてくる。  
恐らく、あまり年は違わないだろう。  
好印象を受けるその笑顔に、吊られて手を伸ばす。

『、クリリン』

耳鳴りのようで、心地よい声が脳裏に優しく響いた。

雲よりも高い山頂で、空を眺めている誰かの視線。

痛みも嬉しさも悲しさも愛しさも、互いで分け合って、笑い会って、  
沢山話し合って。

そして、最後の約束をしたあの日。

でも、これは自分の記憶じゃない。

それがとても悔しくて悲しくて、けれど胸を締め付ける切なさが増  
れて止まらない。

「なあ、どうした？」

クリリンの声に、自分が泣いているのだと気付いた。  
先程の寂しさから来る涙ではない。  
ただ訳もなく、嬉しかった。

「これも、運命かのう……」

老人は、朝日を見るように優しい眼差しで2人を見ていた。

「ふむ。長生きは、してみるもんじゃな」

老人もまた、気が遠くなるような長い年月の間で、大勢の弟子が逝くのを見てきた。

けれど出会いは何度でも繰り返されると解っているからこそ、老人は此処へ訪れる事を迷わなかった。

あの日、少年の祖母から送られてきた手紙を読まなければ、決して出会いはしなかった、かつては『親友』であった2人の再会に、何処か焦がれるような思いが胸をかすめる。

「のう、悟空や」

喜ばしげに名を呼べば、その子供は、老人の遠い記憶と何ら変わらない同じ笑顔がそこにあった。

「儂の下で、修行せぬか？」

そして教えてあげよう。

お前と同じ名を持つ、お前が受け継ぐべき伝説を。  
そしてまた新たな物語を歩んで欲しい。

出会いは、決して偶然ではないのだから。

『おっす！オラ、孫 悟空だ！！』

君が微笑んでくれれば、世界は周り始める。

## 老人と子供

いつの間にか建てられた趣味の悪い城の一角に己の部屋を設え、漸くこの穏やかな生活に慣れたがやたら長い廊下にそろそろ文句を言おうかと考え部屋へと辿り着けば、誰も居ないはずの己の部屋に人の気配がした。

きい、と小さく音を立てて部屋に入れば、すぐ視界に入ったのは大きな棚だ。

気紛れに下界から集めた趣味雑誌や、世界情勢。興味の湧かない物理学、愛のある物語、面白い童話や胡散臭い宗教の聖書。一週間前に読みふけた最新医療器具や法学の本。

最近ハマりだした、人類の知識だけで造った科学に関するあらゆる本が山をつくっている。その隣では貧困や格差で学力のない無知な若者が、自分自身の墮落を他国の娯楽道具のせいにする騒動を表紙にした趣味の悪い雑誌と一緒に並んでいるのは、何とも皮肉なものだ。

散らかし癖は昔からだ。

足下には幼児用玩具やら、数千年前に存在した天才軍師がつくった知恵の輪が無造作に転がっているのを跨いで、部屋へと踏み入れる。だが必要最低限の生活用具がある周辺は綺麗なもので、そのテーブルを陣取っていたのは見慣れた人物だった。

「あ、界王神のじっちゃん、おかえり」

「何をやつとんじゃ、お前さんは」

脚の細工がきめ細かく、長いくらいがちょうど良いお気に入りのア  
ンティークチェアに詫び入れもなく座っていたのは悟空だった。  
オマケに、近頃気に入っていたお菓子を頬張っている。

強い味が癖になるチーズを使い、クルミと松の実が香ばしいケーキ  
が半分以上も食べられていた。

それを見て、老神は啞然とした。

「い、一週間も予約し続けてやつと手に入れたラフィネが!!」

「美味かったぞ」

「当たり前じゃ!!! 儂が惚れた最高品じゃぞ!!!」

「ご、ごめん。オラ腹減ってて」

気まずそうに謝る悟空にこれ以上怒る気にもなれず、悟空が唯一残  
したケーキの一切れをかつさらい口に放り込む。  
飲み物が欲しい所だが、先に聞きたいことがある。

「で? 何しに来たんじゃ」

ろくな事じゃなかったら呪ってやると思っていれば、悟空は口ごも  
った。

「...、逃げてきた」

予想していたが、老神は重く息をついた。何から逃げてきたかは聞  
かずとも分かる。

「今度は何を言われて騙された?」

「...、今回は真面目だったんだ」

「大方、別の惑星で強い奴が現れたとかじゃろう」  
「……………」

凶星だったようだ。

悟空から小気味よい腹の音が鳴る。

一番美味しい菓子を食べて置いて憎らしい限りだが、怒る気も失せてしまった。

ガサゴソと、この乱雑な部屋にひとつだけ存在する下界の家電、冷蔵庫から何かを取り出していた。

皿に乗ったものを悟空のテーブルに置けば、老神はゆっくりとした動作でそれを頼張る。

たっぷり入った野菜と牛肉をサワークリームに混ぜパイ生地で包んだ空腹感を刺激する香りに、悟空はそれを凝視する。

「ピロシキじゃ。食べたいか？」

音速で頷く悟空に、餌を待つ子犬のような印象を彷彿とさせ、あのうら若い界王神が悟空を構いたがる理由が分かった気がして後悔した。

「キャラメルプディングとプリンまんがあるよ。あと蓬饅頭は……」

食べるなという前には、悟空は既に頼張っていた。

ため息を吐くのも面倒で、近くにあった雑誌を手に取り目を通す。

老神の真似をしたいのか、タイトルも見ずに近くにあった本を手に取り読もうとしている悟空を、老神はその本を見て慌てて奪い返す。残念そうな顔が返ってくる。

「これは駄目」

「なんで？」



「読めば後悔する」

実際、己も少し後悔した。

本のタイトルには「暗い日曜日」と書かれている。  
老神は代わりに、可愛らしい本を悟空に渡した。

「これ、絵本だ」

「そうだ」

「オラ、子供じゃねえ」

ザッハトルテを頬張りながら、ふて腐る悟空はどう見ても実年齢に見れない。

「嫌なら、あやつを此処に呼ぶぞ」

「ごめんなさい」

すぐに即答して、悟空は本に目を通す。

頁をめくる度に百面相のように変わる悟空の嬉しそうな表情を、老神は気配で読み取る。

己は、彼が読む暖かく柔らかな物語ではなく、血腥い歴史の本を読むその正反対な一時に、老神は少しだけ後悔した。

この部屋には、彼が悲しむ本ばかりが棚に収まっているからだ。  
こうした、柔らかな時間も悪くないと感じつつ、老神は興味の無かった優しい本を探してみようかと考えた。

こんな穏やかさも、  
久方振りでこそばゆかった。

## 老人と子供？

怖い話でもどうですか？

「こんな所にいた」

軽やかな音でノックを響かせ、ドアを押し開いたのは悟飯だった。乱雑に散らばった玩具や本を避けながら部屋に入ると、椅子に座って本を読みふける老神に会釈する。

「すみません、父が入り浸っちゃって」

本から視線を外し、老神は茶を飲みながら隣に眠る人物に目を向ける。

本棚を背もたれに、涎を垂らしながら眠っている少年が居る。外見は少年だが、しかしこう見えても孫が居る確かな年齢だ。

「暫く見ない間におかしい事をするもんじゃな。人間というものは」

「いえ、好きでこんな姿になった訳ではないので…」

「お主も苦労するのう」

苦笑しながら悟飯は父に歩み寄ると、悟空の膝に乗る本を片付けようと手に取る。

本のタイトルは『百万回生きたネコ』だ。その微笑ましさに悟飯は柔らかな笑みを零す。

ふと、悟空の側にある皿に視線がゆく。

「今日は杏餅と梨タルト、ずんだ餅とイチゴジャムとパン5斤を食

われた」

渋い顔をしながらそう呟く老神に、悟飯は申し訳なさそうな顔をする。

「本当に、すみません……」

「構わん。ひとりで食うのも味気なんだ」

興味が無さそうに呟いているが、悟飯は笑顔を崩さなかった。

素っ気なく言っけていても、この人の為に数十人分の菓子を用意するあたり老神の優しさが伺える。

父を抱き上げて、ふと床に無造作に置かれた本を手取る。

「天文、哲学、兵法、宗教。物理学の相対性理論まで、色々読んでいるんですね」

「10分で飽きてしもうた。僕は物理学は苦手じゃ」

そう呟いて、読んでいた本を放り投げた。本は最近、若者に流行っている『携帯小説』の一種だ。

「そうだ。この間、僕が差し上げた本は面白かったですか？」

確か、何か面白い本はないかと老神に聞かれ、悟飯は快く引き受け3冊ほどあげたのだ。

だが、老神の顔は瞬時に強張る。

「……お前さん、ありや嫌がらせじやろう」

「え、どうしてですか？」

顔色を青くした老神が、顔を俯かせ口を開く。

「ふた月前、それを読んだキビトがドアの隙間や天井裏をやけに怖がるようになった…」

「へえ、…」

他人事のような顔をする悟飯に、老神はたまらず怒鳴った。

「誰がホラーものを貸せと言ったんじゃ!!」

そう叫んでテーブルに叩きつけたのは一冊の本だ。

黒ずんだ色の群青のカバーに包まれた本には、血に似た赤い文字で『呪怨』と書かれていた。

それでも尚、悟飯は首を傾げる。

「面白くなかったんですか？」

「これを面白いと表現するのかお前さんは?!」

「一学者としては、物理的に突っ込みたい所が沢山あって面白かったですよ?。まあ、父さんと弟は悲鳴上げてましたけど」

老神も思い当たる節があつたのか押し黙ってしまった。

「実写化したんですよ。観ますか？」

悟飯の誘いに老神は一分程、苦悩してゆっくりと頷いた。

別に面白くないとは言っていない。ただ、内容がおぞましいだけなのだ。

「海外でリメイク版もいくつか出ましたけど、やっぱり本場が一番ですよ」

楽しそうに語る悟飯に、何がとは老神は聞かなかった。

聞いたら最後、他の界王達も巻き込んで時間的に夕方なのでそのまま怪談話に成り行きかねんからだ。

「所でじゃが、」

「何ですか？」

投げ返された『呪怨』をすっかり本棚に納めながら、悟飯は老神の声に振り向いた。

「実写化とはなんじゃ？」

「、……ええと」

どこから説明した方が良くと考え、悟飯は苦笑いで後日、色々用意しますと老神に約束した。

・翌日・

「…、ご先祖様」

「何じゃ、若いの」

2人の界王神は、呆然として目の前にある巨大なパネルを見上げた。

「集まって、何をするんでしたっけ」

「試写会というやつじゃ」

背後を振り返れば、暇を持て余していた界王達も呼ばれたのか、何やら会食の用意をしている。

「試写会って、何を見るんですか？」

「…見れば分かる」

老神の言葉に何かを感じていたのか、キビトは顔を青くして立ち尽くした。

それから一時間後、無理矢理一緒に連れてきた悟空を小脇に抱え、爽やかな笑顔でやって来た悟飯の挨拶の元、試写会は開始された。

そして試写会が終わって2週間ほどは、暗闇に怯える界王神と界王達が居たとか居なかったとか。

「僕に説明できない現象なんて存在しません」

## コラボった

### ポケモン金銀発売記念

「お父さーん、お昼ご飯ですよー」

暖かな陽差しが照らす森の中で、悟飯は修行しているはずの父を呼んだ。

声が静かに響きわたり数分経つと、ガサガサと林の奥から父の気配がやって来る。

「わりいな悟飯、呼んで貰って」

「いえ、構いませんよ。ところで…」

にこりと微笑んで、悟飯は視線を少し下に降ろした。

「その小脇に抱えている物体は、何ですか？」

悟飯の顔は笑顔のままだが、頬はひきつっている。

指で示した、悟空が小脇に抱えている物体を凝視している。

それは、黄色で黒のギザギザ模様が入った丸い生き物だった。

生き物だと分かったのは、小さい手足と触覚の役目を果たすと思われる長い尻尾とピクピク動く長い耳、そして可愛らしくつぶらな瞳がこちらを見上げていたからだ。

「…何ですか、それ」



「んあ？あつちの湖にいたんだ。腹減ってるみたいでさ」

本当なのか、手足をダラリとさせて悟空の腕の中で好きに抱えられている。

「そもそも、動物なんですか？」

「ちゃんと鳴くぞ、んなー!!」

両手で生き物を抱き上げ、悟飯の目と鼻の先まで持ち上げると、生き物は小さな手をあげた。

「ピカチュウ」

その可愛らしい鳴き声に、悟飯はピシリと固まった。

様々な動物図鑑を見てきたが、こんな鳴き声、それ以前にこんな動物見たこともない。

ふと、鼻先の距離で動物の体から視認できるほどの静電気が走った。自分と父は何ともない静電気だが、普通の人間にとっては足腰に激痛を与える衝撃だ。

「こ、この子!!電気持ってますよ?!!!」

「まあ、オラも最初は吃驚したけどな」

と、言うことは一度は喰らったらしい。

こういった特殊な特技を持つ動物の威嚇攻撃は侮れないのだ。

だが今は父に懐いているのか、可愛らしく鳴いて父に頬をすり寄せて甘えている。

自分に好意を寄せる相手にはとことん甘い悟空も抱き返せば、動物も嬉しげに鳴き声と小さな雷を落とした。

それに対して何ともない父も正直強者だ。

この場合、羨ましいのか嫉妬して良いのか、危険な抱擁を共にしたのか迷うところだが、悟飯は溜息を吐いた。

「僕、お母さんを説得する自信ありませんよ」

それでも父のお願いを断れない悟飯は呑気に戯れる可愛い光景を、とりあえず眺めた。

翌日、何やかんやで騒いでいたが、翌朝に少年がやってきてその動物と一緒に仲良く去っていった。

「本当、世の中って不思議ですよね」

もう少しで、父がアレを丸焼きにしようとしたという事は、ここだけの内緒で。

名前、決めてただけどなあ

コラボった？

宇宙人

それは、どうみても明らかに

「カエルでしょ」

冷静に言つてのけたのはブルマだけだった。

この場に悟飯が居たら、頭を抱えて有り得ないと呟いていただろう。

「カエルはカエルでも、ただのカエルではないであります！！」

変わった黄色い帽子が、言葉と一緒に跳ねる。

全体的に水気を帯びたぷりつとした緑色の肌に、突き出た尻。身長は70cmも満たないだろう。

丸い大きな目には、ぱちくりと自分を見つめるブルマ達を見返す。その喋るカエルをテーブルに立たせ、見つめるのはブルマとトランクスとパンとコレを最初に発見した悟空だった。

トランクスは青い顔して必死で動物図鑑を漁っていた。

無駄な足掻きだろうと思いつつ、ブルマは息子の不審げな行動をスルーした。

「んで、おめえは何処から来たんだ？」

パンと一緒に、興味津々にカエルを見る悟空が問えば、カエルは胸を張って応える。

「よくぞ聞いてくれました！我が輩は、ガマ星雲第58番惑星ケロン星、宇宙侵攻軍特殊工作部隊隊長、ケロロ軍曹であります！」

聞いた瞬間、噛むような長ったらしい名前を言っ、ケロロ軍曹と名乗ったカエルはビシッと敬礼した。それに爆笑したのはパンと悟空だけで、ブルマは冷静にカエルを頭の前から足まで眺め、呟いた。

「侵攻軍って事は、この星を襲いに来たんでしょ？孫君、捻り潰しちゃっても構わないわよ」

「な、なななんですとー？！！！」

ブルマの言葉にカエルは引きつった悲鳴を上げ、楽しげに捕まえてくる悟空の手から必死に逃げようとする。

「あたし、カエル嫌いな」

ごめんね、と言葉では謝っているが、ブルマの眼は笑っていない。  
あの眼は過去にトラウマを抱えた者の眼だ（アニメ・フリーザ戦参照）

「キヤーー、んなご無体なああ！！！」

必死に泣き縋るカエルが可愛くて仕方がないのか、悟空は楽しげに抱き抱えているが、隣にいるパンは祖父の趣味の悪さに若干引いている。

「よかったなあ、おめえ。ベジータが此処に居たら消し炭にされてたぞ」

「ベジータって誰でありますかああ？！！！」

「俺の父さんだよ」

宇宙人だと分かり図鑑を放り投げたトランクスは、まじまじとカエルを見つめる。

怯えるカエルに微笑めば、カエルは涙を止めて警戒を解いた。しかしそれも束の間、トランクスは眼を光らせ悟空からカエルを取り上げた。

「あー！、トランクス、それオラのだぞ」

「チチさんが絶対怒りますよ」

「え？！おじいちゃん、アレ持って帰る気だったの？！！！」

「駄目か？」

「絶対イヤよ！！！」

「それにしても、抱き心地良いですね、この子」

頬をつつき、頭をなで、驚掴みたくなる衝動を何とか抑える。

「情が移ったら、後々めんどうよ？」

ブルマの爆弾発言のようなセリフに、場は一瞬静かになる。カエルは恐る恐るトランクスを見上げれば、トランクスはブルマとそっくりな笑みを浮かべていた。

「実験だけは勘弁して~~~~!!!!」

CC社に響きわたるほどに悲鳴を上げて逃げ回るカエルを、2時間も掛けて宥め、食べ物で釣り、危うくベジータに踏みつぶされるのを阻止し、一階で放し飼いにされている迷子竜に食べられそうになること6回。

そんな慌ただしい間にも、何だかんだ言いつつ壊れた宇宙船を直してくれたブルマには一度も懷かず、カエルは遠い宇宙へと帰っていた。

「あの子、家事はうまかったわ」

## 幸せまであと一歩

小鳥の囀りに似た、軽やかな音を立てて小さな唇が頬に寄せられた。首を傾げて見返せば、少女は瞳を輝かせて微笑む。

『次に会ったら、悟空さがしてね』

決して遠くない記憶の一片を夢に見て、ゆっくりと瞼を押し開いた。浅い眠りから覚めた視界に広がるのは、真つ青な空。

そして鼻腔を擦る花の甘やかな香り。

眠りが醒めて起き上がれば、うたたねする前の記憶が瞬時に蘇る。

天下一武道会での烈戦の後、お前が後継者に相応しいと言い募る神様から逃げるように、結婚すると決めた美しい女性となったチチと、筋斗雲で牛魔王の城へと向かう途中だった。

その途中で、チチはこの場所に降りたいと願い出たのだ。山の向こう先まで続いている美しい花畑には見覚えがあったが、どうにも霞がかってよく思い出せない。



筋斗雲、と声を響かせれば近くに居たのか直ぐにやってくる。チチの姿が見えないと問えば、筋斗雲はゆらゆらと動き出した。

黙ってついて行けば、色鮮やかな花畑の中に埋まるように彼女はうずくまっていた。

寝台に似た柔らかさ包まれて眠る彼女の元へ行けば、悟空は起こす事を躊躇ってしまった。

ふと少女だったチチの小さい背中が脳裏をよぎる。

そういえば思い出した。

初めてチチと出会った時も、この花畑に立ち寄ったのだ。

あの頃はチチが何故、頬を染めて別れ際にあんな事を言ったのか全然解らなかったが、今も結婚についてよく解っていない。

一緒に生活するとはクリリン達から聞いたが、養父が生きていた頃と同じ様に家族になってくれるのだろうか。

養父が死んでひとりになってからは、様々な人々と出会ったがずっと一緒に居ることはなかった。

寂しさを感じる暇もなく修行に明け暮れていたからか、チチの再会は本当に驚いたものだ。

静かに眠るチチの傍に座り込んで彼女の寝顔を見下ろしていれば、先程の夢の中で見た子供の頃の事を思い出す。

頬に寄せられた少女の唇は、悪戯された感触に似ていて、純粋な好意を感じた。

天下一武道大会で結婚を決めた時も同じ様に頬に唇を寄せられたが、あの時と違う。

少女の頃にはなかった、大人になった彼女から香る甘い薫りに、ドキリと心臓が僅かに跳ねただけだ。

クリリンからはあれは「キス」というものだと言った。

必ず顔にしなければならぬのかと問えば、何故かクリリンは顔を

赤くして怒ってしまった。

ヤムチャからは、特別に好いた相手とする行為だと聞いた。

まだ悟空の背丈が低い頃、似た光景を見たことがある。

CC社で、ヤムチャとブルマが恥ずかしげに唇を合わせていたのを一度だけたまたま見た。

恥ずかしそうだったが、ブルマは目を細めてとても嬉しそうだった。

そのあと見つかってしまって怒られたけれど、唇を合わせる行為を問えば、大人になればきつと分かると言われた。

チチが贈ってくれたのもキスなら、ヤムチャとブルマがしていたキスも同じなのだろうか。

境界線が分からない。

『次に会ったら…、』

幼い少女と、大人になったその少女。

鼻先を掠める花の甘い香りと、チチの香りが重なる。

こそばゆさを感じ、悟空は頬を染める。

もどかしい気持ちだが、悟空のチチへの感情を変化させてゆく。  
感じたことのない、息が詰まるような体の熱。

風が、踊るように花を撫でた。

空は雲さえも追いつ返す清々しい青。

さわさわと木々が小鳥と鳴いている。

ふたりしか居ないこの場所で。

ゆっくりと手を伸ばし、チチの頬に付いた花弁を取ってやると、悟空は目を閉じてそ、とチチの唇に自分の唇を落とす。

かさついた己の唇と違い、ふくらみのある唇が触れるくすぐったい感触に、悟空は小さく息を吸った。

すぐに離れた口付けは、悟空の頬を羞恥に染めるには十分なものだった。

何も知らずにいた己が、人をこんなにも『好きになりたい』と感じゆくのは酷く怖くて。

けれど泣きなくなるほどに、目の前の女ひとを守ってやりたいとも強く感じていた。

分かったのは、己が初めて抱く感情が、ただひとりの為だけに存在していることだ。

「あ、れ…」

じわり、と視界がぼやけ、頬に涙が伝う。

どんなに拭っても、涙は止まらなかった。

胸が痛い、胸が痛い。

涙が、止まらない。

「悟空さ、」

震える声に呼ばれ、聞こえた声に目を向ければ、頬を染めたチチが悟空を見上げていて、同じく涙を流していた。

チチは悟空の涙を優しく拭ってやり、そして幼子を宥めるように額に口付けを落とす。

「怖がらなくていい……」

どれほど、チチはこの時を待っていただろう。

ちゃんと言える、聞いてくれる。

私達はもう、簡単に約束を交わすほど無知な子供ではなくなったのだから。

「悟空さ、一緒になって欲しいだ」

少女の頃の笑顔と一瞬重なったが、すぐに消える。

悟空は泣き声を堪えて抱き付くチチを胸に抱いて、決意の口付けを優しく唇に返す。

それは甘く、孤独を溶かすような暖かさを持っていた。

かつて幼い2人が約束を交わした、静かで誰も居ない花畑で、2人の出会いを導いた筋斗雲が見守るその光景は、きつとそれは「永久の愛」と呼ぶのかも知れないと、2人はまだ知らずにいた。

それは、誰にも負けない愛の証

## memory

眠気を誘う、うららかな午後の日差しを窓から受け、そろそろ昼餉だなどのんびり考えていれば、強烈に空腹に刺激を与えるほどの香りが鼻腔を襲い、誘われるままダイニングへと向かえば、やはりテーブルの上には色鮮やかな料理が並んでいた。

軟骨をすり潰して練った鶏肉を油で揚げ、蜂蜜で漬けた果汁たっぷり  
りの林檎酢を掛けた甘酸っぱい肉団子。

薬味と刻んだ野菜、餅米をぎっしり詰め込んで蒸し焼きにした豚の  
香草焼き。

玉葱を丸ごと使ったオニオンスープと様々な野菜を煮込ませたポト  
フが鍋ごと続き、塩蒸した魚の身を混ぜ込み、筍と椎茸と刻み生  
姜が飾るシンプルな混ぜ飯が大きな桶に山盛りになっている。

素揚げ、漬け揚げ、煮付けの3種類の手羽先。

トマト、バジル、魚介類、明太子のパスタの隣では、ジャガイモを  
山ほど使ったマッシュポテトの上に、すこし辛みのある薬味スープ  
が掛けられている。

その他にも様々な料理がテーブルの隅々に並べられたその芳しい香  
りに導かれ、部屋で勉強していた悟飯と、遊んでいた悟天とトラン  
クスがやって来たタイミングで、料理を終えたチチとブルマはやり  
遂げた顔をした。

「今までにない達成感だわ」

「うわぁ、これ全部ママが作ったの?!」

目を輝かせて喜ぶトランクスに、ブルマは胸を張って応える。

「私だって、やるときゃやるのよ」

「んだ、此処まで作るには相当の努力はあっただな」

力強く頷くチチに、ブルマも安堵の息を吐く。

2人目の子を授かったブルマは、流石に料理が全く出来ない娘には言いづらいのか、チチに料理を教わり始めたのは5ヶ月前だ。

軽食程度なら作った事はあるが、食材で本格的に作るのは初めてのブルマは、最初は包丁の持ち方さえも危なかったが、チチの熱心な指導により、ようやく今日、チチから努力を認められたという訳だ。

「ほら皆、お腹空いたでしょ。食べましょう!!」

『わーい!!!』

声を揃えて返事をするトランク스와悟天に、ブルマは洗面所で手を洗う事を注意する様を、悟飯はずっと黙って眺めていた。

「どしただ？悟飯」

全員分の麦茶をカップに注ぎながら、立ち尽くしている息子に、チチは不思議そうに声を掛けた。

悟飯は辺りを見渡して、母に問いかける。

「ねえお母さん。お父さんは出掛けているの？」

確か自分の記憶では、2時間前は悟天に肩車をせがまれてトランクスもそれに便乗していたのを庭で見た気がする。

何時もだったら、こんな芳しい香りに瞬時に現れるはずの父は、い

まだ姿を現さなかった。

「ああ、奥の部屋に居るだよ」

「お母さん達の寝室に？」

珍しい。

寝る時以外は、清潔感と涼やかな香炉の薫り残る寝室には留まらない父は、いつも日差し暖かな外で見かけていたが。

首を傾げる息子に、チチは小さく微笑んだ。

「きつとビーデルさんと、一緒だろ」

「えっ、ビーデルさんと？」

そういえば、30分ほど前にビーデルが家に遊びに来ていたのだった。

大学に提出する課題が終わらなくて、けれど気の良い彼女は悟天達やチチ達とお喋りしてから帰ると言っていたのを思い出した。

「悪いが悟飯、悟空さんとビーデルさんと呼んでくれねえか？」

「良いですよ」

返事が早いのか、手を振って寝室へと向かう悟飯の背中をチチは見送った。

短い廊下を奥に歩けば、見慣れたドアが見えてきた。

ゆっくりとノックをしようとして、部屋の中からふたつの笑い声が響いてきた。

軽やかな音を立ててドアを押し開いてノックをすれば、ダブルベッドの向こう先にいる二つの頭が、大きな窓から指す日差しを受けて、艶やかな黒髪を揺らせてこちらに振り返った。



「悟飯」

笑顔で2人同時に名を呼ばれ、悟飯は笑い返した。

よく見れば、父と、己がいま恋している彼女はしゃがみ込んで何かを眺めていた。

「何を見てるんですか？」

お昼ご飯ですよ、と続けようとして2人が見ている物を視界に入れて言葉を無くす。

それは写真だ。

少し古びた、沢山の写真がアルバムに収まっている。

写真に写るのは、己が幼い時の姿だ。

「何でそんなもの見てるんですか!!」

頬が熱を持ち、恥ずかしくて写真が収められたアルバムをひたたくろうとして、それは父が横から奪った。

「別に減るもんじゃねえだろ？」

「減ります!!」

そう叫んでも父は聞いてはくれず、なおもアルバムをビードルに見せようとする。

「これは悟飯が初めておねしょした時だ」

「うっわ、可愛い〜」

悟飯に背を向けて、本人を無視して盛り上がるようにする2人に、困

惑して少しばかり怒りが込み上げたが、ふと思い出して意地悪い笑みを浮かべる。

「お父さん、そんな事してて良いんですか？悟天達がお昼ご飯全部食べちゃいますよ？」

悟飯のその言葉に、父は笑い声をピタリと止め鼻に意識を集中させる。そうすれば、力強くこちらに振り返った。

「何で早く教えねえんだ！！！」

叫んだのと走り出したのは同時で、僅かに風を乱して父はリビングへと駆けていった。

すぐさま数人の笑い声が開いたドアから響いてくる。

「まったく、…」

父の子供じみたはしゃぎ様に悟飯は溜息を付けば、ビーデルは鈴の音に似た笑いを零す。

「ごめんなさい。悟天くん見てたら、つい悟飯くんの幼い時も知りたくなっちゃって。おじ様がアルバムを出してくれたのよ」

寝室の所々に飾られた家族の写真を、ビーデルは愛しい眼差しで見つめる。

そつえば、ビーデルは早くに母を亡くし父子家庭だ。父は娘を人一倍案じているけれど、拭えない寂しさがあるのだらう。

悟飯も家族を寂しがる時期はあったので彼女の気持ちは分からない訳ではない。

ふと、ビーデルは足下に落ちていた一枚の写真を拾いそれを見て、ビーデルは何とも複雑な顔をした。

悟飯もその写真を覗き込めば、すぐさま記憶が蘇ってくる。

その写真の中には、金色の御髪と翡翠の瞳を持つ、2人の父子が写っていた。

いまでも変わらない精悍な顔立ちの父が、幼い時の悟飯を暖かく見つめ、悟飯は父を尊敬の眼差しで見上げている。

「この時の悟飯君って確か、  
「セルゲームの時だよ」

ビーデルの手から写真を返してもらつと、アルバムへと戻す。抜け出てきた頁へと戻せば、ビーデルはまたアルバムに魅入られる。

「皆さん、写ってるわね」

写真に指を添え、ブウ戦が終わってから知り合った人達の、少し若かりし頃の顔を見ていく。

ラディッツ戦から始まり、ベジータ戦やセル戦等で長いブランクがあつて僅かな写真しかないが、それでも母は一枚でも多く思い出を残してくれたようだ。

年齢ごとに振り分けられた己の幼少期の写真に、悟飯は少しだけ胸が痛む感覚を覚える。

セルゲーム前の誕生日の写真を過ぎて、ふとビーデルは首を傾げた。

「おじ様、写ってらっしゃらないわ」

パーティーやキャンプ、様々な仲間達や家族の風景の写真はあつても、そこには居るべき筈の人が居ないことにビーデルは気付いた。その言葉に、悟飯は喉を詰まらせた。

ビーデルは、セルゲームの時に父が死んだ事をよく知らない。そもそも二度も生き返り死人なのに自由に動き回れるなんて、一般人にどう説明しても納得してくれるのは実に骨が折れる所だ。それでもビーデルは彼女なりに、悟飯達の存在を認めてくれている。それだけで十分である悟飯にとっては、いままで話さなかった訳でもある。

寂しげな顔で、父の居ない風景を切り取った写真を見つめる悟飯の横顔を、ビーデルは一度瞳を伏せて、はにかんだ笑顔で応えた。

「おじ様も、そんな顔で写真を見てたわ」

悟飯が写真の中で成長していく度、父は言葉数少なくなりはしたものの、ビーデルに向けて弾んだ笑い声には愛しさが込められていた。

「おじ様、仰ってたわ」

写真に無骨な指を滑らせ、父は家族が写るそれに視界をいっぱいにして。

『遠くにいても、忘れた事なんてなかった』

「…、お父さん」

耳に落ちたその言葉に、胸が酷く締め付けられる。

嗚呼、分かった気がした。

父を失った瞬間を夢で見て魘されても、酷く寂しさが涙をさそっても、不思議とその感情はすぐさま晴れやかに弾ける。

肩を軽く叩かれ振り返れば優しい風が吹き、頬を掠める。優しく頭を撫でられ、勇気づけられた気がした。

勘違いではなかったのだ。

父を傍に在ると感じていたことが、  
己が思っていた事を、父も同じ気持ちだと。

涙腺が崩れそうになるのを堪え、アルバムを静かに閉じる。

ビーデルが悟飯の傍に寄り添い手を握ってくる。

暖かった。

父の守ってくれるような暖かさではなく、儚いけれど愛しさが込み上げる暖かさだ。

少しだけ父と同じ立場に近付いた気がして、悟飯は自然とビーデルと口付けを交わす。

心を満たすその感情を知った時には、己は彼女に恋をしていた。

近い未来、この美しい人と将来を近い、そして子供が産まれたら、父と己の話をしよう。

まだ取り留めのない話だが、きっと両親に話したら喜んでくれるに違いない。

「ね、悟飯君」

恥ずかしげに、手を繋いだままりビングへ戻ろうとすれば、ビードルは花の綻ぶ笑みを浮かべた。

「皆で、写真撮りましょう！」

「今日ですか？」

「そうよ。こんな素晴らしい日に撮らないなんて、損よ」

窓から差し込む太陽の光に照らされ、ビードルがリビングへ駆けていく。

「明日、アルバム買いに行こうかな」

窓から見える庭は、幼い時に父と遊んだ記憶を崩すことなく、変わらない景色がそこにあった。

寂しさを埋めるように、いっぱい写真を撮ろう

## 清らかな願い

全ての命に、愛おしさが満たされれば。  
こんなにも世界は、素晴らしく思える。

電飾で彩られた家々からは楽しげな笑い声が。  
近くの公園では鈴の音と共に壮麗な歌が響いている。

不安だった夜の空はこの日を祝うように、輝く星星がまるで宝石のようだ。

吐けば白く濁る息も、いまは鬱陶しさは感じられず底冷えも気にならない。

CC社の庭で悟空は空を眺めていた。

「おじいちゃん!!」

軽やかなステップを踏んで、パンが悟空の背中に抱き付く。  
悟空は肩越しに振り向けば、パンが嬉しそうに笑いかけた。

「中に入ろうよ。これからお夕食だってっ」

今年で3つになった孫は祖父の頬に自分の頬を引っ付けて、愛情を示してくる。

その小さな温もりに、悟空も笑いかけた。

「そだな、腹減ったしな」

パンを肩車して中へと入れれば招待した仲間達が集まったのか、静かだったはずのロビーが、ツリーや御馳走を囲んで賑わいを見せていた。

「お！やあつと戻ってきた」

「よう、クリリン」

「外で何してたんだ？」

チキンを片手にクリリンとヤムチャが問いかけてくる。  
18号やマロンは他の女性陣達の輪の中にいた。

「ん？歌が聞こえてな」

「それは賛美歌でしょう、きっと」

ワインを片手に、悟飯がやって来た。  
仕事先から直接来たのかスーツ姿だ。

「賛美歌？」

「クリスマス等や、所謂宗教的な行事などに歌われる詩です。クリスマスは本来、宗教的というよりは農家の収穫祭が原点ですけどね。聖誕祭と呼ばれたのは収穫祭のずっと後の話です」

「へえ……」

ビーデルに手招きされ、パンが悟空の手を離れてゆく。  
視線をテレビの方へと向ければ、トランクスと悟天が楽しそうにTVゲームをしていて、それを遠目でベジータが七面鳥の丸焼きを片手に眺めている。隣にプレゼントの袋があるのを見れば、きつとク



リスマスプレゼントだろう。

女性陣達の方を見れば、他の者達より一層賑やかだ。

ブルマが用意していた大量の包みを、チチやビーデル、18号が楽しそうに開けている。

「ブルマさん、本当に貰って良いんですか？」

「これ、ブランドちゅー高価なもんばかりでねえか」

「いいのよ。8割は贋品にしてもらってる店の試作品なの。貰ってくれと逆に助かるわ」

鈴のように楽しげにお喋りする光景を、悟空は眼を細めて眺める。その父の横顔を、悟飯も嬉しそうに見つめる。

「お父さん」

悟空もクリリン達の隣に座って御馳走に手を伸ばそうとして、悟飯が父の名を呼んだ。

顔を上げれば、悟飯は庭へと続く出入り口に立って手招きしている。唇に人差し指を当てている所を見れば、どうやら他の皆には内緒のようだ。

歩み寄れば、悟飯は父を庭へと誘い出す。

「どした？悟飯」

腹が減ったと訴えようとすれば、悟飯が悪戯を思いついたような笑みを浮かべた。

「ねえお父さん。神殿へ行きませんか？」

「神殿、にか？」

はい、と悟飯はゆっくりと頷く。

けれど悟空は首を傾げ後ろを振り向いた。

「でも、パーティが」

「大丈夫です。ビーデルさんには伝えてありますから」

行きましょう、と悟飯が悟空の手を優しく握ってくる。

悟空はもう一度振り返り、チチ達の楽しそうな笑顔を眺め、そして悟飯に向き直る。

仕方がないなあ、と小さく呟いた後、2人は笑い合った。

悟空は指を額に当て、神殿への場所を探してゆく。

見知った気配にほくそ笑んで、2人の姿は誰にも気付かれずに賛美歌が響き渡る空へと消えていった。

「今晚和。悟空さん、悟飯さん」

悟空と悟飯が来ることを予め知っていたのか、瞬間移動で神殿へと辿り着けば、離宮の入り口で神であるデンデとMr.ポポが出迎えてくれた。

「何か、あるのか？」

「行けば分かりますよ」

悟飯に優しく背中を押され、悟空はデンデが導くまま離宮へと入ってゆけば、中では誰かが待っていた。

「おお、やっと来おったか」

「占いババ？」

悟空達を待っていたのは占いババだった。

「連れてこられましたか？」

「今回は特別に許して下さった。界王様に感謝せねばのう」  
「良かった」

悟空を置いて勝手に話を進める悟飯に、占いババも意味深に微笑むだけだ。

「なあ、誰か呼んだのか？」

「会えば分かるじやろつての…、」

占いババが来ても良いと合図を出せば、扉の奥から誰かがやってくるのが見えた。

目を凝らせて見ていれば、悟空は現れた人物を見て思わずきよんとする。

「じい、ちゃん？」

「元気そうじゃな、悟空」

頭上に輪を浮かべた、『あの頃』とまったく変わらない養父である孫 悟飯が優しい笑みを浮かべた。

「どうして、此处に？」

会えた喜びよりも、会えるとは思えなかった突然の養父との再会に、悟空は声を震わせた。

「お前は、天国へ来ても一向に顔を見せてくれなんだ。儂から赴いた」

死ぬ前は、あんなに大きかった養父が悟空には途端に小さく見えた。囁れた小さな手が、悟空の頬を滑る。

「僕が、占いババさんに頼んだんです」

そう言ったのは、距離を置いて父と祖父の再会を見守っていた悟飯だ。

「お父さん。パンが生まれてから、よく四星球を眺めるようになったって、お母さんが言っていました」

迷惑でしたか？と小さく問われ、悟空は首を左右に振った。どうして、この出来の良い息子は自分を喜ばせる事に長けているのだろう。

「1時間じゃ。それ以上は出来ぬ」

占いババがそう言つて、気を効かせて離宮から出て行つた。

悟飯も、祖父に手短に挨拶を済ませると外で待っていると名残惜しげに背を向けてゆく。

穏やかな沈黙が流れた。

悟空が何を話せばよいか迷っていれば、養父は悟空の名を呼んだ。

「どうしても最後にお前に、会つておきたかつたんじゃ」

「じいちゃん、…？」

「閻魔様から、転生の許しを頂いたんじゃ」

「てん、せい？」

酷く泣きたい気持ちだが、悟空の胸を痛ませた。

「新しい命を持つて、現世に戻つて来る」

「でも、それは…」

閻魔から転生の事は一度聞いた。

転生は今の魂を昇華され、新しい記憶と共に誕生を許される最も崇高で尊い行為。

けれど、特例がない限りは転生前の記憶はすべて消えてしまう。それが、転生による新たな人生を歩むための道筋だ。

「何を泣くことがあるんじゃ、悟空」

はらはらりと涙を零す悟空に、養父は幼子を宥めるように悟空の背中を優しく叩く。

「すまなんだ。あちらで、ゆっくりと待っていたかったが、どうやら出来そうもないで…」

「違う、違うんだじいちゃん」

小さな養父の手を、悟空は優しく包み込んだ。

「転生、て事は、また、会えるんだろ？」

「じゃが、儂に記憶はないのじゃよ？」

「オラが、見つけてみせる」

例え、何年掛かっても命ある限り。

そう言った悟空の笑顔は、悲しみを帯びてはいなかった。

今度は、養父が涙を流してしまった。

「なあ、じいちゃん」

オラは、じいちゃんに少しでも近付いたかな。

人に自慢できるような、決して立派な生き方を、父親をしてきた訳じゃない。

孫が、生まれたんだ。

自ら命を散らした時、もう二度と、地に降り立つ事がないだろうと思っていたのに、こんなにも命は尊いのに。

なんて贅沢で幸せで、我が儘な人生だっただろう。

「ありがとう」

自分を育ててくれて。

じいちゃんが居なかったら、オラこんなにも、全てが愛しいだなんて気付きもしなかった。

「最後に、お前に会いたいと願ったのは…」

涙を堪える養父の言葉が、冬の冷たい部屋を暖かくしてゆく。

「お前に出会って良かったと、伝えたかったからじゃ」

幼い頃の記憶を手繰り寄せるように、悟空は養父の体を抱き締める。そうすれば、養父は悟空の背中を撫でてくれる。

「ありがとう。そしてすまなんだ…」

いいよ、そう心の中で呟いた。

見つけるから。

出会えるから。

そして、また新しい記憶をつくれれば良い。

自分達が生まれ育った、命を懸けて守った世界はこんなにも、言葉にならないくらいの暖かい愛で溢れているから。

神殿の遙か遠くから絶え間なく響き渡る賛美歌が、世界の静寂を満たせば。

流れた涙が幸せへと変わってゆく。

ありがとう、ありがとう。

手に触れた温もりは、決して忘れないと誓おう。

また出会うその日まで。

だから、今だけは最後まで手を離したくない。

悟空は声にならずとも願わずにはいられなかった。

一番空に近い位置に浮かぶ神殿の縁に悟空は腰掛け、裸足をぶらりとさせていた。

あと1時間もすれば、遠くに眺めている山々と空の間から朝日が昇



るだろう。

闇夜と橙の光が柔らかく混ざり合う空を、眼を細めて眺めれば火照っていた頬が早朝の風に冷めてゆく。

「お父さん」

昔から、呼び方が変わらないその優しい声に無意識に笑みが綻ぶ。肩越しに振り返れば、そこには悟飯が居た。

「風邪引きませんか？」

そう言つて悟空の隣に座れば、悟飯は手に持っていたマグカップを手渡した。

中には暖かいコーンポタージュが湯気を立てている。

「予め、簡易ケトルを用意して置いて良かった」

身に染みる暖かいスープに、悟空はゆっくりと息を吐く。

「どうでしたか？」

悟飯の問い掛けの意味は分かっている。

「ん、あんがとな。悟飯のお陰だ」

ふつくらと悟空が微笑めば、釣られて悟飯も嬉しそうに笑い返す。

さよならを言うのに、名残惜しさはなかった。  
寂しさはあったけれど、養父との絆は失われる事はないと自信はあった。

天界へと帰ってゆく養父の背中を、敢えて見ずに離宮を離れたのは随分前のように感じた。

「後悔なんてしたくねえからさ」

養父を困らせない為に最後まで笑っていたけれど、繋いだ手を離したら涙が止まらなかった。

困った奴だと言って、養父は笑って去っていった。  
再会の約束を果たすために。

寝不足の瞼を、暖かい陽光が降り注ぐ。

「ほら、朝日ですよ」

地上では、家族達はまだ寝ているだろうか。  
それとも新しく幕を開けた日を、同じ気持ちではないけれど見上げているだろうか。

「な、悟飯」

寝不足で足元がふらつく悟空の手を取り、離宮へと歩こうとすれば小さく声を掛けられた。

朝日を背中に受けて、悟空の笑顔は輝いていて少し儂げだった。

「そんな顔をしないで、お父さん」  
「ごめんな」

どうして謝ったかは、悟飯には分からなかった。

けれど悟飯の手を軽く叩いてくる悟空の手は確かに暖かったから、それがこの『再会と別れ』の答えだと云うことは分かった。

「早く帰って、母さん達に話しましょうか。朝帰りの言い訳を考えるには骨が折れそうです」

「腹、減ったなあ……」

風が、2人の頬を撫でて去ってゆく。

それは始まりを意味する心地よい風だった。

ほんの、小さな願いを抱いただけだ。

それを別に叶えたいなどと思っではない。

ただ、その思いを忘れないように。

そっと、少しだけ眩しすぎる朝日に眼を背けた。

Bye - bye!!

それは、切なくて泣きたくなる合言葉。

窓から射し込む暖かな日差しを受けたリビングで、老界王神から貰った飛び出す絵本を眺めていたら、突然背中に体重が掛かった。飛び付かれる形でのし掛かってきた影に振り向けば、陽光に照らされて金糸に輝く毛並みを持つ獅子がじゃれついていた。

「何だ、遊んで欲しいのか？」

顔を押し付けてくる獅子のフサフサで柔らかい毛並みに顔を埋めれば、嬉しそうに長い尾をユラユラと遊ばせている。

猫科特有の縦瞳孔の瞳を細め、撫でてくれる心地好さに喉を鳴らせた。

遠い大陸に居る筈の獅子がパオズ山の孫家に来たのは、次男が拾ってきたからだ。

母親と兄弟達が密猟で死んでいた中で奇跡的に生き残っていたと、幼く大きな瞳を涙で一杯にさせて赤子だった獅子を抱えて帰って来たときは大変だった。

元の場所に戻したとしても赤ん坊の獅子がひとりで生きられる筈もなく、動物が苦手な母を何とか説得し、獅子が立派になるまで面倒を見ると次男が約束してから、もう数ヶ月が過ぎていた。

幼い頃から動物が友達だった次男には世話はお手のもので、獅子に

しては可愛らしい仕草で甘えてくるようになった。

次男が学校に通い出してから、獅子は次男が帰ってくるまでパオズ山で過ごしているが時折、こうやってやって来てはじゃれついてくる獅子に、己は悪い気はしなかった。

妻が洗濯から戻ってくる前に、本を片付けジャケットを羽織れば、獅子はその後ろを律儀に着いてくる。

外へ出れば気持ちよいくらいの快晴。

うんと背伸びをすれば、獅子も吊られたのか大きな欠伸をする。

何処へ行こうかと問い掛ければ、獅子はじっと見上げてくる。

「神殿に行くか？デンドエはおめえの事気に入ってるからな」

獅子は尻尾を降って応えてくる。

図体はでかくとも全力で甘えてくる様は微笑ましく思えた。

けれど先日、あんまり顔を見せてくれないと次男が嘆いていた。

きつと、別れの時が近付いている証拠なのだろう。そう諭せば、泣きそうな顔だったが友の事を思い決意した次男の顔は、幼くも何処と無く成長を垣間見た気がした。

さわさわと、黒髪と金に煌めく毛並みが風にさらわれる。

遠くを見やる獅子の眼差しは、まだ見ぬ故郷を思い浮かべているのだろうか。

「なあ、金獅子」

名を呼べば、尾を振って見つめてくる。

何処に行こうか

そう言って走り出せば、獅子も楽しそうに追い掛けてきた。

「…だからって、泥だらけのまま飛び付かないで下さいね」

遊び終えて帰ってきた父と金獅子が、出迎えてくれた悟飯に飛び付いたのは夕食前の夕方だった。

乱れた前髪と土に汚れた服を見れば、父である悟空と金獅子が全力で突進したのだと容易に想像がつく。

悟空は妻であるチチに怒鳴られる前に着替えを済ませ、同じく泥だらけの金獅子は悟天に綺麗に洗い流して貰っているだろう。

「途中で通り雨に合っちゃってな、そのまま遊んでたら川に突き落とされた」

「はは、悟天はまだ身長が無いですから。お父さんだとじゃれつき易いんですよと、」

「でも、大きくなったよなあ」

苦笑を浮かべて窓の外を見やれば、庭では悟天が金獅子の毛並みを撫でて抱きついていた。

微笑ましい光景だが、その光景が限られたものだとな二人は知っている。

「そろそろ、潮時でしょう」

「だよな、何処かへ行きたがってる…」

悟天は、それをちゃんと分かってくれるだろうか。

ふと、悟空は見知った気配が数人こちらにやって来るのに気付いた。悟飯も気付けば、悟空の頬についた泥を拭き取りながら応えてやる。

「お母さんが、久し振りにブルマさん達を招待したんです。今夜は御馳走ですよ」

後、御願いしますね。と悟飯は外に居る悟天に目配せして服を着替えに行った。

悟空は少しだけ切ない気持ちになったが、迷いを降りきり椅子から立ち上がり悟天を呼んだ。

陽が沈めば静かになるパオズ山も、今夜だけは賑やかだ。  
数カ月振りの再会に集まった仲間達は、御馳走や酒を片手に騒いでいた。

「そう、もう旅立つちゃうのね」

悟天の様子がおかしかった事を気にかけていたビーデルが、悟飯から事情を聞いていた。

「私も小さい頃、犬を飼ってたから悟天君の気持ち、分かるなあ。  
ずっと傍に居てくれたし、突然居なくなっちゃった時は、凄く悲しかった」

その点、悟天はちゃんとお別れが出来るから羨ましいとビーデルは笑った。

金獅子は悟天が見つけて、一生懸命育てた友人であり家族も同然だ。悟空と悟飯、何だかんだ言いつつ気を掛けていたチチも別れは惜しいが、悟天の気持ちには勝てまい。

悟空が御馳走から眼を離して遠くを見れば、トランクスの中が空だった。

トランクスは立ち尽くしたまま真つ直ぐ視線を前に向けている。

トランクスの視線の先を見れば、悟天と金獅子が背中を向けて座り込んでいた。

遠くへ行くなと母の言いつけをちゃんと守っており、トランクスはその背中を黙って見つめている。

悟天が手振りを交えて話しているのを、金獅子は真似ているのか尾が悟天の仕草に合わせて揺れる。

その光景を、トランクスは寂しそうに眺めていたのだ。

「トランクスは、一緒に居ねえのか？」

ブルマが声を掛けようとしたのを遮り、悟空が問い掛けた。

悟空の声に肩を震わせ、困惑していた。

トランクスも時々ではあるが、悟天と一緒に金獅子と遊んでいた。

困惑気味のトランクスは、おずおずと口を開く。

「だって、辛いし……」

トランクスは、悟天みたいに最後まで傍に居るのが耐えきれない様だ。

確かに情が移ると別れはとても辛いものだが短い間とはいえ、楽し



い時を過ごした友の旅立ちは祝いたい気持ちはある。別れを告げない光景はそれよりも辛いのだ。

悟空はトランクスの背を押すと、微笑んでやる。

「行つてこい」

「でも、…」

「多分、悟天ひとりじゃ『さよなら』言えねえかもな。だから、一緒に言ってくれねえか？」

トランクスがブルマに視線を向ければ、ブルマはしっかりと頷いていた。ビール片手なのがいまいち説得力に欠けるが、トランクスにはちゃんと伝わったようだ。

「ふふ、パワーあつてもやつぱり子供ね」

頬を赤らめて笑うブルマは悟空の隣に座ると、悟空の腕に自分の腕を絡ませた。

「孫君は、別れを惜しむ所なんて見たことなかったから」

「そっかあ？」

「そうよあ？すぐ、どっか行っちゃうんだから」

「んだなあ、悟空さを待ち続けるオラの気持ちも分かって欲しいぐらいだな」

珍しく酔ったチチも反対側から悟空を挟んで、腕にしがみつく。

「酒くせえよ二人共」

「ねえ知ってる？チチさん、」

「何がだ？」

「孫君つて子供の頃…」

「だつ、わつ、そんな昔の事言つなようっ」

悟飯とビーデルの助けを借りて宴会と化した場所から逃れれば、悟天とトランクスが此方に歩いてくるのが視界に入る。

金獅子の姿は何処にもなかった。

最後に見たときは、金獅子はいつもと変わらぬ仕草で悟天とトランクスにすり寄っていた。

金獅子は己の意思のままに、遠い場所へと旅だったのだ。

一度も振り返らず、友の眼差しを受けて歩き出した金獅子はきっと、過酷な道を強く逞しく歩み続けて行くだろう。

「おかえり」

優しく声を掛ければ、ずっと泣くのを我慢していたのか悟天が、悟空の顔を見て段々と表情が崩れていく。

下履きを握り締めて、鼻水を垂らして、悟天は瞳に滴を溢れさせていた。

「さよなら、て、元気でね、てゆったよ…」

おいでと悟空が両手を広げれば、悟天は直ぐ様飛び付いてきた。

ぐずぐずに鼻を鳴らせて、嗚咽を我慢しながらも悟空にしがみつく悟天の姿を、トランクスは静かに見つめていた。

笑みを漏らすのを堪え名を呼んでやれば、トランクスは表情を強張らせる。

「我慢すんな。泣いて友達を思うのは、悪くねえよ」

そして母親譲りの空色の髪を撫でれば、トランクスは唇を噛み締め  
て嗚咽を溢した。

二人の泣き声が、いつの間にか宴の終焉を知らせていた。  
悟空の腕に収まる、まだ小さな二人の体は小さく丸まり、やがて寝  
息が聞こえてくる。

「寝ちゃいました?」

そう言ってビーデルはブランケットを持ってきてくれた。

「交換するか? 悟空さ」

酔いが冷めたのか、チチとブルマもやって来たが悟空は首を縦に降  
らなかった。

「たまには父親らしい事、しねえとな...」

金獅子の気配はもう、近くにはなかった。

こんな寂しい気持ちは、どれくらい久し振りだろう。

言葉に出来ない優しい気持ちは少しだけ、こそばゆくて胸を痛めて  
くる。

「そんな顔するなら、会いに行っちゃえば?」

眼を細めて、ブルマは笑う。悟空の柔らかな黒髪を乱暴に撫で上げ、  
昔から変わらない笑顔を見せた。

「会いたいなら、会えば良いじゃない」

「誰にですか？」

悟飯が首をかしげて問えば、ブルマは両手を広げて嬉しそうに応える。

「世界中にいるわよ、何たって沢山旅したんだもん」

覚えてる？

始まりの場所。

冒険した場所。

人助けをした。

悪い奴も倒した。

沢山修行して戦って

そして友をつくった

「そうだなあ」

眼を閉じて、悟空は出会った者達の笑顔を思い出す。

なあ、金獅子。

君は長い旅をするけれど、いつだって君を見つけれらるんだ。

同じ時を生きている限り、思い出が消えない限り。

みんな、繋がっているんだと感じればどんなに辛くても「さよなら」は何度でも笑顔で言えるだろうから。

バイバイと言って、泣いて泣いて、最後に笑い会おうか。

様々な感情が交差するのは、そこに切なさが溢れるから。

**B y e - b y e ! ! (後書き)**

D B サイト一周年記念で書いた記念小説でした。

獅子を出したのはあまり意味はありませんが、家族愛や仲間愛が書けて楽しかったです。

皆さまも楽しんで頂ければ幸いです。

## 口は災いの元

雨雲の気配すら皆無な、昼寝日和と呼ぶにふさわしい程の暖かな陽射しを受けて、トランク스와悟天は何故か森林の広場のど真ん中で正座していた。

2人はまだ幼さを残す表情を強張らせ、目の前に立つ人物と目を合わせない様に視線を泳がせていた。

その2人の目の前で仁王立ちしているのは、悟飯だ。

普段はあまり怒らない青年が、無表情で2人を見下ろしているのが、それだけでもトランク스와悟天にとっては恐れの対象だ。

恐れと言っても、怖い教師に説教をされている心境に近いかも知れない。

緊張感の欠片もないことを思いながら、悟天は実の兄をチラリと見上げる。

途端に鋭い視線が出迎える。怒気は感じられないが、明らかに呆れた感じが空気を伝って肌にぶつかる。

悟天の隣で同じく正座しているトランクスも、ゆっくりと悟飯と視線を合わせる。

そして、悟飯はようやく無言の威圧を止めて口を開いた。

「お前達は、加減という物を覚えないの？」

静かな物言いだ、2人を無意識に怯えさせる。

『すみません』

声を揃えて2人は顔を伏せると、頭上から溜息が聞こえた。

「確かに大学が夏休みに入って、修行に付き合える時間が多くなる  
と言った。勉強漬けで体を動かすのは大事だしね。…だけど、奇襲  
をしても良いと言った覚えはないよ？しかも早朝に」

悟飯の言葉通り、ほんの数時間前、陽も昇り始めの早朝に2人は悟  
飯が寝ている自室へ侵入したのだ。  
しかもわざわざフュージョンしてまで。

名の通り奇襲すれば、悟飯は兎も角部屋の中がどんな惨状になるか  
…。  
気光波を打たれる前に阻止できたのは奇跡に近いくらいだ。

トランクスは、悟飯の呆れ顔に言葉を濁らせる。

「まさか、悟飯さんが『結界』を張らずに寝てるなんて知らなくて、  
…」

「……………どういう意味だい？」

しばし重い沈黙の後、悟飯は頬の筋肉をひきつらせて問う。何故そ  
こでそんな話になるのだろうか。何故、己が結界を貼って寝るとい  
う器用な真似をしなければならぬ？

悟飯の疑問を余所に、2人は不思議そうに悟飯を見上げる。

「だって最近、兄ちゃん神経質になって、部屋全体に『結界』を貼  
らないと眠れないって…」

そう言ったのは悟天。

……確かに最近、睡眠時間が逆転することは多いが、お前、僕の弟  
だろう、と内心で突っ込めばトランクスも続ける。



「それに、奇襲されるのは慣れてるからって」

悟飯は方眉を跳ね上げ、沸き起こる不毛な怒りを抑えながら問い掛ける。

「誰がそんな事を言ったの」

「お父さん」

「悟空さん」

口を揃えて名を出した人物に、悟飯は重い溜息を吐く。  
予想はしなかったが、呆れて考えも出来なかった。

「それを、君達は信じたの？」

素直に頷く2人。

「それで、それを信じた君達は一体どうなった？」

『アルティメットになった兄ちゃん（悟飯さん）に追いかけて回されました』

怒りにまかせて爆発したのは大人げないと反省もしたが、奇襲された理由を知ってしまったえば、別な怒りが沸いて出てくる。

「まあ正直、奇襲されるよりも奇襲する方が得意だけどね…」

ふふふ、と怒りのあまり独り言にしては氷のような冷たい声が、悟天とトランクスの背筋を凍らせる。

「あの、兄ちゃん。それってもしかしてお父さんに…」  
「わわわー！！バカ悟天！！」

慌ててトランク스가悟天の口を塞いだが、既に遅い。  
ゆつくりと、そして慈愛に似た笑みを悟飯は浮かべると、風が不気味に吹き荒れる。

「さて、僕の睡眠を邪魔してくれたんだ。早速、修行しようか」  
ざり、と悟飯が一步進めば、2人は一步下がる。

「に、兄ちゃん！！僕達、お父さんに騙されたんだよ？！！そうほら、痛み分けだよ！！元はと言えば兄ちゃんがお父さんと遊ぶから…」

「だから悟天！！お前は一言多いって！！！！」

「大方、修行をサボる君達の良い薬だと思ったんじゃない？ま、後で可愛くない事をしてくれたお父さんにも責任取って貰いますけどね」

雲さえも吹き飛ばす苛烈な爆発音と情けない悲鳴は、きつと家にいる悟空には届いては居ないだろう。

「お父さん、僕、けっこう寝起き悪いって知ってます？」

こらばった？

CAPCOM製作『大神』

の続編DS版『大神伝』の発売記念に

## 大御神の仔

大きな嵐が去った、朝陽が完全に顔を出していない肌寒い早朝。

なんだかいつもと雰囲気が違うと、パオズ山の奥へと飛んでいった悟天を悟空は別段慌てた様子も無く追いかける。

悟天が向かう場所は分かっている。

嵐で荒れ果ててしまった獣道を走り抜け、竹林を潜れば、中央に鎮座する樹木の下へと辿りつく。

予想していた通り、大きな嵐は樹木を手酷く削って行ったようだ。

それでも枝が押し折られようと小動物達を守ってくれたのか、樹木に集まってきた動物達は穏やかだった。

その動物達に囲まれた中央に、悟天はいた。

服が汚れるのもお構いなしに、荒れ果ててしまった樹木の窪みの方へ腕を伸ばしていた。

「悟天、どした？」

声を掛ければ、悟天は悟空に振り向いて空いている人差し指を唇にあて、静かにするよう促した。

悟空も悟天と同じく寝ころんで窪みへと眼を凝らせば、奥に、小さ

く蠢く生き物が居た。

暗闇の中でも分かる真っ白な毛並みに、此方を窺い見てくる黒い瞳。耳をピンと立たせて、一生懸命に伸ばしてくるの指に鼻を近づけさせていた。

どうやら、悟天はこの子の気配を感じたのだろう。

不安げな気配が悟空にもはつきり伝わってきて、周りを囲む動物達も二人の成り行きを見守っていた。

「おいで。此処は暗いよ?」

悟天の真意な眼差しと優しい声に、小さな生き物は警戒心を解いたのか悟天の指に体を擦りよせて来た。

怖がらせない様に優しく抱き上げて、奥の窪みからその小さな生き物を救い出した。

悟天の小さな両腕に収まっていたのは、子犬だった。

嵐のせいで薄汚れてもその美しい真っ白な毛並みは全然、傷ついてはいなかった。

悟空が子犬のあまりの可愛さに感嘆の息を零せば、子犬は首を傾げて悟天の頬を舐め始める。

涼しい朝の風が吹いて、樹木の葉を柔らかく乱した。

太陽の光が急激に眩くなり、悟空と悟天は咄嗟に瞬きする。

近寄って来た小鹿と鼻を突き合わせていた子犬が、可愛らしい鳴き声を上げたら、樹木の葉を乱していただけの風が突然、花の香りを纏いだした。

もう秋の季節だというのに春の季節の花だったり、真冬の花だったり、花の香りは様々だが不思議と悟空と悟天はその香りにとっても心地よさを感じた。

「おめえ、何処から来たんだ？」

顎を指先で撫でた悟空は、子犬に問いかける。

首を傾げていた子犬は、元気よく鳴けば悟天の腕から滑り落ちていく。

動物達の間を子犬は元気よく走り抜けた途端、子犬が走り抜けた跡を色鮮やかな花達が咲き乱れいったではないか。

風を纏い、子犬が嵐で荒れ果ててしまった花畑を走れば、瞬く間に季節取り取りの花が咲きほこってゆく。

その魔法でも見ているような眩い景色に、二人は子犬に寄り添う大きな存在を感じた。

同じく真っ白な毛並みに、見たことも無い赤い模様が美しい、大きな獣。

子犬のパートナーだろうか、太陽の光に薄れてもその心地よいさえ感じる力に、二人は心が満たされるような溜息をつく。

大きな獣は二人を見つめ返し、子犬に何かを囁いたのか、子犬は全速力で二人に飛びかかる。

咄嗟に避けたのは動物達だけで、ヘッドアタックを腹に喰らった悟空は、もんどりうつて後ろに倒れる。

悟天は慌てて子犬を引き剥がそうとしたが、悟空が笑っているので途中で止めた。

「はは、くすぐってえよ」

尚も頭を擦り寄せてくる子犬に、悟空もお返しにと撫でてやれば、子犬は風に呼ばれたのか空を仰ぎ見た。

子犬のまっさらな毛並みに、先程の大きな獣と同じ美しい赤の模様が一瞬だけ浮かび上がる。

少しだけ鳥肌が立つほどの力を感じたが、二人は別段疑いを持たなかった。

子犬が持つ不思議な【力】が、荒れ果ててしまっていた森を、美しい花で再生させたのだ。

誰でも真似出来るものじゃない。

ましてや自分達も強い力を持つのに、森の再生はどうやったって不可能なのだ。

奇跡を信じていいのか、神がかりな力に、いや恐らくは何処か違う場所で存在している子犬の、腕から伝わる温もりに、悟空と悟天は切なさを感じてならなかった。

「行っちゃうの？」

寂しそくに問えば、悟天は名残惜しげに子犬を撫でる。

素直に甘えてくる可愛らしさに、きゆう、と胸が幸福感に満たされたが、何かが違つと直ぐに分かった。

「もう迷うなよ」

二人を呼んだのは子犬だった。

それが偶然だったのか、それとも気まぐれに会わせてくれたのか分からないが、不思議な力を持つ者同士、まるで小さな願い事が叶った様な喜びが溢れて仕方がなかった。

子犬が迷いなく走ってゆく光の帯の奥では、小さな少年が子犬の名を呼んでいた。

名前は、よく聞き取れなかった。

今度また会えた時にでも、子犬の友だろう少年に聞けば良いだろうと少しだけ寂しげに笑えば、樹木は風に大きく葉を揺らせた。

「ねえねえ！！みんなには、どうやって話したら良いかな！！」  
「信じないんじゃないか？神様みたいな子犬に会ったなんて…」

笑い合いながら樹木へ振り返り、二人は驚きに思考が一瞬フリーズした。

子犬と帰って行ったと思っていた、大きな獣が嬉しそうに勢いよく飛びかかってくるのを視界に入れた時には、二人は子犬が置き土産に残してくれた花の絨毯に倒れ、甘く香る花弁を舞い踊らせた。

- オマケ -

「なあ、お前はいつ帰るんだ？」

「わんっ」

「わん、じゃねえよ。コラのっ掛かるな！！おゝもゝいゝ！！」

「お父さん、この子すごいよ！！さつき桜を満開にさせた！！」

## 正夢

掌から零れ落ちるものはいつだって

夢を見た。

自分が死ぬ夢。

皆が息を飲んで目を見張る中、笑顔で逝った夢。

『

』

嗚呼、何て言っただろう聞こえなかった。

そこだけ靄が掛かった様に曖昧で。

けれど、あの夢は分かる。

恐怖や不安よりも感じた、揺るぎない確信。

深夜で良かった、とほうと安堵の息を付いて、震える唇を引き結んだ。

隣で眠る愛する妻の美しい寝顔に口付をして、家族に内緒で文字通り家を飛び出した。

夜風は気持ちよくて星は美しく。

それは、明日に控えた悪夢の決戦など関係なく暗い闇を照らしている、

神殿に行こうとして、少し迷った。

迷ったまま瞬間移動をしたからか、眼を開ければ、吃驚してひっくり返って固まった界王が居た。



怒られるのは慣れていたけど、「なにがあつた？」と問われた。

正直な話し迷つたが、夢の内容を打ち明ければ、界王は少し悲しそうな顔をした。

そして、

「それはとても寂しい事だ」と言った。

ほろりほろりと、涙が流れた。

怖くはない

震えはない

ただただ、

「寂しい」と

心が漸く理解した

バイバイといったら

どうかどうか

己の覚悟を

叱らないで

もしも、セル戦の己の死ぬ瞬間だけを夢に見たら的な。

ローテンションなので短めで。

## 翡翠に映る風模様

ある晴れた昼下がり。

いつもと違う空の輝きに、いつだって心が躍り、切なさが掠めた。

優しい風に呼ばれたような気がして、生まれた時から変わらない髪を揺らせて顔を上げれば、それは目の前に現れていた。

「ハイヤードラゴン！」

巨体に似合わず小さな翼をはためかせ、彼の息子の友達の名を呼べば、幼な竜は機嫌良く鳴いた。

「久しぶりだなあ？元氣だったか！」

どんな存在にも差別せず屈託のない笑みを綻ばせ、彼は手を伸ばしハイヤードラゴンを撫で上げる。

修行を積み重ねてきた大きい手が優しく撫で上げればハイヤードラゴンは嬉しげに喉を鳴らす。

ふと何かに気づいたのか、翡翠色の瞳を空に向けた。

彼を中心として、広大な草原が風で弧を描き始める。

古くから存在する山々に囲まれた広場は、実は彼だけが知る秘密の場所で、ハイヤードラゴンが己の友と同じ匂いにする父を見つけたのは偶然だった。

笑みを浮かべたまま空を眺め続ける彼を、ハイヤードラゴンは不思議

議そうに見つめる。

「此处で、よく舞空術を練習したんだ」

空を飛べるなんてそんな楽しい事、自分も飛びたくて沢山練習した。けれどなかなかうまく出来なくて、そんな時に、此处を訪れて。

「風が、導いてくれた」

言葉で言い表せられないことを一杯見てきた。

導きのように優しく、時に激しく吹き荒れた。

己の力と、例えば波長とか所謂、自然を感じるとか。

「おめえも、そう思うだろ？」

ハイヤードラゴンは、不思議そうに小さく鳴いた。

「お父さん」

まだ成人しきれていない、独特な変声時期の声が柔らかく耳を擦った。

何だか惜しい夢だったが瞼を震わせ目を開ければ、案の定見慣れた顔が頭上にあった。

うたた寝をしてしまった事は分かっていた。ただ、一緒にいたはずの幼な竜が居ないことが少しだけ寂しかった。

「昼寝するのは別に構いませんけど、ちゃんと行き先は言っておきなね」

「…悟飯」

母に怒られるのは自分だ、と続けようとして父に遮られた。

「何です？」

幾分、成長した凜々しい顔が疑問を浮かべて問いかけてくる。それに彼は、ほっこりと笑った。

「ハイヤードラゴンに会ったぞ」

少し間を置いて、悟飯が口を震わせてしかし噤んでしまった。悲しげな顔をしてしまった息子に、父は困ったようにまた笑った。

「夢の中、で…」

悟飯が初めて、絶対的な死に直面したのはその時だ。

親からはぐれた幼な竜が遅しく育つのは困難で、大抵は病気が何かで死に至る。

甲斐甲斐しくも当時の悟飯が寝る間を惜しんで看病を続けたが結局は、奇跡は起こらないままハイヤードラゴンは永久の眠りについた。

自然を伴う死を、例えば仙豆や神龍に頼むのは摂理に背くと、教えたのは彼自身だった。

彼もまた、それを祖父から学んだのだ。

頭の良い悟飯はけれど一度は父に問いただしたが、冷たくなってゆく友を酷く不憫に思い、この静かな草原を墓にしたのはもう随分昔のように思えた。

「いいなあ」

上擦った声が、悟飯の口から漏れた。

「僕も、会えますか？」

「あつたりめえだろ？」

友達だろう？

そんな言葉は、別段響きはしなかった。

此処を訪れる度、暖かな記憶と共に君が蘇る。

空を飛ぶ真似事なんかじゃ、きつと君にはかなわない。

遙か昔から、空に愛されていた翡翠の輝き。

君が僕達と出会ってくれたことに、感謝を。

風に乗って、名は變じけり。

## t e a d a (前書き)

ブルマ主催の悟空争奪戦です。

作中には女性向け要素が含まれています。  
嫌悪を覚える方の閲覧を遠慮しています。



t e a d a

t e a d a 太陽

良く晴れた青空の下、遥かなる高みを臨むように、空色の髪を靡かせブルマは武舞台へと立つ。そして、右手に持ったマイクを口元に翳すと、大きく息を吐いた。

「…、第1回」

空に響きわたるのは、力強い声。

「孫 悟空争奪戦！！誰が可愛こチャンのハートを射止めるか決定・戦んんん！！！」

ブルマが叫んだ瞬間、周りの観客席を埋め尽くす者達が呼応し、叫んだ。

その合図と共に、リズムカルな音楽が流れ、花火は上がり、仕舞には花吹雪が舞い散る。

「ついに始まったわよ。この時が！！！」

ブルマが手を翳す度に花火は壮大に、音楽は轟き、各様の観客達も叫ぶ。

「孫君が大好きな奴らの為に開催してやったわよ。有り難く思いなさい!!」

ブーイングの嵐が降り注ぐ中、ブルマはふん、と鼻を鳴らし両手を広げれば、一瞬にして音楽は消える。  
観客席を見渡し、息を大きく吐く。

「此処は誇り高き正当なる戦場。欲しいものは、あそこよ!!!」

トランペットが鳴り響き、ブルマが手を翳す場所へと皆の視線が集まる。

数ある観客席の中、一番品のある天蓋付きの貴賓室で、このイベントの主役でもある人物が玉座で胡座をかいていた。

手すりに腕を乗せ不機嫌に、彼によく似合う紅玉の玉座に座っているのは、悟空だった。

悟空の足下では、彼が昔から気を許している数人の仲間達が座り込んで、呆れ顔でブルマ達を眺めている。

「もう、そんな顔をしないでよ孫君」

「誰のせいだって言うんだよ」

ブルマでは言葉で勝てないと十分に分かっているのか、溜め息で愚痴を消した。悟空の膝の上で大人しく座っていたプーアルが首を傾げ、可愛らしいつぶらな瞳は、悟空を見上げる。

「ねえ、これって何の大会？」

「…いや、聞かない方が良いと思うぜ」

プーアルの問いに、ウーロンは苦笑いで応える。事情を分かっている

るヤムチャとクリリンは遠い目をしていた。

そんな悟空達を余所にブルマは体をクルリと華麗に踊らせると、目を細めて微笑む。

「ルールは簡単！孫君に愛の告白をし、一番に孫君をトキめかせれば優勝よ」

「馬鹿馬鹿しい」

むす、と悟空が愚痴つてもブルマは気にしてもくれない。

そもそも、こんな事になると分かっていたなら即逃げていた筈だ。ただ、沢山のケーキがあると言われ確かに騙されたのは自分が悪い。逃げれば良いと思ったが、何だか逃げれば後が怖そうだと、長年の嫌な直感だ。

「では、選手を紹介しましょう！！！」

軽やかな行進曲が鳴り渡り、盛大な拍手が響く。

「まずは、地球代表！」

貴賓室の反対側にある入場口にスポットライトが照らされる。そこには誰かが立っていた。

「父親が宇宙最強なら、息子はラスボス！！孫 悟飯ー！」

名を呼ばれた悟飯は右手をコートのポケットに入れて、優雅に武舞台へと歩んでくる。その視線は、父親だけを見ていた。

「2人目は、宇宙一の噛ませ犬王子！ベジータ ー！！」

悟空の不機嫌にも負けず、眉間に皺を寄せ武舞台へと上がる。

「お次は、地獄代表!!」

ブルマの声を合図に、スポットライトの配色が変わった。

「歩く猥褻物、ターレス!!そして存在がくだい、セル　!!」

重い雰囲気を負って、ターレスとセルが無表情で肩を並べてやって来る。

観客席では地獄組が多いのか、挑戦的なブーイングが武舞台を覆う。

「そして最後に特別挑戦者!最高権力者にして趣味が盆栽集め、界王様!!」

金箔の紙吹雪が舞う中、殺気の籠もった視線を諸ともせず、しかも手を振りながら歩き出す。

「あの人って、暇なのかな…」

悟空に尻尾をいじられながらプーアルが呟いたが、誰も応えてはくれなかった。

「おい!ブルマ!!!」

武舞台に上がった途端、怒鳴り散らしたのはベジータだ。

「カカロットと戦えると聞いて来てやったのにつ、なんだこの仕打ちは!!」

「あら、何か間違っていた?」

「別に良いじゃないですか。噛ませ犬なんて昔からでしょう」

「貴様つ、不愉快な呼ばれ方をして悔しくないのか?!」

「いいえ、寧ろラスボスは僕にとっては妥当だと思います」

「ふん、キレたら洒落にならんからな」

「…ベジータさん、『存在がくだい』と言われた奴よりはだいぶマシなんですよ」

「基準が分からん!!」

「なあ、ワイセツブツって何だ?」

「そうですね、歩く24禁と似たようなものです」

「界王神様、そんな事どこで覚えてくるんですか」

「ふふ、秘密です」

仲が良いように見えるが、互いにしつかり冷たい視線を交わす挑戦者達を、ブルマは遠目に眺めるとマイクを握り直す。

「さあ!!メインキャラも集まった事だし、孫君に開会の挨拶で始めましょう!!」

全員の視線が悟空に集中する。

大きな欠伸を噛み殺し、胡乱げな瞳で、己を様々な思惑で見つめる者達を眺めた。

「…もう、勝手にしてくれ」

どうせ止められない。今から逃げたって、地の果て、天の果て、地獄の果てまで奴らは追いかけてくるのだから。

帰りたいという精一杯の願いを喉に押し込め、花火と共に鳴り響い

た音楽を目を細めて眺め、呟いた。

例えば巨大な山を削り取るほどの竜巻が現れたり、平たく言えば木星並みの彗星が今すぐ地球に接近しようとも、すぐに解決するのは目に見えていた。

だけど敢えて願うならばこう思ったかった。

「槍でも降れば良かったのに」

雲一つない晴れやかな青空を胡乱げに見上げ、悟空は呟く。  
目の前に広がる色鮮やかなご馳走を既に食べ終え、膝の上でアップルパイを頬張るブーアルを微笑ましく眺めながら、悟空の普段の穏やかな性格からは想像できない冷やかな言葉が発せられた。

「おいおい、あいつ等がたかが槍でくたばると思うかあ？」

焼き鳥を片手に笑ったのはヤムチャだ。それにクリリンも苦笑ながらも釣られる。

「いや、グングニグルとかロンギヌスとかでさ」

何故、悟空が神話に出てくる聖槍を知ってるのかとか、むしろ逆効果ではないのか？ いや、詳しくは知らないけど…。と2人は微妙な顔して返答に困っていれば、天蓋室<sup>テント</sup>に2つの影が映った。

「遅くなつてすまない」

「天津飯さん！餃子！！」

クリリンが名を呼んだ通り、天蓋室の入り口に立っていたのは天津飯と餃子だった。

「大会とやらは、もう終わってしまったのか？」

「一時間も前に終わったよ。傍観するだけでも疲れたぜ」

わざとらしく肩を捻るヤムチャに、天津飯は苦笑して皆の輪に入りウーロンから飲料を貰い座り込む。餃子は悟空の膝に乗るプーアルの元へ行き何かを話していた。

「折角招待して貰ったのに、来れなくてブルマさんは怒ってたか？」

「いや全然。むしろアレを見なかっただけ幸運ですよ」

そう言ったクリリンの視線はどこか遠くを見ていて、ヤムチャも苦笑を禁じ得ない。そんな二人の態度に、天津飯は嫌な予感を抱きつつ問わずには居られなかった。

ここからは音声のみとなります

ヤ「一番手は誰だっけ」

ウ「レスタ、みたいな名前の奴じゃなかったか？」

ク「レタースじゃないのか？」

天「…それで、奴は何て言ったんだ？」

『俺は別に、週1程度遊んでくれば、何も文句はねえぜ』

ク「、だそうです」

ヤ「うわぁ、キザな野郎だぜ全く」

ウ「だけど、ブルマは『奥手が堪らない』とか『色男』とか叫んでたぜ？」

ク「…ブルマさん、けっこう趣味悪いですよね」

天「それで、肝心の悟空はどう反応したんだ？」

ク「意外にも悟空には好感だったんですよ。笑ってたし。でも…」

天「何かあったのか？」

ヤ「その、悟飯がな」

『ターレスさん。お父さんが貴方に気があるのは、お父さんの只の気の迷いですよ』

ヤ「、て笑顔で切り捨ててな。アイツもアイツで余計な一言で」



『いや、一発ヤラしてくれんなら。別に良いし』

ウ「さ、流石、歩く猥褻物（汗）」

ク「まあその後、悟空直々に殴られてたけどな」

ク「2番手は悟飯でしたね」

天「あいつは、再会する度にファザコンの質を高めていたような…」

ヤ「ファザコンを既に通り越してるよ。ラスボスだし」

天「ラスボス？…悟飯は何て言っただ？」

『ねえお父さん。お父さんが僕を選んでくれたら、世界中のお菓子を沢山差し上げますよ』

天「買収してるよな。明らかに」

ク「はい、確実に。目が据わってましたし」

ヤ「手段を選ばないのは誰に似ただ？」

ク「悟空だと思いますよ。多分」

ヤ「結局、ブルマが『買収行為は禁止！！』とかでダメだったけどな」

ウ「お、俺。あの時悟飯から舌打ちが聞こえたんだ…（泣）」

天「3番手は誰だ？」

ク「ベジータです」

ヤ「アイツ棄権したんじゃないのか？」

ク「あれ？言ってませんでした？」

『俺とヤツの間に言葉なんて曖昧なものはいらない。力で通じ合えば構わん』

ヤ「何かどつかで聞いた様なセリフだよな。何処だっけ」

ク「ヤムチャさん、ゲームのし過ぎですよ。敢えて言うならツンデレがよく使う決め台詞です」

天「ツンデレとは何だ？」

ウ「俺に聞かないで」

ヤ「4番手は確か、」

ク「存在がくどいセルです」

ウ「近いうち闇討ちに遭うぞ、絶対」

『7年もお前を想っていたのだ。お前の為にこれ以上の迷いは全て捨ててきた』

ク「だから何だよ、て感じですよ〜。止めなかったら延々と話してたし」

ヤ「ただのストーカーだろ？あいつ」

ウ「その後に7年間盗撮し続けたって誤解した悟飯が、」

天「いや、その後は言わなくて良い。予想できたから」

天「それで最後は、」

ク「界王神様です」

ウ「あの人さあ、半端ねえよな」

ヤ「言葉通りっていうか…」

『悟空さんが望めば、どんな強敵でも造ってみせます。なんなら惑星だって』

ウ「流石、最高権力者…」

ヤ「最初から許容範囲が広すぎる」

ク「ある意味爆弾発言だけど、悟空は食らい付いたんだよな〜」

天「と、いうかこれもれっきとした買収行為だろうが…」

ヤ「んで、実はさ」

天「何だ、まだ続いたのか？」

ウ「乱入者が来たんだよ」

『奴を髑り引き裂くのは俺だ』

『カカロットの命は俺のモノだ』

『俺様に黙って息子と面白そうな事やってんじゃねえか。なあターレス』

ク「…ええと、最初に乱入したのはクウラです」

天「敢えてのか？フリーザはどうした」

ク「お、俺が知る訳ないじゃないですかっ」

ヤ「なあ誰だよ、ブロリー連れてきたの。悟空どこるか皆、絶叫しただろ」

ウ「悟空の父ちゃん、て。悪人面だったんだ…」

天「…どうなったんだ。結局は」

ウ「挑戦者、乱入者、傍観者入り混じれで殴り合いになった」

天「いやっぱり…」

ク「でも、悟飯が一掃してました」

ヤ「しかも笑顔でな。昔から溜まりに溜まった恨み怒りを、アレで発散したんだろうなあ…」

ウ「悟飯がやらなくても、悟空がやっただろうしな」

長い長い溜め息が沈黙に変わった。  
疲れたように天津飯は天蓋室の天井を仰ぎ見、思い出したように視線を前に戻す。

「大会は中止になったのか？」

「まさか、出ましたよ。優勝者」

素っ頓狂なクリリンの声に、天津飯は驚いた。  
まさか、全ての敵（？）を排除した悟飯か？それとも、権力でねじ伏せた界王神かと考えていれば、ヤムチャも苦笑して応える。

「誰だ？」

くい、とウーロンが視線と首を背後に向ける。

そこに視線を向ければ、奥の休憩室で紅玉の玉座に座る悟空が居た。  
その悟空の膝の上では、プーアルを抱えた餃子が安らかな寝息を立てていた。

その可愛らしい寝顔を、悟空は幸せそうな表情で眺めている。

「プーアル、なのか？」

恐る恐る天津飯が問えば、3人は大きく頷いた。

「もう、最終兵器だよなあアレ」  
「ブルマさん収集が付かなくなるのを予測して、プーアルを悟空に預けてたんですよ」

だから、悟空は大会開始の時からプーアルを膝の上に座らせて悟空は仲間や気に入っている対象を危険に晒すことを酷く嫌う。  
敵対している者はどうせ死なないので半殺しで済むが、暴れまわった息子である悟飯と界王神は別だった。

『悟飯、おめえやりすぎた』  
『ぜんぶ貴方のためですよ。お父さん』

右手はクウラの頭を掴んで引きずり回し、左手はターレスの足首を掴んでいた。

背後では、いくつもの屍が山を作っている。  
炎と炭で薄汚れた顔を気にせず、悟飯は柔らかに微笑んだ。

しかし悟空は一切動じなかった。

『…さつき、トランクスに頼んでチチとビーデルに連絡した』  
『え?!?!?!』  
『半年間、オラに5m以上近付いたら一番遠い惑星に送り込んでやる』

『そ、そんな!?!?!』

悟飯の言い訳を無視して、今度は界王神を玉座から冷たい目で見下ろす。

『オラ、じっちゃんの方がいっちゃん好きだ』

一番のきつい落雷のような言葉に界王神が崩れ落ちたのは言うまでもないが、主催であるはずのブルマは既に姿を消しているし、結局は悟空の『飽きた』という一言で混乱した大会は幕を閉じたのだった。

「これ誰が得したんだ？」

「さあ、知りません」

とりあえずは、悟空は満足そうなのでこれ以上何を言ってもややこしくなるので、とばかりを受けたクリリン達は疲れた溜息を吐いた。

明日こそは平和に過ごしたい。  
それだけが今の願いだった。

完全に悪ふざけで書きました。  
うちの悟飯は極度のファザコンです。

## V E N U S（前書き）

此方は管理人が勝手に設定した

バーダック×嫁（ベジータ惑星パラレル）話です。

此方の作中には際どい性描写表現が含まれています。

未成年者及び、嫌悪を覚える方の閲覧は御遠慮下さい。



## V E N U S

涼やかなアラム音が部屋に響く。

数秒鳴った後、セミダブルのベッドからゆっくりと起き上がった女は、猫のように背伸びをする。

早朝の露寒さに、くすみのない滑らかな蜂蜜色の肌が小さく震えた。小降りの乳房を床に放り出していたアンダーウェアで隠し、ベッドへ降りる。

埃がひとつもない綺麗な床は、先の星の制圧で得た報酬でやっと修復できた。

入居したての頃は犬小屋みたいな部屋を自分好みに修復したのに1ヶ月も費やした。

酒の抜けない頭を降り、左右の長さが違うアシンメトリーの長い黒髪を高く結い上げ、シャワールームへと向かう。

熱い湯も久しぶりだ。体がだるい気がするのは分かるが、昨夜の記憶が殆ど曖昧だからだ。

腹下辺りに違和感。

太股を伝う鉄臭さに視線を向ければ、陰毛に隠れた陰部から、一筋の血が伝っていた。

初潮とは面倒で、絶望さえ感じる結果だと女は思う。

そして軽い喪失感。

沸き起こる苛立ちに舌打ちして、シャワーのコルクを全開にした。

窓から漏れる音は、騒がしい騒音だけだ。

「懲りないねえ、アンタも」

酒を浴びるだけの薄汚い店などいくらでもある。それでも行き付けの店は存在して、親友のセリパを飲みに誘えば、機嫌の悪さをすぐに指摘された。

「いくらセックスがしたいからって、性格の悪い上級の奴等ばかり誘うのさ」

「ストレス発散には、セックスが一番なのよ」

まるで上品のないチキンにかじりつき、ストレートウォッカを煽る。殆ど軽装に近い強化ウェアは女の色香を更に引き立たせ、周囲から男の熱い視線がやってくる。

「でも、もうやめた。あいつら態度はデカい癖に、オツムもアツチも大したことないもの」

「酒乱で怪力、それでいて絶倫のアンタをマトモに相手する奴なんてアイツくらいなものよ」

「当然よ、アタシに見合うのは強い男だけよ」

子供を産みたくないのか？と、セリパに問い掛けたことがある。

『子供が欲しいけど、相手は別の事に夢中なのさ』

『トーマは鈍感だからねえ、押し倒せば？』

『アンタと一緒にすんじゃないよ』

そう言つて苦笑して、逆にセリパは何故そんなに子供を欲しがるのかと問い返された。

『さあねえ、大した理由もないさ。ただ、欲しいだけ』

生死を賭ける激しい戦いの高揚感を、セックスで発散するのは楽しい。

気持ちが良いし、何よりあの絶頂感はたまらない。

それに、憎らしくも己の本能が子を産めと訴えてくるなら、抗わず避妊すらしなかったのに。

「なのに、相手が怖じ氣るんじゃ出るもんも出やしないよ」

「ちよつと！笑えない下ネタ言っくんじゃないよ！！」

酒場の雰囲気が一瞬戸惑いが混じる。

出入り口へと顔を向ければ、久し振りに見知った顔があつた。

外で喧嘩でもしたのか、傷だらけの体が何とも雄の香りが強く勇ましかった。

「トーマ！バーダック！！」

セリパがふたりの名を呼べば、トーマは笑っているが後ろにいるバーダックは女の顔を見た瞬間、嫌そうな顔をした。

「生きてたのか」

「何でアタシが、アンタの死に顔見る前にくたばるのよ」

「は、可愛げのねえ女だぜ」

「おいおい、半年振りに会ったんだからいきなり喧嘩なんかするなよ」

「セフレ同士の癖に、よく喧嘩した後にセックスできるわね」

しかしトーマとセリパの忠告も既に耳に入っていないのか、ふたりはグラスを片手に飲み比べを始めていた。

部屋の電気をつける前に、壁に押し付けられた。

衝撃が強かったのか罅が入る音を耳が拾う。

直ぐに荒々しい口吸いが女の赤く熟れた唇を奪う。

分厚い舌に噛みつけば、仕返しに押さえつける力が増して体が痛み  
に軋む。

ほんの30分前は殴り合いをしていたのに、バードックの荒々しい  
息遣いと、女の体臭に互いに欲情を煽らせ目配せだけをすれば、あ  
とはなし崩しに獣のように激しくまぐわうだけだ。

脱がすのが面倒でアンダーウェアを破ってくるバードックに負けず、  
女もバードックの腰に巻いた尻尾を引っ付かんで下履きを下ろそう  
とする。

女は自分の尻尾をバードックの尻尾に絡ませれば、後は肉体的に繋  
がるだけだ。

女の爪先が浮き右脚をバードックの腰に絡ませれば、バードックは  
女の小さい乳房に歯を立てる。

「あつ、」

僅かに漏らした女の悲鳴に、バーダックは愉悦の笑みを浮かべる。女も笑い返せば、ふたりはまた貪るような口吸いを交わす。

灯りもつけない寝室で、ベッドが大きく軋む音と濡れた息遣いが響く。

バーダックの腰を跨ぎ、女は蜂蜜色の肌を快楽に染めて腰を上下に動かす。

唇を舐め上げ更に動きを早めれば、バーダックは女の腰を掴み上げ射精を迎えた。

小さく息を吐いて女の中へと欲の証を放ったけれど、女は動きを止めず逆に激しくなる。

「っち、相変わらずの淫乱だな、此处はっ」

「ふふ…、ん、っ、そ、れが、良いだろっ？」

バーダックが女の両足を抱え、体勢を変えればひっきりなしに女から悲鳴が上がる。

闇に浮き上がるバーダックの白い肌と、美しい蜂蜜色の肌が激しく絡まる。

「っ、っ、はっ、さいこ、う…っあ、バーダッ…」

バーダックの背に爪を立てれば、首に齒を立てられる。

何度目か分らない絶頂と、奥に注がれる熱に女は深く息を吐けば、バーダックの頬にある大きな傷痕に舌を這わせる。

そうすればバーダックの力が増すことが分かっている女は、外が朝陽に明らむ窓を一瞥し、またセックスに没頭した。

「アンタの子供、欲しいから」

メンソールな香りが生臭い部屋を包みだす。  
シートにくるまったままの女に振り向けば、バーダックはただ眼を細めて応えた。

「好きにしろ」

反対はしないと取って良いのだろうか。  
女は微笑み、己の腹を撫でる。

「きっと、アンタに似て強いよ」

「てめえの酒乱は似て欲しくねえな」

「ふふ、心にも無いこと言ってんじゃないよ」

眼を覚ませば、バーダックの姿は無かった。煙草のメンソールの香  
りも欠片すら残っていない。

「遠征か、」

忙しい奴だと小さく笑えば、時間違いのアラームが鳴り響く。

「またリフォーム…」

部屋中見渡せば、散らかると言うより破壊に近い惨状に女は溜め息をつく。

もう一度腹を撫で、薄く微笑みバスルームへと向かった。

「で。産まれたのがお前、」

まだ壁伝いに歩く赤ん坊の力カロットを膝に乗せながら、ラディッツは暗い表情で父と母の情事を事細かく聞かされていた。

「俺、別にんな事聞いてねえけど…」

「冷たいなあ、大体お前が聞いてきたんだろ」

「俺が聞いたのは、会う度に喧嘩する理由だよ」

部屋を見渡せば、やはりあの頃と変わらず破損箇所が多い。毎度の事だが修理で走り回るのはラディッツだ。

「だってアイツ、殺したくなる」

「じゃあなんで…」

「バーダックは性格は最悪だけど、顔と体はさいこう…」

「頼む、それ以上言わないで」

よくこんな両親から自分が産まれたのかと悩んだが、反面教師とは

「こついうものなのかと、ラディッツは無性に泣きたくなった。

「カカロットの時はな、」

「だから、やめろって…」



look:hard:at... (前書き)

作中には女性向け要素が含まれています。  
苦手な方は閲覧を御遠慮下さい。

look:hard:at:

訳：〜を見つめる

意識的に重くなった目を開けば、自分の重ねた両手が写る。背を屈ませて俯いていたようだ。

浅い擦り傷だらけの指先が、血の気を無くすほどに握り拳をつくっていた。

目の前が真っ暗になりそうだ。

「何で、こんな事になっちゃったのか。自分でも分かんねーんだ…」

「良いからとつと訳を話せ」

「あー、うん、ごめん…」

静かな怒声に思わず悟空も即答する。

場の雰囲気は曇天のように重々しくとも、別に対した事もない事情だと知る者から観れば、酷く台無しに思えるものだ。

所々、焼け焦げた服に疲れきった顔で大人しく正座する悟空の背後には、苦しみに呻く地獄の死者達が渦高く積まれていた。

此処は地獄である。

何処から表れるのか分からない淡い光で照らす、薄暗く岩肌だらけの地平線ばかりの場所だが、今日は一段と荒れ果て凄まじい惨状の爪痕を残していた。

事の発端は、数時間前に遡る。

懲りもせずセル達が暴れ回っていると鬼達から助けを求められ、死者達を牽制するため悟空が地獄へ赴いた時だ。

今日は生憎パイクーハンが大界王に捕まってしまい、オリブを誘ったら快く引き受けてくれた。

「いよつ、と…、よし！これぐらい縛り上げてれば、暫くは大人しくなるだろ」

とりあえず片っ端から暴れている奴らをはっ倒し、近くにあった縄で縛り上げれば、悟空とオリブはやり遂げたような笑みを浮かべた。

「しかし、セルとフリーザが見当たらないのが気に入らんな。どうする？悟空」

「うゝん、探すの面倒だなあ」

先週、砂漠に生き埋めにしてやったのに…と舌打ちしながら呟く悟空にオリブは苦笑を浮かべた。

「そっぴやオリブ、あんま会わねえうちに随分腕上げたんじゃないかねか？」

「うむ、お前やパイクーハンには負けてられないからな」

「はは、んじゃ今度手合わせしようぜ」

「望むところだ。と言いたいが、実力の差がありすぎて勝負にならんだろう」

「そうかあ？」

ふいに、2人が楽しそうに笑っていた時だ。

笑っていたはずの悟空が突然、表情を険しくさせて勢い良く背後を振り返ったのだ。

オリブーも習って悟空が睨む先を見たけれど、そこには薄暗い景色だけで誰も居ない。

「どうかしたのか？悟空」

「…、いや。なんでもねえ」

口ではそう言っているが悟空の表情は何処か暗い。珍しい事に居心地が悪いのだろうか、オリブーはそう思って声をかける。

「兎に角、セル達を探そう。お前ならすぐ見つけれ…」

そう言いながら悟空に目を向けた時、オリブーは口を開いたまま固まった。

悟空の背後に、寄り添うように影がある。

影は黒い髪に虚ろな黒い瞳の男だ。額に飾られた装飾品が嫌に煌め

いている。

気配が全くなかった。

オリブーが悟空の名を叫ぶ前に、男は先に動いた。

「カカロット」

囁くように呟いた瞬間、男は悟空の腰に抱きついたのだ。

あっ、とオリブーは叫ぶ間も与えられなず、悟空は肩をビクつかせ、腰と尻辺りを撫でてくる無骨な手に目を見開いた。

「ついいいい？！！！」

2人の身長差は頭ふたつ半ほどあった。

悟空の引きつった悲鳴を無視して、男は腕の中へすっぽりと悟空に覆い被さると、今度は首筋に顔を埋めようとする。

「おめっ、ブロリー！！！！」

名を呼ばれた男の顔が笑みを浮かばせた。その暗い笑みに悟空は鳥肌が立つのを覚えると、怒りに任せてブロリーの腕を捻り上げれば、そのまま背負い投げへと打ち込む。

投げ飛ばされたブロリーは数十メートル程飛んで、重い音を立てて着地する。

力一杯投げた筈なのに平気であるブロリーに、悟空は少タイラツとした。

「知り合いか？」

余りの唐突さに反応に困っていたオリブーが問い掛ければ、悟空は

嫌々そうに頷く。

「まあ、ちよつとあつてな……」

「だが今のは、ちよつと所の場面ではなかったぞ」

互いに生きていた頃は、敵同士だったのだろうと想像は付いた。

だがオリブの眼には、あの抱擁は憎み合う者同士がするような事ではないに見えた。

「……まさか悟空、さっきの襲撃は今日が初めてではないのか？」

げんなりした顔で無言で頷く悟空に、だから珍しく彼の機嫌が悪かったのだと分かった。

じ、と悟空を見つめてジリジリと歩み寄って来るブロリーに悟空が怯えがっているのを見れば、ブロリーのセクハラ紛いな行為は毎回のようだ。

ブロリーからは全く殺気は感じられない。

逆にそれが悟空にとっては恐怖に近いのだろう。

「あいつ、オラの死角を狙ってくるんだ」

確かにとオリブは内心想う。悟空は悪意のある気配や鋭い視線には聡いが、それ以外はからっきしだ。悪さをする相手には露ほどに容赦はしないが、対応に困る相手は苦手とする性格である。

「この前は、服脱がされ掛けた……」

涙眼に語る悟空に、オリブは思わず重い溜息を吐く。

オリブだとて、地獄の死者とはいえ悪さをしない相手を叩き倒す

ような悪趣味は持つてはいない。

そしてそんな不毛な会話の最中にもブロリーとの距離が縮まってゆけば、悟空は意を決してブロリーに怒る。

「これ以上オウに近付いたら、一生口聞いてやんねえかな!!!」

何処か子供の喧嘩に似ているが、どうやらブロリーには効果覲面だったようだ。ピタリと止まってブロリーは悟空の言葉の意味を理解すると、みるみる内に悲しげな顔をして見せた。

例えて言うなれば、捨てられた子犬もとい大型犬。

明らかに泣き落としだった。

だが以前の経験からか、悟空はそんなブロリーの姿を見ても気にせず歩きだそうとするが、隣のオリブはそうでなかった。

「なあ悟空、少しは構ってやったらどうだ？」

まんまとオリブの同情を誘ったのだ。ギギギ、と妙な効果音に首を振り向かせれば、悟空はそれこそブロリーに負けず劣らず泣きそうな顔だ。

「オリブは、アイツの恐ろしさを知らねえから、そう言えんだ……」  
「しかし見てみる、あんな顔をする奴がお前を殺そうとするか？」

オリブの言葉に、悟空は若干戸惑いを感じ始める。

悲しげな顔で俯くブロリーを見るのは、何度目だろう。その度に油断してしまつて痛い目にあつた。

でも決して、それは酷い悪さをする訳ではなかったから、反撃する気すら削がれた。

頭を抱えて唸りたい、帰りたい気分だ。だが鬼達の助けを無視するほど、無神経な性格じゃないから帰れない。

ブロリーとオリブーに挟まれながら、悟空は観念するしかなかった。

「……っ分かったよう、構えば良いんだろ？」

「うむ、それでこそ悟空だ。お前にそんな態度は似合わない」

それ絶対、誉めてないと言葉を飲み込み悟空はブロリーの名を呼んで手招きすれば、ブロリーは悲しげな顔を止めると、すぐさま悟空に抱きつこうとするが悟空は慣れた手つきで、ブロリーの顎を押し退けた。

「仕事の邪魔したら、本当に怒るかなー!!」

「…分かった」

そう呟いて腰に腕を絡ませようとするブロリーに、悟空は帰りたい気持ち強めた。

そうして暫く地獄を搜索していれば、すぐにセル達は見つかった。暴れているから見つけやすかったのもあるが、どうやら作戦を練って悟空を待ち伏せしていたらしい。

相変わらずくでもない作戦ばかりするセル達に、悟空は今日は何処に生き埋めにしてやるうかと考えていけば、ふいにブロリーが悟空の前に立ち塞がったのだ。

物静かに「気」を膨張させるブロリーに、悟空は顔色を青くした。



オリブーはそんな悟空に気付かず、ブロリーに声を掛ける。

「何だ、手伝ってくれるのかブロリー」

珍しく頷いてくるブロリーの髪が、段々と蒼炎を纏い始める。

それでもオリブーはブロリーの変化に全く気付かない。

「一掃してくるれるなら、何か礼をしないとな。なあ、悟空」  
「！？なっ、何言い出すんだオリ…」

悟空の言葉は、突然吹き出した暴風に遮られた。吹き飛ばされ掛けて慌てて踏みとどまれば、ひんやりとした視線が悟空に纏わりつく。恐る恐る視線を見上げれば、ブロリーは碧眼に揺らめく視線を悟空に向けていた。その寒々しい視線が、笑みを浮かべた。

「その約束、忘れるな」

「う、嘘だろ！！コラまでブロリー！！！！」

激変してしまったブロリーにオリブーは驚いて立ち尽くしたまま、セル達を捻り潰されていく光景を見上げるしかない。

「すまない、悟空」

何故、オリブーが謝ったのか悟空は問いたださなかった。

問わなくともセル達を蹴散らせば今度は此方が被害に遭うと分かっているからだ。

いますぐ帰りたい。

2人は心底思ったが、どうやらこの光景を收拾しなければ帰れない

と、自らの発言を恨んだ。

それから数時間が経過して。

大界王の付き添いを終えて、パイクーハンが地獄にやって来た時には、怖いくらいに静かになった場所で悟空が途方に暮れていた。訳を聞く気になれなかったが、目を回しているオリブーの無事を確認して、悟空の背後にある死者達の山を見上げ溜息を付いた。

「で、何があった」

「ブロリーに襲われ掛けた…」

「またか、これで何度目だ」

「たぶん、4回目」

重い溜息ばかり続く。

これはもう、悟空とブロリーの問題だった。生前の頃に何があったのか聞くのが嫌で、パイクーハンは泣きだそうとする悟空を必死に宥め、死者が復活する前に急いで天界へ帰っていった。

「オラ、暫く地獄には行かねえ…」

「奴の執着が増すだけだぞ？」

仲良くさせて頂いている方からのリクエスト、ストーカ ブロリー  
です。

書き終わった後に、中々に笑える出来になったので此方でもあぷし  
ました。

## 私の為にならない事

「貴方は神を信じますか？」

たまたま大きな教会が近くにある繁華街で父と待ち合わせをしていれば、勧誘のチラシを持った神父にそう問われた。なんと間の悪い時に話しかけられたものだろう。

仕事が一と段落して、久しぶりに街で食事をしようと家族と待ち合わせをしていた時に、断り難い人に捕まるなんて。

こういった勧誘は下手な返答をしたら最後、3時間は説き伏せられる事は確実だ。

この場合、『居ます』と応えるべきか。

家族共々、神様とは懇意に親しくさせていたでいる、なんて応えた日にはどんな反応が返ってくるか頭が既に痛くなりそうだ。

そしてタイミング宜しくやって来る父が手を振って来れば、神父は悟飯から悟空へと向きを変えて、笑顔を添えて先程と同じ問いをする。

悟空は一瞬、きょとんと固まると首をかしげた。

神父の肩越しから息子に視線を向けて、悟飯の表情を読み取ったのか、一言だけ応える。

「まあ、居るんじゃないのか？」

曖昧な応えでも肯定になりかねないが、信徒ではない者であればそれが普通の反応だ。

神父は満面の笑みを浮かべながら、悟空と距離を詰める。

「神は我等の上に常に存在します。神を信じ祈れば、貴方も神の加護を得られるのです」

得意気に語り出す神父に、悟空は意味が解っていないようだ。

自分達にとって神はあの心優しい異星の少年だし、理を司る天界の神は偉大だと十分に解っている。

更に雄弁になる神父を悟空は、はつきりと遮った。

「でも、神様は動物達も大好きだぞ。あと花見も大好きなんだ。オラ達ばかり欲張りはダメなんだぞ」

今度は神父が沈黙した。

お互い噛み合わない会話だが、笑いを堪えられなくて悟飯は他の神父やシスター達が集まってくる前に父の手を掴むと、早足に繁華街を逃げ出す。

「なあ、オラ変なこと言ったか？」

「いいえ、ちつとも変じゃないですよ。ただ、僕達が知ってる神様を、あの人達が知らないだけです」

「教えた方が良いのか？」

「それは、よしでしょう」

人それぞれ、信じる神は違うのだから。

楽しくて楽しくて、

仕舞に家族を巻き込んで神へ、可愛い少年神へ会いに行つた。

花見が好きだっていいじゃないか。

好奇心旺盛な、聡明で優しいあの子の幼い心に沢山の愛を教えたい

けれど。

生憎、雲の上の事情は霞んで見えなかった。

意味わかんねえ…

ただ、問われたらどう応えるのだろうと思っただけ。  
うーん、遭遇したら逃げるのが大変そう。

## s m i l e (前書き)

地獄へ遊びに来た悟空が、ある人物と出会った話です。  
注意

若干女性向け要素が含まれています。

s m i l e

別に、笑顔はひとつの感情で表せるものでもない様だ。

最近覚えるようになったSS3を使って修行をしていたら、大界王の所有地である山を綺麗さっぱり吹き飛ばしてしまい、怒られはしなかったものの、別の場所での修行を言い渡された。

それが地獄だった。

地獄の死者達が暴れて居る時は許可を得て牽制に行ったりもしたが、自分ひとりで赴くのは初めてだ。

「ほどほどにな、悟空」

大界王から話は聞いているのか、閻魔からやりすぎるなと釘を指されたが悟空は苦笑いで応えただけだ。

暗灰色で澱んだ空気が飛翔する悟空の頬を掠め、眼下に見下ろす針山や血の池を見渡しふと、あまり見慣れたくはない景色を見つけた。鬼達が血相を変えて逃げ出す様に悟空は溜息を漏らすと、騒がしい中心へと向かう。

「チッ、相変わらず。シケた場所だぜ」

怯える鬼達を不機嫌極まりない声で一蹴した男は、鬼達にとってはどこか見覚えのある顔だ。



「顔は似てるのに、こっちの方が性格が最悪だオニ」

「ああ？何か言ったかデメエ？」

コソコソと話す鬼達にガンを飛ばす男は、やはり蹴り飛ばして黙らせようとする。

だが男は、背後に迫る気配に気付かないでいた。

「ターレス」

「ああ？」

ターレスと呼ばれた男は驚きを隠して睨み返そうと振り向いた瞬間、背中に走る悪寒に一步後退した。

風を切る音に跳ねた髪が乱れた。鼻先を横切ったのは靴底だ。

その重い回し蹴りにもう少し反応が遅ければ鼻骨どころか片頬の骨が砕け、おまけに顔面骨折なんか可愛いくらい変形していたはずだ。

いきなりの攻撃を仕掛ける者はこの地獄には少ない。

そして一度は喰らった技に覚えのある、相手の力に気付くよりもその姿は視界によく映った。

「ちえ、避けられたか」

「て、んめえ。容赦って言葉を知らねえみたいだな。カカロット」

「容赦したら、おめえ余計怒るだろ」

が、避けるとは思わなかったと悟空は笑った。

会って挨拶を交わすほどの仲ではないとお互い分かっているのか、悟空は詫びも入れはしない。

逃げていく鬼達を眺めている悟空に、ターレスは口元を歪ませ口を開く。

「噂じゃ、修行で忙しいんだろ？とつととお家に帰んな」

「いや、天界じゃオラの力にはあんま耐えられねえみたいでさ」

「…、ほう」

天界を揺るがすほどの力を持つと、遠回しにしては皮肉めいていない悟空の言葉に、ターレスは片眉をピクリと上げる。

「なあ、せつかく来たんだ」

とりあえず鬼達を解放した悟空はターレスを無視して背中を向けた途端、ターレスは内に抑えていた力を爆発させた。

「ちよつと付き合えや」

最後まで言う前には既に砂埃をまき散らせ、ターレスは走り出した。

もともと距離など殆どなかったのか、振り返る前にターレスは悟空の背後を取る。

だがその姿は残像もないまま消える。

次に現れたのは悟空の頭上だ。

両腕を振り上げ、悟空の後頭部目掛けて込めて叩き込む。

無防備だった後頭部に鈍い音が響く。

防御の素振りを一切見せなかった悟空に、ターレスは不意打ちが成功するよりも違和感を覚えた。

前のめりに倒れ込む悟空の体が瞬間、素早い動きで手を地面に付けると逆立ちの要領で足を振り上げると、そのまま踵でターレスの顎を砕きに掛かる。掠っただけだ。

ターレスは熱く痛む顎に舌打ちすると、悟空の右足を両手で掴むと捻りを効かせて放り投げる。

しかし手を離す前に、悟空の左足がターレスの横面めがけてハイ

キックを見舞う、と見せ掛ければ当然ターレスは右足を掴む手を緩ませれば、そのまま両足でターレスの顔を挟み、回転で増した勢いでターレスの頭を地面に叩き落とす。

だがそこは機転の速いターレス、素早く気功波を悟空の腹にめり込もうとすれば、悟空はそれを避けるためにターレスを解放するしかない。

お互い距離をとって静かに着地した。

ポタリと、蹴りが掠めたターレスの顎から血が滴り落ちる。

悟空はしてやったりな悪戯めいた笑みを浮かばせた。

「はっ、随分と余裕じゃねえか」

「ターレスこそ、腕はなまってねえな」

じり、とターレスが距離を詰めてくるが、逆に悟空は困ったような顔をした。

「なあ、オラは別に仕事で来た訳じゃねえんだ」

「あ？ふっかけて来たのはそっちだぜ」

「ターレスが悪さしようとするからだろ？」

まるで子供じみた喧嘩だと分かっているが、ターレスは犬歯を剥き出しにして怒鳴る。

「っるっせえな！！一度俺に勝ったくらいで、いい気になるなよ下級戦士如きが！！！」

ふいに、張り詰めた空気が凍るような風が何処からともなく吹き出した。

一瞬びくりとしたターレスは、静かに冷たい風を発生させている悟

空を見据えた。

若干俯かせていた顔を上げれば、悟空は目を細め<sup>こめかみ</sup>蟬谷に青筋を立てさせていた。

その表情を例えるなら、まさしく冰山だ。

「オラ、その言葉あんまり好きじゃねえんだ」

本来あのプライドの異常に高い同胞に同じ事を言われれば、怒りを通り越して呆れてくるが、逆に別の奴に言われると無性に腹が立つて仕様がないうだ。

ぱり、と電気に似た光が悟空の周りを飛んでは弾ける。

一瞬だけ見えた、たゆたう金髪と碧眼にターレスは無意識に息を飲む。

「なあ、ターレス」

艶やかな笑顔に惹かれそうになって、次の言葉でターレスは顔をひきつらせる。

「血の池で、何時間息止めていられるか試してみないか？」

「…、はあ？」

「別に地獄鍋で我慢大会でもいいぞ？」

嗚呼もちろん、ターレスひとりで。

今の悟空の笑顔を見たら、ラディッツあたりは赤面して鼻血を出すかも知れないが、中途半端に強い分、悟空の底のない力にターレスは今にも捻り潰されそうな気持ちを味わった。

勘違いされる事があるが、悟空は別に気の長い人間ではない。

子供じみた我慢下手はあるが、多少の世間ズレと偏見を除けば悟

空は誰にでも平等に慈悲深い性格だ。

ただし『仏の顔も三度まで』という諺も真つ青な、その慈悲深さは一度だけで2度目はまさしく鬼のように容赦がない。

怒りで力を爆発させるサイヤ人の特徴そのもので、笑みを浮かべたまま青筋を立てる様は、SS2を会得した息子である悟飯よりもなお強烈である。

「んじゃ、覚悟は出来たか？」

「ふ、ふざけ！！！」

虹色に輝く火柱を、逃げ出していた鬼達が遠く眺めたのは、情けない男の悲鳴の後だった。

その後の記憶を、ターレスはよく覚えていなかった。

鬼達の話では百キロメートルほど引き吊り回されたあと針山に全力で放り投げられ、血の池で5時間もひとりシンクロをやらされたそうだ。

その光景を見かねた、というか面白がって乱入したフリーザ、セル、その他もろもろ野郎共は今頃、怒りの頂点に達した悟空に果てしない距離を休みなく引き吊り回されているらしい。

力の籠もらない呻きと、溜息をひとつ。

あの頃は、力の差などほとんどなかったのにと軽い絶望感。

「ほんつと、ツイてね」

そんな呟きは、遠くで悟空がぶつ放したカメハメ波でかき消されてしまった。

どんよりと薄暗い闇しかなかった世界に、太陽が降り注いだ。  
例えばそんな感じだ。

「やけに気に入られたな」

何処で仕入れてきたか味は質素だが瑞々しい果実を、ターレスは不味そうにかじる。  
そして聞き流していた奴の声をようやく耳が拾った。

「あ？何が」

「アイツだよ。お前さんに良く似た奴」

「…あー、カカロットか？」

「つかテメエ誰だよ、と睨もうとしたが最近顔見知りになった雑魚だ。」

名前は名乗られたが覚える気は更々ない。

「アイツ本当、容赦ねえよな」

「何だ、テメエもやられたクチか？」

侮蔑を込めて笑えば、相手は一瞬怒気を含ませたが己よりも弱い為すぐに沈下する。

この地獄では実力主義が何故だか暗黙の了解に入っている。  
尤も、地獄には口クナ奴は居ないので当然といえば当然だが。

「最近、頻繁にこつちに顔出しに来るよな」

そりゃ大界王の所有地を滅茶苦茶に荒らせば、誰だって奴の力には頭を痛ませるものだ。

そう思ったがターレスは口には出さない。

カカロットに再会して、ターレスには良い記憶がなかった。

出会って1時間もしないうちに半日も地獄中を引き吊り回されれば、それなりには悪夢も見るようになる。

だからこそ隣に座る名も知らない雑魚に言われれば、怒りが沸かないのは可笑しい。

「はっ、あんな阿呆で単純馬鹿力に気に入られちゃ、地獄も末だな」

「何が末なんだ？」

突然、不親切に軽やかな声が背後から響く。

相変わらず素っ頓狂な声に、ターレスは一瞬だけ鳥肌を立ててゆつくりと振り返る。

隣の奴は、青い顔を通り越して土色だ。奇妙な悲鳴を上げて逃げてゆくのを、相手は首を傾げて見送った。

「なあ、何でアイツ逃げたんだ？」

「デメエがおつかねえんだとき、カカロット」

肩を竦めて小馬鹿にするターレスに、噂をされた張本人であるカカロット、改め悟空はますます首を傾げる。

「…、で？わざわざ何しに来たってんだ」

俺の気を探ってまで。

瞬間移動の事は聞いていた。妬ましいというより薄ら恐ろしい感情を覚えたが自分のプライドが許さず、喉まで出掛かった声を押し込む。

「うえ？会いに来ちゃいけねえんか？」

嘘のつけない素直な感情が露見しやすい丸い眼が驚きに開かれる。その表情にターレスは妙な感覚を覚えたが、誤魔化した。

「意味、わかんねえ……」

「だってターレスだけなんだ。まともにオラと話してくれんの」  
「……………」

「セルなんて、何度頭吹っ飛ばしても踏み潰しても直ぐに生えて追いかけてくるし。フリーザなんかクーラみたいにメタルしたら、強くなるんじゃないかねえかと言ったら、癪癪起こしたし」

何だか軽い目眩が起きそうな馬鹿らしい話だ。

「……そりゃ、テメエが悪いだろうが」

「は？何でだ」

深い溜息を付くターレスに、悟空は尚も問いかけてくる。

「てか、テメエは何がしてえんだ」

「うっっん。修行相手探し？」

何の警戒もなくターレスの隣に腰を下ろし、下らない事をまだ喋ろうとする悟空に、ターレスの怒りは既に冷めきっていた。



「この暇人が」

「ターレスには言われたくはねえな」

「んだと？」

ケラケラと笑う悟空にむかつて左足で蹴りを入れれば、悟空は余裕でそれを避ける。

それから暫く、互いの脚を無表情で蹴りあっていれば複数の気配が周りを取り囲んでいる事に気付いた。

「随分と、楽しそうですねえ」

不愉快にしか聞こえない甲高い声が、2人の耳に入る。  
声がした方へ面倒気に振り返れば、予想通り不気味に白い物体が居た。

太い尾を揺らめかせ時に地に叩きつけ、憎らしげに此方を高台から見下ろしている。

「よおフリーザ。今日はまた一段とぞろぞろ連れてきたなあ」

笑みを浮かべつつ悟空はフリーザに手を振れば、フリーザは不愉快げに口元を歪ませた。

フリーザの後ろに控えているのは、悟空がかつて倒した者達が視界を埋め尽くすほどにいた。

しかし悟空が首を傾げている所を見ると、記憶に残っていないようだ。

「あいつに友達作る特技なんかあったのか？」

ターレスのやる気のない皮肉に悟空は吹き出し、腹を抱えて笑った。

「ターレスそれ最高!!」

「お黙りなさい!!!」

フリーザがヒステリックに叫んでも、悟空は逆に笑いを堪えて震えるだけで周りからは失笑を買っていた。

「悟空、今日こそは先日のお金を返させて貰うぞ」

別の声が乱入したかと思えば、セルだった。こちらは一人だ。

「お、もう復活したのかセル」

親しげに悟空が声を掛ければ、セルは苦笑を零す。

「私の生命力を舐めるな」

冷や汗を出しているので非常に説得力に欠けるが。

そつとターレスが悟空に何をやらかしたと聞けば、悟空は昨日の晩飯を思い出すような口調で応える。

「この前は確か、脳味噌以外を潰したかな」

一瞬、場の空気が冷たくなった。想像したのか、皆は不気味に無言だ。

「お前それ、えげつねえ」

フリーザとセルはプライドの為、気丈に立ち尽くしてはいるが眼が激しく泳いでいる。

この前の羞恥の責め苦を思い出しているのだろうか。

「さて！！んじゃさくつとヤルか」

場の空気を全く読んでいない、ある意味怖ろしい明るい声が響く。飛び跳ねる勢いで立ち上がれば、周りは戸惑い始める。だが今更、後悔など後の祭りだ。

「ターレスもヤルか？」

「頼むから、今だけ他人のフリさせてくれ…」

要は手出しはしないと遠回しに言えば、悟空は満面の笑みを浮かべる。

その笑顔を間近で見たターレスは、心臓を鷲掴みされたような感覚に襲われるが、その数分後には悟空がフリーザ達を容赦なく蹴散らしているのを見て、その感情は瞬時に冷めてしまった。

「あゝ、腹へつたゝ！！」

動く気も失せて座り込んでいれば、砂埃を纏ったまま悟空が戻ってきた。

腹が減っているのなら自分に構わず帰ればよいのにと、律儀な奴だと不甲斐にも苦笑を浮かべる。

「もう十分遊んだろう。とつとと帰れ」

「そうだな。わりいな付きあわせちまって」

「は？何言つてんだ」

「だって、待つててくれたんだろ？」

邪気の無い笑顔が、ターレスの心臓を握りつぶさんばかりに襲う。

なんだこれは。

なんだこれは。

自分の思考を支配する気持ちの悪い感情。

「んじゃ、また来るな」

敵に向けるには、余りにも穏やかな笑顔に、ターレスはただポカんと口を開けて見送るだけだ。

軽くジャンプして鳥のように飛翔し戻るべき場所へ帰る悟空を、視界に写らなくなるまで見送れば、先程逃げ出していた奴が戻っていた。

「なあ、さっきフリーザ達が血の池に浮かんでたんだが、…帰ったのかアイツ」

そいつの声を聞いた瞬間、ターレスは深い溜息と共に後悔の念を抱く。

「っ畜生、」

憎らしげに呻いても、気付いた感情を消し去る事が出来ない。一度火がついた衝動は、戦いを異常に好む衝動に酷く近い。

とりあえず、フリーザ達の様な容赦ない仕打ちは受けずに済むようだ。

悪夢は、違う意味で続きそうだ。

その黄金色の輝きは太陽そのもので。

許可なく、強引に、無邪気に、時に悪寒が覚えるほどに。

心を浚ってゆく。

- F i n -

一生の不覚かも知れない。

## 花飾りが揺れる場所で

ビーデルと悟空のお話です。切なめで

「よくお似合いですわ」

最後に薄い唇に橙色の紅を引いて、数人の女給士はやり遂げた顔をした。

中心にある椅子に座っているのは、ふんわりと白いドレスを身に纏った女性だ。

装飾品は少ないけれど、細工の凝った花模様が純白をさらにまっさらへと染め上げているようだ。

アイシャドウ

瞼紅と口紅と同じ色の橙の、唯一輝くティアアラがそれとなく上品さを醸し出している。

鼻下までを隠していたレースをゆっくりと捲り上げると、中から現れたのは、まだ幼さが残る少女だ。

褒めそやす女給士達に囲まれ、彼女は頬を朱に染めてしまう。

「あら、良く似合ってるじゃない。ビーデル」

「ブルマさん…」

女給士を中心に居たブルマが嬉しそうに微笑んでいるが、ビーデルは少々困惑気味だ。

事の始まりは数時間前。

晴れて孫 悟飯と婚約を果たしたビーデルをブルマが連れだしたのは、ある教会だ。

どうやら新作のウェディングドレスのお披露目が開催されていたらしく、ブルマは嬉々として彼女を引っ張ってきたのだ。

そんな時だった。

疑似結婚式で演出してくれるカップルが一组、怪我をしてしまい出られなくなったのは。

そして真っ先にビーデルをエントリーしたのがブルマだったというわけだ。

断る隙を与えられずにドレスサールームへと連れ込まれ、現在に至る。

だがひとつだけ問題があった。

「ブルマさん、相手役がいませんよ」

「大丈夫。そこは抜かりないわ」

そう言つて嬉しそうに携帯電話を片手に笑うブルマの背後から、やはり女給士に無理やり連れてこられた人物が入ってきた。

特徴的に跳ねた黒髪に、穏やかさを含ませた柔らかな眼差し。

すらりと伸びた脚に、鍛え上げられた逞しい肩幅の広い背中を、ビーデルが着ているドレスと同じ、純白のタキシードに身を包んでいた。

胸元にはビーデルのティアラと同じ橙色の花が添えられている。

その色でパートナーが誰なのか直ぐに分かるのだ。

「お義父さん」

ビーデルの相手役は婚約者の父の悟空だったのだ。

確かに、今日は婚約者は仕事で抜けられないと分かっているが、予

想していなかった相手にビーデルは隣で笑うブルマに目を向ける。

「ケーキ二十人分で手を打ったの」

悪戯が成功したような笑顔だが、悟空はこういった堅苦しい衣装は嫌いな筈なので、恐らく知らされずに連れて来られたのだろうと察しがついた。

恥ずかしいのか妙に顔を合わせないでいる二人を余所に、周りは慌ただしくドレッサルームを後にしてゆく。

そろそろお披露目が始まる時間なのだろう、さっさと行ってしまったブルマに反論も出来ずに居た悟空は、もうすぐ娘になるビーデルに向き合った。

ゆっくりと、悟空はビーデルに手を差し伸べ、優しく微笑む。

「行くか」

「あ、はい。そうですね」

他の女性達はパートナーを見つけ楽しそうに廊下を歩いて行くのを、ビーデルと悟空は複雑な気持ちで眺め、自分達も後を追っていた。ビーデルがドレスの裾を踏んで転んでしまわないよう、悟空はビーデルの隣に寄り添って手を取って誘導する。

長い廊下を歩きふと、庭を見ると動物の形をした木々に乗って鳥達が戯れていた。

花道や桃色の絨毯や飾り花、空は生憎も曇り空だが雨が降らないだけマシだ。



今にも幸せそうな声が響いてきそうな光景に、しかしビードルはそれを何処か遠くを見ている様な感覚を覚えてならなかった。

「結婚式つて、何だか不思議なものですよね」

「なにがだ？」

不思議と笑みが零れた。

この場所では誰もが笑顔だが、それとは違う笑み。

「本当の結婚式は、もうちょっと先ですけど…」

「オラは、二回目だな」

あの頃は結婚なんてまともな知識をもっていなかったから、何かのお祭りだと思っただけで。

悟空にとっても、己の家族が増える事にお互いこそばゆい感情を胸に抱いたのだ。

「こんにちわ」

曲がり角から優しい女性の声が響いた。

視線を向けると、そこには同じウエディングドレスを身に纏った女性だ。だが雰囲気が少し違う。

自分達の様にお遊びで着飾ったのではなく、彼女は本当に美しかった。

隣には小さい花束を持った少女が付き添い、数人の女給士も軽く会釈する。

彼女は本物の花嫁だ。

「可愛らしい花嫁ですね」

くすくすと女給士は笑う。

それに悟空は苦笑するだけで、ビーデルも特に説明をする気もなかった。

「これから式場に行くんです？」

ビーデルが問うと、女性は幸せそうに笑った。

「ええ、彼つたら酷いのよ。迎えに来ないんだから。ふふ、きっと緊張しているのね」

不安を何処までも消し去ってくれる女性の笑顔。

ビーデルは彼女の膨らんだお腹を見た。

それに気付いた女性は、目を細めて両手でお腹に触れる。

「出産予定日が来月なの」

「辛くないですか？」

傍に居た少女も真似て、女性のお腹に手を触れる。

「いいえ、こんな時期だけど、式を挙げようって彼に言われた時は、今まで一人で抱えていた悩みが吹き飛んだわ。女性にしか分からない幸せって、こういうものなのかしらね、きっと」

そう言つて、時間だからと彼女は愛する人が待つ式場へと去つて行った。

二人もぎこちなく手を振る。

心が満たされる。けれど、

「幸せな程、不安は大きいよなあ……」

ビーデルの心情を察したように、悟空が言葉を零した。

「あんなに幸せそうなのに、ですか？」

「オラも同じだ」

愛おしそうに微笑んで、悟空はビーデルの手を握る。

ビーデルは息を飲む。

風が揺らめく。

幸せな筈の場所は、密かに不安を纏う。

「だから、皆はオラ達を祝福してくれたんだろうなあって」

将来、これから先不安や不幸に見舞われても、お互いを信じあえるように。

何処までも輝ける光りを浴びる、もうすぐ義父になる彼の横顔を見上げて、ビーデルは一瞬泣きそうになって、我慢した。

「こんな所に居た」

会場に来るのが遅くて心配したのか、悟空に付いてきた悟天が二人

を見つけた。

悟天も便乗されて、ブルマの計らいによってタキシード姿だ。

「皆待ってるよ」

お互い何も言わずに笑い合う二人に、悟天は首を傾げた。

「何を話してたの？」

後で話すと言って、悟空は悟天を促して歩みを再開する。

去り際にもう一度風が吹いて、誰も居ない庭の花飾りを揺らしていた。

人々の耳を優しく撥るのは、未来を誓い合った清らかな鐘の音だった。

FIN

古い話を引っ張ってきました。微妙に違和感がありますが、お気に召して下されば幸いです。

## Phantom

phantom (幻影)

いつまでもいつまでも  
変わらない君が  
笑って存在してくれる事を

ずっと願っていたい

運命の出会いというものは時折、すべてを覆したりするものだ。

目を閉じなくなる程の眩しい陽光が深い森に降り注ぎ、柔らかな木漏れ日をつくり出す。

昨夜は天地がひっくり返ったような激しい雷雲と嵐だったのが、不思議なくらい晴れやかな日だった。

まだあちこちに小さな水溜まりを残し、小動物達がその水を飲んで  
いるはるか頭上を、小さな影が飛び去ってゆく。

高い高い木々の上を飛んで渡るのは、ひとりの少年だ。

木の上で休んでいた鳥達が驚いて視界に写したのは、茶色の猿に似た尻尾。

けれど体格は子供でも立派に霊長類たる人間だ。

少年がこの森に現れるようになったのは、10年前だ。

奇妙な揺り籠に入って山奥に捨てられていたのを、その近くに住んでいた老人に拾われたのがその頃だ。

樹海も近かるう深い森林に受け入れられるのは早かった。ただ遅くまで動物達と遊び回って、養父に叱られるくらいには少年はこの森を熟知していた。

だが今日だけは、どこか違うのだと少年は知らず感じていた。立ち込める霧に混じる、妙な芳しい香りが少年の鼻腔をくすぐる。

ふと遠くに聞こえた、賑やかな声。

だが向こう先には森だけだ。人が居れる広場など無いはず。

少年は背中に背負う朱塗りの棒、養父から貰った如意棒を手に聞こえてくるであろう場所へと足を進める。

だんだんと複数の声が大きくなり、陽光に反射する影が分かる程まで近付き、顔を覗こうとした時だった。

「おーい、そっち行つたぞー!!」

間延びした男の声に重なったのは、頭上を覆う丸い影。

「へっ、？」

その影を確認しようとして顔を上げた瞬間、石に近い固さの丸い物体が、少年の額を狙った。

ゴンッ、

という鈍く重い音と小さな悲鳴が上がり、賑やかだった声が突然ざわつき始めたのは同じだった。

声、が聞こえる。

知らない声。

だけど、とても優しい声。

「どうすんのよヤムチャ。これで時代が変わったらどう責任取るのよっ」

「んな事言ったって、不可抗力だって！」

小声で言い合っているつもりかも知れないが、ばっちり聞こえているこちらとしては起きない訳にも行かない。

横になっていた手に、自分の尻尾に似た柔らかい物が触れ思わずそれを掴んだ。

「うひゃあああ?!」

途端に上がる甲高い悲鳴に、少年も慌てて起き上がった。

「なっ、なんだなんだあ？」

掴んだままのそれを引き寄せれば、手触り通り長い尻尾と続くのは、

猫に似た動物だ。

逆さになった動物と少年の目が合う。

「お願いっ、尻尾離して〜」

じたばたと泣きながら暴れる動物をまじまじと見つめ、少年は驚きを隠せない。

「なあ、いい加減離してやれよ」

真横から発せられた別の声に振り向けば、そこには豚の顔をした生物がいた。恐らく、自分と身長など大差ないだろう。

「うへえ〜、妖怪に会うのオラ初めてだあ」

やっと尻尾を離してもらった小動物は、豚と顔を見合わせ苦笑した。

「ホントに、『彼』なんだね」

「まさかこんな不思議な事が起こるなんてなあ」

「なあなあ、お前えら誰だ？」

きよろきよろとあたりを見渡し、自分達はテントの中に居るのだとは分かったが、目が覚めた時に聞こえた声の主はテントの中には居ない。

「僕はプーアルだよ」

鈴のように笑って小動物は応えた。



「俺はウーロン」

軽く首を傾げて名乗る2匹の瞳は、どこか親しげだ。少年にとっては初対面だが、気にせず2匹の名を呟き、にかつと笑った。

「オラは、孫 悟空だ！」

笑顔を浮かべれば、どうしてだろうプーアルとウーロンは、少しだけ寂しげに表情を崩しすぐに満面の笑みを浮かべた。別段それに気にしなかった少年はすぐに本題に入る。

「なあ、なんでオラ此处で寝てたんだあ？」

「それは、……」

「あら！目が覚めたのね」

プーアルの言葉を遮って、テントの外から聞こえたのは最初に耳にした女性の声だった。

そこへ視線を向ければ、少年の顔を見て喜ぶ嬉しそうな瞳とかち合う。

うなじまで短く切り揃えた空色の髪と、彼女によく似合う青色のワンピースは爽快感を思わせ、赤い口紅で艶めく唇を笑みで引き結んだ表情は、それなりの年齢を重ねてきたものだ。

そしてその女性の隣から顔を出したのは男だ。

頬と右目を跨ぐ古傷は目立つが、とても優しそうな表情をつくる男だ。

「よお、おでこのたんこぶは大丈夫か？」

男が心配げに問いかけてくれば、少年はそういえば自分は何か固い

ものに当たって倒れたのだと思い出した。  
額に触れてくる大きな手をじっと見上げていれば、男は安堵したように肩を竦める。

「すまねえな、野球やってたんだ。次からは気を付けるよ」

「元メジャーリーガーが聞いて呆れるよなあ、ヤムチャ」

「う、煩いぞウーロン！」

「ヤムチャ？」

ウーロンと男のやり取りに笑いそうになって少年は止めた。  
聞くのが始めてで首を傾げれば、ヤムチャと呼ばれた男も、やはり2匹と同じく、寂しそうな顔をしたがすぐに笑顔に戻る。

「悟空は、森で何してたの？」

ふと流れた沈黙が気まずく、慌ててプーアルが少年に問い掛ければ、少年はぽつぽつと口開いた。

「う？、なんかさあ、森が変だったんだ。昨日はすっげえ雷だったし」

「雷、…」

少年の言葉に女性は眉を潜める。

「そんで走ってれば、妙な気配がして、っっておめえ達がそいつらかあ。そこから頭痛くなって倒れたもんよ」

「そうなの…、ごめんねえ、ヤムチャのせいだ」

「うんにゃ、もう痛くねえからいいぞ」

「あらそう？」

くすくすと笑う女性に少年も釣られて笑い、なあ、と少年が声を掛ける。

「名前、なんてえの？」

尻尾を揺らせて、少年は問い掛ける。  
そうすれば、女性は優しくに笑った。

「ブルマよ、とっても素敵な名前でしょう？」

やはりブルマの瞳にも、プーアルやウーロン、ヤムチャと同じ親しみが含まれていた。

初対面に向けるものではない、それはもうずっと昔から知った仲のような…。

「ねえねえ、もう立てるの？」

プーアルが楽しげに少年の手を取ってくるので、少年も嬉しくなつて強く頷く。それにウーロンも便乗した。

「外行こうぜ。みんなお前の事心配してるしな」

「みんな？」

他にも誰か居るのか、と問う前にプーアルとウーロンに手を引かれ、嬉しそうに後を追うブルマとヤムチャとテントを出れば、穏やかな日差しが少年の眼を優しく照らした。

「おー、やあっと目え覚めたか」

眩しさに眼が慣れた直後に、声が掛かってきた。  
背の低い男だが独特な笑い方と、憎めない笑顔に好印象が強かった。  
彼の隣には、ちよつと目つきが鋭い女性が居た。だが彼女が纏う雰  
囲気は気強さと優しさが妙に混ざり合つたものだ。

「クリリンと、18号さんだよ」

プーアルが名を紹介してくれた。

視線を遠くに投げれば、もう2人居た。

ブルマに良く似た男の子と、こちらに厳しい眼差しを送る男。男と  
目が合えば、不愉快げに目を逸らしてしまった。

そんな態度の男に、ブルマは怒鳴っていた。

「態度悪いわよベジータ。こつち来て挨拶しないの？」

「……………」

どうやら男はベジータというらしい。

トランクスと名乗つた男の子は、緊張気味に挨拶して父親だろうベ  
ジータの下へ戻っていった。

別に悪意がある訳ではないのに。そんな2人に少年は首を傾げた。  
ブルマ達の優しい眼差しにこそばゆさを感じたが、気にせず少年は  
彼らの優しさを素直に感じ取つた。

「ねえ、孫君」

ブルマに名を呼ばれ、少年はクリリンから貰つた握飯を頬張りなが

ら振り返る。

「何だ？ブルマ」

口の周りにご飯粒を付けながら歩み寄ってくる少年にブルマは苦笑しながら、少年がやって来たであろう森の奥をじつ、と眺めていた。

「孫君が知ってる森は、今どの辺りだったの？」

「じつちゃんが言うにはな。妙な樹海が近くにあるから、行くなつて。あつ、でも言いつけ破っちまった…」

帰ったら拳骨では済まされないと慌て始める少年に、ブルマは何となく察しが付いたのかヤムチャに目配せすれば、ヤムチャは頷いてテントへ入っていった。

「ねえ！、クリリン！」

ブルマがクリリンの名を呼べば、彼はバーベキューの用意をしていた。

「何ですか？ブルマさん」

「方位磁石持ってたわよね。持ってきて」

「あ、はい。分かりました」

何をしようとするのか分からず立ち尽くす少年に、ブルマは問い掛ける。

「孫君はどの方角から来たか、覚えてる？」

「うゝゝ、と、多分こっち」

「…ふむ、東南あたりね」

「ブルマさん！これで良いですか？」

「充分よ、ありがとうっ」

クリリンから方位磁石を貰い受け、ブルマは少年が指し示した東南の方角へと、方位磁石を細工してゆく。

「此処に来るとき、妙な感じとかしなかった？」

「…なんかな、甘い香りがして、鳥肌が立った」

「気分は悪くしたの？」

そう問えば、少年は曖昧ながらも頷いた。

「恐らく空間の歪みに干渉した時、伴う代償の様なものかしら」

「くう、かん？」

「甘い香りは、何だか分からないわ…」

きょとんと見上げてくる少年に、ブルマは持っていた方角磁石を手渡す。

「コレ、なんだ？」

「孫君の帰り道を教えてくれる物よ」

「オラ、道に迷ったんじゃねえぞ？」

「いいえ、迷ったのよ」

確信を持ってブルマに返され、少年は驚きから不安を抱き始めた。だが優しく接してくれるブルマ達を疑う事が出来ない少年は、やはり己は迷ったのだらうと思い込むしかない。

「持ってきたぜ！」

ヤムチャがテントから出てきた。

手に掲げているのは少年が持っていた如意棒だ。それを少年に返すと、ヤムチャは少年の頭を撫でる。

「あとこれ、餞別だ」

小さな巾着には、キャンディが一杯詰まっていた。見たことのない色とりどりのキャンディに少年は満面の笑みを浮かべた。

ウーロンとプーアルのお気に入りだからと、特別に分けて貰ったのだ。

「ありがとな、」

少年が礼を言えば、ウーロンとプーアルは一瞬悲しげな顔をして、少年が気付く前に笑顔に変わった。

何だもう帰るのか？と残念そうに言ってクリリンと18号もやって来て、残りの握り飯をくれた。

ベジータは相変わらず遠巻きに此方を伺っているが、トランクスは律儀にお辞儀をして少年に別れを告げた。

「あいつ等にも、会わせたかったな……」

「あいつらって誰だ？」

「あ、あゝ、いや。何でもない……」

クリリンの呟きに、ブルマは少年の背後でクリリンを軽く睨んだ。クリリンは慌てて口を噤み、少年の頭を撫でてから別れの挨拶をした。

「良い？孫君。この矢印が示す方へ行くのよ」

「ん、分かった」

「途中で美味しそうな匂いがしても、そんな所に行っちゃダメよ」

「オラ、そこまで又けてねえよ」

少年が不満げにブルマを見上げれば、ブルマは眼を細めて笑っていた。

何処か寂しげな雰囲気を纏って。

「そうね。孫君は、しっかりしてるものね…」

そう呟いて、ブルマは少年から数歩下がった。

びようつ、と

音を鳴らせて風が強くなる。

木々が騒ぎ立て、雨の香りが急激にやってくるのが分かる。

空を見上げ少年は姿勢を正す。

貰った巾着を大事に懷に仕舞い方位磁石の位置を確認して、ブルマ達を見つめる。

「じゃ、あんがとなー!!」

「どういたしまして。お祖父様によろしくね…」

手を振って、少年はブルマ達に背を向ける。急激に暗闇になった森林に、少年は少し緊張した。

きつと、空腹だったら更に不安になって居ただろう。

クリリンから貰った握り飯がとても美味かったからそんな不安は無い。

息を大きく吸って、ブルマがくれた方位磁石の導くまま、少年は帰



るべき場所へと走り出した。

## Phantom?

「…行っちゃったね」

少年の背中が森林の中へ飲み込まれたのを見送り、プーアルは寂しげに呟いた。

雨がやって来るにも関わらず、じつと少年が消えていった森を見つめるブルマに、クリリンは問いかけた。

「未来が、変わってしまったのでしょうか」

クリリンの言葉に、息を詰まらせる気配が周りから起こった。

本来ならば、起こり得ない出会いを果たしてしまったのだ。

少年の記憶が残ればきつと、出会うべき時と場所が狂ってしまうのだろうか。

だからと言って、ブルマ達は少年に手を差し伸べることを躊躇しなかった。

あの太陽のような子供に、もう一度出会えた事が酷く嬉しかったのが本音だった。

「だとしたら僕達、悟空さんに会えなくなっちゃうんですか？」

大きな瞳に大粒の涙を溢れさせ、プーアルは問いかけた。

そんな悲しげに泣くプーアルをブルマは抱き寄せ、優しくに伝える。

「それは心配ないわ。未来のトランクスの時みたいに、起こるべき未来を事前に知らせ、変動させようと大きな働きはしなかった。実

際、私達は名を教えただけ。それに、これは一定の電磁波で調整したタイムトラベルではないわ」  
「どういう意味だ？ブルマ」

ヤムチャの不安げな問いに、ブルマは苦笑した。

「詳しい事は分からない。ただ、自然現象が起こした幻影かも知れない。ほぼリアルに近い、ね」

「じゃあ、あの悟空は幻影のような過去の悟空って事ですか？」

「そうよ。だから幻影は記憶には一切残らない。きっと、孫君が本来の場所へ帰った時、私達もあの子に出会った記憶を失うわ」

「じゃあ、悟空さんはちゃんと僕達と出会えるんですね！！」

「ええ、そうよ。だから泣かないで、プーアル」

優しく撫でてやれば、プーアルは涙を止めてウーロンと一緒に駆けていった。

そんな2匹を、ヤムチャは追いかけてゆく。

きっと、少年に分け与えたキャンディを食べに行ったのだろう。

出会った記憶が薄れゆく少年の笑顔を、少しでも忘れないように。

「…ねえ、クリリン」

未だ、森林を見続けるブルマにクリリンは名を呼ばれた。

18号は黙ってブルマの隣に歩み寄ると、何も言わず肩を並べて森林を眺めている。

彼女も、何か思う所があるのだろうか。

殺人兵器として生み出された時は、写真や情報でしか知らなかった

悟空の少年期の姿を、18号は冷たい表情で見つめていた。

「何か、伝えたかったのかい？」

18号に問い掛けられ、ブルマは肩を震わせた。

「ふふ、アンタにバレるんだもの。私って相当の悪女よね」

鈴のように笑うブルマだが、眼は悲しげなままだ。

「私達と出会った記憶は一切残らないと言ったわ、でもね……」

一度言葉を切り、唇を震わせる。

「もし、記憶が残ってしまったら。孫君のお祖父様の死を知らせる事が出来たら……」

「っブルマさん、それは……」

「でももしたら、未来が変わってあの子に、会えなくなるんじゃないかって、思ったら」

言えなかった

言いそうになった言葉を理性で押し止め、ブルマは少年へと過剰な接触は取らなかった。

プーアルやウーロン、ヤムチャが少年に触れている光景がどんなに羨ましかっただろう。

自分が、一番に少年と出会って。

少年の強さを知り、誰にも負けない絆を深めたのに。

それでも、その悲しみもあと少しで終わる。  
そんな気がして、安堵と不安が一気に押し寄せてくる。

「ごめんね、孫君」

ずるい大人を赦して

ただ、ブルマには忘れる事を謝るしかなかった。  
久し振りに声を出して泣けば、雨の香りが濃くなってくる。  
その時、複数の足音が聞こえた。

「何だ、ブルマ。どうかしたのか？」

昔から聞き慣れた穏やかな声に、ブルマはしゃくり上げて顔を上げる。

最初に視界に写ったのは、あの少年に良く似た子供だ。

その隣には、凜々しい顔立ちの青年。

さらに視線を遠くに向ければ、さっきまでの悲しみが嘘のように吹き飛び愛しさが胸を満たした。

出会った頃と変わらない、純粋な瞳で見つめてくる彼に、ブルマはまた泣きそうになる。

『おめえを泣かした奴は誰だ？オラがぶっ飛ばしてやる！』

ふと、あの頃の少年の言葉が脳裏をよぎりブルマは微笑めば、隣にいた18号も声を上げて笑った。  
クリリンやヤムチャ達も釣られて笑ってくれる。

「皆さん、どうかしたんですか？ね、お父さん」

状況が全く掴めていない青年をよそに、彼はブルマに問い掛けた。

「何か、嬉しい事でもあったんか？ブルマ」

「そうね、嬉しい事だわ。でも、忘れてしまった…」

記憶に霞が掛かり、あの笑顔が消えてゆく。

愛しい気持ちさえも消えてしまう前に、最後に精一杯微笑んだ。

嗚呼、なんて仕打ちだろう。

望めない出会いなんて、期待を抱いてしまっただけなのに。

ただ、君の幸せだけを祈った。

迫り来る雨音を聞きながら、少年は方位磁石を頼りに駆けてゆく。

鳥や動物達が迫り来る雨に怯えて居なくなっていく空を仰ぎ、息を吐いた。

どうしてだろう。

立ち止まったら、酷く悲しむブルマ達の顔が脳裏をよぎり、がむしやらに木々の間を走り抜ける。

途中、甘ったるい香りが少年の鼻腔を撥った。

喉から出かけた声を押し止め、ヤムチャ達から貰ったキャンディを頬張れば、甘酸っぱい香りが森の誘惑を掻き消した。

雨の冷たさなんか全然、感じない。

走って走って、木の根に転びそうになっても、何故かキャンディの甘さに涙が零れそうになっただけ、それでも少年は方位磁石だけを頼りに走り続ける。

「じいちゃんっ」

会いたい人の名前が無意識に喉を鳴らせ声にする度、胸の痛みが増していく。

自分を拾ってくれて、名前を授けてくれて、戦う術を教えてくれた、厳しいけれど優しい父。

その養父の優しい眼差しが、ブルマ達の眼差しとそっくりだったから。

たがら、

「じいちゃん！じいちゃん！！じいちゃん！！！」

こんなにも、涙が溢れて止まらなかった。

深い茂みが視界を遮り、次いで淡い光が降り注いだ。  
夢から覚めたような優しい感覚に、瞼を開けば。

そこは少年には見慣れた広場の景色だった。

先程の迫り来る雨音や甘い香りは嘘のように消えており、空を仰げば、漆黒の紗幕に煌めく星を散りばめた静かな夜が広がっていた。

かたん、

と引き戸の音に視線を前に戻せば、小さな家から老人がランタンを手にかけて出てきた。

「、悟空なのか？」

囁れた声に少年は、その姿が養父だと気付くのに時間は掛からなかった。

じいちゃん、と声にならず悲鳴に近い声を上げて、両手を突き出し養父に力一杯抱き付いて、我慢していた嗚咽を漏らした。

「お前、2日も何処へ行っておったんじゃっ」

無断外泊した子に一喝してやろうと振り上げた手は、泣きついてきた少年を責める気にもなれず、その手は優しく背中を撫でる。

外は寒く部屋へ戻り、薬湯を飲ませて落ち着かせてやれば、少年は樹海で遭った事をポツリポツリと零した。

「そうか、あの樹海へ行ったんじゃな」

「うう、ごめん。言い付け破っちゃった。オラ、明日っからうんと修行頑張るから！！ごめんよう、じいちゃん……」

「よしよし、そんなに泣くでない。儂はもう怒っとらんよ」

養父は少年の頭を撫で隣に座ると、ある昔話をしてくれた。



「遙か昔の話、神になる資格を持った術者がおった。その者は、結婚の約束をした者が重い病で死んでしまったのを遠い旅先で知ってしまったてのう、酷く悲しんだそうじゃ……」

愛する者を救えず、最後を看取することも出来なかった。

その悲しみは深すぎて、それは周囲をも巻き込んでしまった。

神に近い力を持った術者の影響は凄まじく、それを危険と感じた神は、その術者を樹海へと追いやってしまった悲しい物語。

悲しみの力は樹海を包みその力は幻影となり、樹海へと迷い込んだ者を惑わすと言われている。

そんな話を養父から聞き、少年は思い出したように懷に隠していた巾着を取り出した。

「あんな、樹海で会った皆から貰ったんだ」

「悟空、それは真なのか？」

目を見開いて信じられないと驚く養父に、少年は養父に見せようとその巾着を取り出した。

「、……あれ？」

だがそれは、巾着の形をしてはいなかった。ただの落ち葉や石ころに変わり果てていたのだ。

迷わないようにと貰った方位磁石は、石化して原形を止めていない。

「悟空や、誰と会ったんじゃ？ もしや幻影じゃ……」

「ち、がう。ちがう！、だって本当に会ったんだ！！握り飯貰って、キャンディだってっ、それに沢山遊んだんだ！！」

頭をふるふるとさせて、涙が溢れ出すのを堪えた。

少年は、樹海で出会った者達の顔を思い出せないでいた。

声には出していないでもキャンディを貰った記憶も、方位磁石を貰った人の笑顔も、笑い合っただけに掛けた言葉も。

全部全部、掌にのる石化した方位磁石が砂になってすり抜けるように、形も残さず消えていく。

「やだよう、う、ひつく…」

もう、何故自分が泣いているのか、何を覚えていたのかさえも記憶に残っていない悲しさに、少年は声を上げて泣いた。

「悟空、…」

ただ感情のまま泣き続ける少年を、養父は優しく腕の中へ抱き締める。

少年の言葉が嘘偽りではない事を悟り、養父は愛し子の頭を撫で続ける。

そうしていれば、泣き疲れた少年は次第に嗚咽から寝息へと変えてゆく。

冷えてきた夜風の為に暖かくした掛布を掛けてやれば、少年は最後に誰かと知れぬ者の名を呼び、眠りの中へと墜ちていった。

ふいに、甘い香りが養父の鼻腔を掠めた。

視線を床に向ければ、そこに一粒のキャンディが落ちていた。

虹色に輝くキャンディは、しかし養父が手に取る前にそれは砂となって消える。

、  
……くん……

鈴に似た人の声が聞こえたが、養父は恐怖を覚えなかった。

「お前さんらが、儂の息子を導いたんじゃないだろうか？」

誰かが聞いている訳もなく、養父は嬉しげに呟く。

「、ありがとう」

冷たい夜風に乗った気配が、笑った気がした。

さああああ、と優しい雨が降り始め、小さな屋根に降り注ぐ。

その雨は少年を迷わせていた雨とは違い、まるで悲しみを洗い流すように子守歌に似た穏やかな雨音だった。

いつか、

いつかきつと巡り会えるだろう運命に。

時折、予期せない出会いが生まれる。

それは、純粹な少年と、少年少女だった者達には悲しみしか与えられなかったけれど。

愛しさや優しさは、過去も未来も変わらず存在し続けたことを証明

するには十分な奇跡だった。

記憶に残らない切なさ、時間をかけてゆっくりと実を結び、やがて花開くだろう。

忘れられない出会いと、長い長い旅をする為に。

『ねえ、孫君』

『何だ？ブルマ』

『運命、て信じる？』

『何だそれ、食いもんか？』

『ある意味、おいしいかも…』

- F i n -

完成にかなり時間をかけた割には、こっ恥ずかしいオチになってしまいました、少しでも楽しんで下されば書いた自分としては至上の喜びです。

このストーリーは、まだブルマ達に会う2年前に、悟空が森で未来のブルマ達と遭遇したお話です。

でも結局ブルマ達も悟空も出会ったことすら忘れてしまうのですが、忘れたくないと泣き崩れる悟空が書きたかったので、私自身は書き出せて満足しました。

長くなりましたが、ありがとうございましたm(u|u)m

## **L a s t   D a n c e ? (前書き)**

此方は、ある記念祭に出品したカカロットと悟空の小説です。

別世界で生きるカカロットが突然、悟空達の世界へ現れる話です。

女性向け要素の強い作品ですが、泣き虫なカカロットを皆が愛してくれる切ない物語に仕上がりました。

長いですが、どうぞお付き合い下さいませ。

## L a s t D a n c e ?

踊るように全ては光を結集して、悲しみを幸せに変えて走る抜ける。  
優しい手はいつだって、君の目の前にあった。

不思議な夢を見る。

欠けた月光に照らされ、静かな森林に囲まれた清らかな湧き湯に浮かぶ裸体の自分。

星の美しさを憂う哀しさ。

そして故郷への思い。

長く細い道を走り続ける。

とても大切な何かを失った、強い心の痛みが息を弾ませる。

色彩が鮮やかに変わり、質素だが賑やかな街並みに眩暈を覚える。

自分に興味のない父。

優しいというより甘い兄。

頼もしい父の同僚達。

よく気にかけてくれる上級者たち。

皆、自分の名前を呼んでくれる。

けれど一人だけ、自分を見てくれない奴がいる。

大柄な体はこちらに背を向けて、無言で自分を拒絶していた。

『

』

唇だけで名を呼んでみた。

でもその名を、自分はいま思い出せない。

そうしていればゆっくりと振り返り、静かに睨んでくる。

『 の、い は、ない…』

よく聞こえない。

でも張り裂けそうなくらい胸が痛かったから、きつと酷いことを言われたのだろう。

そして、そこで夢は暗転する。

いつものことだ。

頭痛も、胸の痛みも。

瞼を押し開けても暗闇だけだと思えば、随分と寂しさが後遅れで心の痛みとして奥で渦巻く。

寝汗だけではない嫌な汗に息を付けば、軽い頭痛。

暗闇の中でも霞むことはない黄金色の髪は不安げに揺れ、碧玉の瞳は俯いてばかりで悪夢を怖がる子供のようだ。

そしてようやく、呼吸が落ち着いたと同時に周囲に気配を配る。

しばし待って、壁一枚隔てた向こう側で眠る人物たちの安眠が消失していないことに、深く安堵する。

自分のためにと用意された部屋が、時折冷たさを感じる。

眠気も薄れて、ズクンとこめかみを締め付ける痛みに頭を振る。

痛みは、薄れず消えただけ。

知っている声に呼ばれた気がして、悟空は目を覚ました。

横に視線を向ければ、妻が安らかな寝息を立てていた。

心地よい温もりに自然と微笑み、目と鼻の先にいる妻の頬に軽く口づけを贈ると起こさないように静かに寝台から拔出す。



忍び足で寝室を出て、迷う事無く隣の部屋へと行く。

閉じられた扉に耳を澄ませば、寝息ではない呼吸が聞こえる。少しか意識を集中すれば、その呼吸音に不安げな溜息が含まれている。

悟空は視線を伏せると、迷いなく扉を軽くノックした。

「カカロット」

最近新しい家族となった者の名を呼べば、扉の向こうから息を飲む気配が感じられた。返事が返ってこないで、悟空はゆっくり扉を開く。

質素だが落着きのあるベージュ色の壁紙の部屋には、まだ真新しいクローゼットとベッドだけが置かれている。

後ろ手で扉を閉めると、悟空はベッドの向こう側にいる黄金色の髪を見つめる。

「カカロット」

もう一度呼べば、カカロットは肩を震わせて顔を上げる。

「…悟空」

掠れた声や顔は悟空に似ていて、けれど纏う雰囲気はどこか違っていた。

悟空が苦笑してベッドの隅で座り込んでいるカカロットに歩み寄り、手を伸ばしてくる。

カカロットは自分に触れてくる悟空の、間近に感じる体温に不安だった心が急に落着きを取り戻していた事を感じた。

「呼んだだろ、オラを」

腕に触れてくる指先に、カカロットは唇だけで悟空の名を紡ぐと何も言わずに悟空に抱きつく。

悟空は決して拒まなかった。強く抱きしめても優しく背中を撫でてくるだけで、ただ名を呼び続けた。

「悟空」

「カカ」

名を呼べば、悟空は赤子をあやす様に応えてくれる。

正直、安心した。

しかしそれと相反するように夢を思い出しては心は軋む音を止めなかった。

悟空の肩越しに、姿見から自分が映る。

酷く沈痛な面持ちで、瞳は何処も見えてはいなかった。

何故だろうとカカロットは思う。

夢の痛みは思い出しても夢の内容はとんと覚えられなかった。

ただ、あの男の言葉だけが自分を苦しめる。

「同じ夢を見る？」

牛肉の干した燻製とレタスを挟んだベーグルサンドを頬張りながら、悟天はテーブル越しからもう一人父になったカカロットからそう言われた。

快晴の正午。涼しい木陰を利用して、庭で昼食を取り始めた孫家と長男夫婦は、カカロットが頻繁に見る夢のことを聞いた。

もうすぐ3歳になる長男夫婦の愛娘、パンを膝に抱きながら母であるチチと義姉であるビーデルも顔を上げる。

中学3年になった悟天はテーブル越しに座る二人の父を交互に見て、ふと問いかける。

「それって、カカロットさんだけ？」

「そうだが、どういう意味だ？」

「いや、お父さんたちって双子みたいなものでしょう」

悟天の言葉にチキンを持ったままだった悟空とカカロットは、顔を見合わせ首をかしげる。

「いや、オラは見ねえよ」

「そっかあ、」

少々お年頃になった悟天は恥ずかしそうに腕を組む。

カカロットが同じ夢を見るようになったのは、彼が悟空達の前に現れてちょうど1カ月を迎えた頃だ。

最初はほとんど霞みで気にならなかったが、段々と霞みは鮮明になってゆき、そして不眠が続くほどカカロットの表情はあらかさまに元気を失くなっていった。

カカロットは夢を見る度に真夜中に起きて、不安で一杯になるそう  
だ。

そしてその強い不安が、無意識に悟空を呼んでしまう。

「夢に、心当たりはないんですか？」

書斎から出てきた悟飯が、昼食の匂いに惹かれてやってきた。

少し疲れ気味な笑顔を家族に向けて、片手には凶器並みの分厚い本

が握られている。本と愛娘を交換して、ビーデルとチチは皿の片づけを始めた。

しばらくは父親の膝の上で座っていたが、パンはぐずって隣に座るカカロットの膝へと行ってしまった。

慌てて両手を差し出せば、パンは嬉しそうに笑って指を握ってきた。胸元までよじり登って、カカロットのくすみのない黄金色の御髪に触れようとするのを、カカロットは赤ん坊を落とさない為に支えるので精一杯だ。

父親ともう一人の祖父が寂しそうに見つめてくる。

最初はあー、とかうー、とかだけだったが今はレパトリーが増えて、物や生き物に名前をつけられるようになった。

「もうすぐ喋れるようになりますよ」

「へえ、女の子って喋るの早いんだね」

悟天に頬を撫でられて笑い声を上げるパンに、緊張気味だったカカロットも笑顔を見せ始める。だがすぐに、その笑顔は影をつくらせた。

それは一瞬だったからか、近くで見ていた悟飯だけが気付いた。

「か、…」

名前を呼ぼうとして、遮るようにビーデルが悟飯を呼んだ。

何だか慌ただしい声に悟天も家に向かっていく。悟空も立ち上がるうとして、悟飯はパンの世話を頼んでカカロットに目を向ける。

「後で、渡すものがあります」

「何だ？それ、」

「まだ秘密です」

ちよつと、苦勞しました。と悟飯は笑つてビーデルの呼び声に向かつていった。

さわさわと、涼しい風が二人の頬を撫で去つてゆく。

パンは安心しきつたのか寢息を立て始める姿に、悟空は満面の笑みを浮かべる。

その悟空の横顔を、カカロットは見つめていた。

小さな温もりが、自分の手にすり寄つて身を任せている。

こそばゆい心が違う意味で騒いで落ち着かない。

手のひらに伝わるパンの温もりと、左肩に凭れる悟空の温もりは一緒のようで、どこか違う。

パンを見つめる、風で乱れた前髪から覗く薄い額。

短い睫毛が震え、嬉しさに膨らんだ頬と無邪気な笑窪。

同じようで、違う温もり。

恐る恐る伸ばした手が、指が、悟空の髪を撫でた。

そうすれば、悟空はカカロットを見上げてくる。

まだ、この気持が何なのかカカロットはわからなかった。

知ろつとすれば、すぐさま夢の一部が蘇ってくる。

怯えて手を引っ込めば、今度は悟空が手を伸ばしてきた。

しかしカカロットは顎を引いて拒んでしまう。悟空は苦笑しただけだが、違和感だけは拭いきれなかった。

「お義父さん」

長男夫婦の家宅。

ゆつたりとした昼食も終わり、絨毯に寝転がって子供向けの絵本を

真面目に読んでいれば、リビングから顔を出してきたビーデルが声を掛けた。カカロットは顔を上げビーデルに振り向く。

「…、俺か？」

カカロット以外には、誰も居ない。

悟飯は電話に呼ばれてブツブツ言いながらまた書斎に籠ってしまつたし、悟天は宿題だ何だかんだ言いつつ母の手伝いをしている。悟空がパンを見ている間、カカロットは先程までビーデルの手伝いをしていたのだ。

戸惑い気にビーデルに返せば、まだ年相応と離れた無邪気な笑顔を見せた。

「他に誰かいらしゃいます？」

ビーデルのまだ呼び慣れていないのか、恥ずかしそうに微笑んで。鈴のように喉を震わせて笑うビーデルに、カカロットはどんな顔をすれば良いのか分からない。

清楚な白いワンピースに花柄のエプロンを付けたビーデルはカカロットに歩み寄ると、手に持っていた物をカカロットに見せる。手に持っていたのは、赤ん坊用のブランケットだ。

「少し、お天気が悪いので渡してきて貰えうと助かるんですが」

私は、すぐには探せられないので。と苦笑するビーデルにカカロットは特に断る理由も無いので、柔らかなブランケットを貰う。

「なあ、さっきの…」

「はい、なんですか？お義父さん」

「いや、何でもない…」

何だか背筋が痒くなるようなその呼び方に、けれどカカロットは嫌悪を感じなかった。

ただ、どう応えてよいのか知らなかったから、カカロットは無難に微笑むとビーデルは頬を朱に染めてしまった。

ほう、と息を付きたくなるような華やかな表情だ。チチも、時々そんな顔を見せてくれる。

「3時には、帰ってきてくださいね。おやつ、作って待ってますから」

玄関まで送ってもらい、カカロットはブランケットを右手に持って風に乗って飛翔する。

いつてらっしやいお義父さん、と律儀に見送るビーデルにカカロットは小さく手を振ると、恥ずかしさを誤魔化すように宙を蹴る。真正面から吹いた風に、カカロットは目を細め悟空とパンの気配を探った。

「お義父さん」とビーデルが呼んだ言葉に、少なからず心を躍らせながら。

パオズ山の深い竹林に降り立てば、陽光の光が伸びた奥から響いてきたのは赤ん坊の泣き声だ。

気配を探らなくても分かる竹林に響き渡る心地よい泣き声に、カカロットは自然と足が向かう。

肺いっぱい広がる澄んだ空気が、小さな泣き声に震える。

肌に触れるほどの密着した竹林を抜けて、ぽっかりと空いた広場にたどり着く。

その広場の中央に、泣き声の持ち主が居た。

不安げに泣き続けるパンを優しく抱き上げ宥めているのは悟空だった。

背中を撫で続けていれば、パンはぐずるのを止めて落着きを取り戻している。

小さな鼻歌がカカロットの耳をくすぐった。

目を閉じてパンの背を撫でながら歌うのは悟空で、上空から降り注がれる陽光の下、その温かな光景を見下ろしているのは大きな樹木だ。

竹林に囲まれて、竹林とはまた違う葉を揺らす音に森の静寂が崩壊した。

子守唄に応えるような樹木のざわめきに、カカロットは小さく息を飲む。

この場所は、悟空が養父である孫 悟飯に拾われた場所であり、悟空がカカロットを見つけた場所だ。

今でも、瞬時にその光景を思い出せる。

暗い道を歩き続けた苦しさの中で誰かに呼ばれた気がして目を覚ませば、あの樹木の傍で、動物達に囲まれて眠る自分が居た。

目が覚めても不安が薄れずつと膝を抱えていれば、最初に見つけてくれたのはパンと悟空だった。

驚いて、声をあげて、そして頬を染めるくらい笑って悟空が抱きついてきたのを覚えている。

そして、パンに釣られて泣いたのも思い出した。

無理やり引き離された物が、欠けた物が心に埋まっていく温かさに。

「、カカ」

心が痛むけれどこそばゆい感情に浸りすぎて、悟空に名を呼ばれて



我に返る。

「どした？」

頬を染めて微笑む笑顔は、チチとビーデルの微笑みと被る。

しかしどうしてだろう。何処か違々とカカロットは感じた。

しがらみなんか関係ない、ずっと胸の奥で脈打つ感情に、カカロットは微量な痛みを知る。

だが痛みの理由が分からない。

そんな思いを知られない様に歩みだす。

眠り始めたパンにブランケットを羽織らせると、同じ身長の悟空の眼とかち合う。

いまだ笑みを絶やさずにいる悟空に、きゅう、と喉が鳴ってカカロットはその微笑みに吸い寄せられ目の前にある悟空の唇に己のそれを重ねる。

昼食の時は叶わなかった、一番悟空の温もりが直に感じられる場所。かさついた唇同士が啄む。

最初は驚いて硬直していた悟空は、パンを抱く腕に力を入れなおして止めていた息を吐いた。

ゆっくり離れると、風が大きく凪いで二人の髪を乱した。

優しく悟空の髪に指を差し込めば、悟空は溜息を零して眼を閉じる。何の合図だろうかと、カカロットは静かに思う。

眉間に皺を寄せて、悟空はカカロットの指先の体温に身をゆだねる。ただそれだけだ。この光景を見ているのは樹木だけ。

もう一度唇に触れようとして、カカロットに鋭い痛みがこめかみを重くさせた。

とっさに唇を噛み締めたが、悟空は見逃さなかった。

「カカ？」

「…悟空、は」

パンの安らかな寝顔を見下ろしながら、カカロットはゆっくりと問いかける。

「ど、して、俺を見つけたんだ？」

樹木の優しいざわめきは気にならない。

カカロットの声は、はっきりと悟空に伝わる。

悟空に触れた嬉しさも、思い出した夢の一部の痛みも、ない交ぜにした声で。

「見つけた…、そうだな。オラは力力を見つけた」

鳥たちが騒ぎ、動物たちが鳴き、木々が騒いでいたあの日。

迷わなかった。昔から知っている感じがして、不安はなかった。

優しい風に導かれ、大きな樹木の下まるで幼児を囲んで守る動物たちの中に、カカロットは居た。

そこは昔、悟空自身も泣きじゃくって養父が見つけてくれた場所だから、より強い感情が高鳴って、すぐに愛おしさは込み上げてきた。

悲しげに俯いていた碧玉の瞳に悟空の嬉泣きな顔が映れば、カカロットも釣られて泣いてしまった記憶も蘇る。

「何故、俺を疑わなかった」

「疑って欲しかったのか？」

どうして、何故、そんな問題など頭になかった。

知らない場所で目覚め、誰の名を呼んでいいのかさえ分からず仕舞いだったカカロットを悟空が見つつけて森の中で一時間近く抱きつい

ていた後、カカロットの手を引いて悟空は森を抜けだし、興奮のまま家族や仲間たちにカカロットを会わせた。

最初は驚いて疑った仲間たちは、悟空の必死の説得と普段からの彼らの優しさに、カカロットが迎えられたのもそう時間は掛からなかった。

「だって、オラはカカは大好きだから。みんなもそうだぞ」

純粹でまったく曇りのない瞳は、カカロットの心を優しく深く抉ってくる。

嬉しさと悲しさと寂しさを。だが何かが引つ掛かる。

「俺は、本当に……」

悟空がふいに顔を上げた。カカロットも空を見上げる。

空はまだ青いが、そう遠くない場所から水の香りが風に乗って届く。雨の匂いだ。

「帰ろう、家に」

カカロットが言おうとしていた言葉を、悟空は笑顔で遮る。

空いた手を差し出せば、カカロットは無言でその手を掴もうとして、樹木を見上げる。

雨の香りを運ぶ風に揺られ、樹木は静かに静寂を乱す。

全身を包もうとする樹木が持つ自然の力に、カカロットは無意識に息をついた。

手を掴まれて引つ張られ視線を戻せば、歩き出す悟空の背中があった。

カカロットは口を開いたが、何を言うべきか迷ったのでそのまま閉

じて、足は帰路に向かう。

ポツリポツリと降り始める透明な滴が、段々と霧が立ち込めるような濃厚な水の香りに、悟空はパンを大事に抱え走り出す。その悟空の後を追ってカカロットも走り出した。

だからだろうか、悟空が滑って転ばない様に後ろをぴったりと続くカカロットは気付けなかった。

雨に葉を濡らす樹木の下で、淡い光に包まれた誰かが立っており寂しげにカカロットの背中を眺めていたのを。

## Last Dance?

滲み出るような茹だる暑さが、長い夜を照らす三日月の月下に漂っていた。

久しぶりの家族団欒の一日だと思っていたが、午後からは大雨が降ってしまった。

夕方まで雨は止まず休みだったはずの悟飯は、何度目かの電話で結局は書斎に引き籠もったままとなった。

悟天は学校の宿題を終わらせてCC社に外泊に行っだし、チチは明日の朝食の仕込みを終わらせ、すっかりカカロットの膝の上を占領して寝てしまったパンをビーデルに手渡せば、夜は更けあとは就寝に着くだけとなった。

皆が寝静まり、辺りは静寂に満たされる。

胸が温かさに満たされる太陽の光は暗闇に隠れ、カカロットに睡魔を与えてくる。

けれど、カカロットは素直に眠りに着くことに躊躇していた。

胸が引き裂かれる欠けた記憶の曖昧な夢に、眠ることに恐れを感じたのだ。

悟飯が言っていた。同じ夢は奥底に隠れた忘れてはいけない記憶の可能性が高いのだと。

ただそれが、カカロットに大きな不安を増しただけに過ぎない。

それでも脳は心を見無視して睡眠を求めている、カカロットはもう一度月を見上げると、ベッドに身を預ける。

睡魔が瞼を重くするたび、夢が嫌で体が勝手に跳ねてしまう。だがそれも短い間だけで、体はゆっくりと呼吸に合わせてシートに沈んでゆく。

夢が怖かった。

様々な胸の痛みに苛まれるのが。

思考が暗い深海に堕ちてゆく感覚に、泣きたくなくなってしまふ。

簡単に泣けないのは、恐らくは自分の意地だろうか。悟空達の顔が浮かんで、名を呼ぶ前に霧のように消えていく。

深い悲しみとして記憶に呼び覚まされるのなら、どうして自分は、この【世界】に來たのだろう。

ただひたすら、何度も闇の中を走り続けた。  
別に何かに追いかけている訳でもない。逃げる理由も分からない。

ずっと、一生闇の中を彷徨い続けるのかと夢を見るたびに思う。

一筋の光が闇の中を仄かに照らし出す。

眼を凝らせてその光を追いかければ、光の中には悟空達が居た。

悟空の妻や息子夫婦達、仲間達がパンを抱いた悟空を取り囲んで笑い合っていた。

カカロットは、声を掛けることを躊躇した。

手を伸ばせば触れる位置にカカロットは立っているのに、誰一人としてカカロットを見てはいなかった。

まるで、光と闇の間に壁があるような、絶望さえ感じる線にカカロットは息を飲む。

この光景をカカロットに見覚えがあった。

悟空に手招かれ、皆の前に連れてこられた時。皆の注目の的にいたのは自分だったけれど、やはり悟空は中心にいて酷い疎外感を感じた。

楽しげに談笑していた悟空が突然カカロットに視線を向ける。しか

し他の皆はカカロットに見向きもしない。

いつも自分に向ける優しい微笑みに、カカロットは安堵の息をついたが、それもつかの間だった。

『おめえは、何処から来たんだ？』

その瞬間、一度もこちらに視線さえ向けなかった仲間達が一斉にカカロットに顔を向ける。

皆、笑顔を浮かべているのに、視線は冷たいほど無機質で、手足が異常に冷えていくのが分かる。

『なあ、カカロット』

「…分からない」

辛い問いは胸を深く抉り暗く靄の掛かった記憶に、カカロットは悟空の問いに応えられない。

握っていた拳は小さく震え、自分の存在理由に自信が薄れてしまいそうだ。

「俺にだって、分からない」

視線を俯かせれば、闇に飲まれかけた自分の素足が見える。

何故とか、どうしてとか、もうすでに結果が見えていた。自分がこの世界に来てしまった理由なんて知る訳がない。

だってもうこの世界には、既に『俺』が居るじゃないか。同じ存在が『ふたつ』あっても、意味がないじゃないか。

夢の中とはいえ、いつかはこうなってしまうと、記憶が暗示していた。

ならどうして、彼らと出会ってしまったのだらうとカカロットは思う。

不意に、カカロットの冷たい右手に温かい指が絡む。

驚きにそちらに視線を向ければ、見知らぬ少年がカカロットの傍に立っていた。

背中まで届く長い黒髪に、感情が乏しい虚ろな黒い瞳。

少年の背恰好に微かに見覚えがあった。

ベジータが、着ていたプロテクターと同じ系統のものだ。

突然現れた少年に、カカロットは無意識に口をついた。

「お前……」

「……、うん？」

静まり返った書斎の奥、執務机だけが仄かに光に灯されて、その前でまだ仕事をしていた悟飯が突然、顔を上げた。

妙な空気を感じた気がして、無言になってしまった悟飯を心配して携帯電話の向こうの相手が声を掛けてきた。

「ああいえ、何でもありません。では、最終確認は明日、研究所でするということ……、はい、宜しく願います」

若干強引に電話を切れば、悟飯は持っていた本を閉じて窓に掛かったカーテンを開く。

妙な気は外から、隣接する実家から感じた。



窓から実家を眺めれば、家の明かりは付いてはいなかった。

父の気配に似ていたけれど、こんなにも不安定なものは感じた事がなかった。

だとすれば、

「カカロットさん？」

父から最近、夢に魘されて彼が夜中に起きてしまつと相談をされていた。

カカロットは、迷惑を掛けさせまいと自分の気持ちを伝えてくれないのでその都度、悟飯が遠まわしに問うが、彼は結局は未だ全てを話してくれない。

執務機の引き出しに入っている、カカロットに渡しそびれた物を見つめ深く溜息を付いていれば、書斎をノックする音が聞こえた。扉を開けば、寝間着姿の妻と、泣いている愛娘が立っていた。

「どうしたの？」

「パンが泣きやんでくれないの」

不安そうなビーデルからパンを受け取れば、軽くあやしても娘は悲しそうに泣き続けるだけだ。

「あのね、変だと思うのだけど、…」

「何かあったの？」

「ええ、不思議な夢から覚めたら、パンが突然、火がついたように泣いちゃって」

「それ、どんな夢？」

「たぶん、カカロットさんの、」

ビーデルがその名を口にすれば、パンの鳴き声が更に酷くなる。

悟飯は、肌が栗立つような変な悪寒を感じた。

眉間に皺を寄せる悟飯に、ビーデルは自分の夢とパンが泣き止まないことに理由があるのかと問いただす。

悟飯は俯いていた顔を上げると、ビーデルの手を取った。

「実家に行こう」

「え、今から？寝てるんじゃない…」

「いや、きつと起きてるよ」

悟飯の言葉に迷いはなかった。まだ泣き止まないパンを抱えなおし、疲れ気味の表情も、寝間着の恰好もお構いなく、玄関の扉に手を掛ける。

この少年が同じサイヤ人だと直ぐに分かった。

無言でカカロットを見上げてくる少年は、じつ、とカカロットの右手に触れた指に力を込める。

暗い夢の中で、唯一現実味に近い少年の指の力と低体温に二人の場所だけ空気が変わった。

冷たい視線を送っていた悟空達が、まるで紙吹雪のように脆く崩れ闇に溶けてしまう。

カカロットはそれを寂しそうに見つめていれば、少年が小さく問いかける。

「寂しいのか？」

「…、寂しい、か」

自嘲気味にカカロットは笑えば、少年の手を引いて歩き出す。闇は道筋を表わすことも無く、二人をただ無意味に迷わせる。

「お前なんだろう？こんな夢を見せているのは」

しかし少年はカカロットの問いに応えない。

ただ困った顔をして俯くだけで、闇が少年に呼応して蠢きだす。

「いいんだ」

「……、」

「俺はもともと、あの場所に居るべきではなかったんだ」

語尾は弱弱しく、カカロットの背中が丸まってゆく。

とうとう嗚咽を零して泣き崩れてしまった。

嗚咽は闇にむなしく響くだけで、少年はただカカロットを見つめるだけだ。

「なあ、何でだ」

零れた透明な滴は闇に波紋を残し、脈動のように波打つ。

「こんな夢を見せるくらいなら、どうして俺は悟空の世界に来たんだ」

胸を抉る霞むあの夢は、まるで忘れてはいけない罪の証に似ていて、大事な記憶だけが欠けてしまった辛さが、激しい感情に変わろうとする。

ずっと見つめていた少年が、ゆっくりとカカロットの頬に触れる。

無音だった闇に、鈴に似た軽やかな音が響きだす。

少年はカカロットの頬を両手で包むと、カカロットは涙を流しながら

ら瞼をおろす。

カカロットの額に、冷たい感触が堕ちてくる。

この感覚を、覚えている気がした。

ずっとずっと、遠い記憶。

胸を掠める切ないほどの約束を、この少年とした気がする。

けれど、思い出せない。

強い感情が溢れだしてきて、カカロットは思わず呻けば、その声は何処までも続く闇を遠く貫いた。

光が渦巻く中から弾き出されたような感覚に、悟空は飛び起きた。

驚きに止めていた呼吸を思い出して深く深呼吸すれば、寢室を満たす消えかけた香炉の香りに夢から覚めたのだと漸く気付いく。

突然起きてしまったので、慌てて隣にいる妻に視線を送れば、彼女も悟空と同じタイミングで起きていた。

一気に覚めてしまった眠りよりも、どっと押し寄せてきた冷や汗に、二人は途方に暮れてしまった。

「なあ、悟空さ」

「チチ、もしかしておめえも？」

突然、訪問のベルが暗い家じゅうに響く。

肩を揺らせたが、チチが慌ててベッドから降りてリビングへ向かう。床に落ちていた下穿きを履き直し、悟空もチチの後を追おうとして廊下に出れば、今はカカロットの部屋となっている前で足が止まった。

肌を不気味に鳥肌が襲った。

時計を見れば、いつもカカロットが夢で起きてしまう時間だった。それが、今夜は全くなかった。しかし逆に悟空の不安を強くする。恐る恐る扉に手を掛ければ、なんの抵抗も無く開く。

相変わらずの殺風景の部屋に、何の変哲もないクローゼットと鏡と、ベッド。

そのベッドへ迷いなく進めば、人の足が見えた

カカロットだ。ブランケットを羽織って、少し背を丸めて規則的な呼吸音で眠りに着いていた。

ほ、と悟空は安堵の息を付こうとして、言い知れない不安が再びどつと押し寄せてきた。

カカロットに呼ばれて夢から覚めたのではなく、拒絶に近い形で飛び起きた、何の色彩も無かった暗い夢に、悟空は息を飲む。

ベッドによじ登って、ピクリとも動かないカカロットの顔を覗けば、悟空は表情を険しくさせる。

「ッ、カカ」

カカロットは、冷や汗を流しながら眠るという言葉が相応しくない寝方をしていた。

カカロットの手に触れば体温はすっかり失われ、規則的というより、病人に近い小さな呼吸に悟空は言い知れない不安に肩を震わせる。

「お父さん」

夜中の訪問者は悟飯達だった。

名を呼ばれ、悟空は泣きそうになる表情で部屋に入ってきた悟飯達に振り向いた。

「ご、悟飯。カカが…」

「お父さん達も、見たんですね。カカロットさんの夢」

チチとビーデルもカカロットに歩み寄り名を呼んでも、泣き止まないパンがカカロットの黄金色の髪に触れても、カカロットは眼を覚ましてはくれなかった。

## Last Dance?

悟飯がベッドに乗り上げてカカロットの上に馬乗りになると、手首の脈を測り、閉じた瞼を押し上げる。

濁った碧玉の瞳は小さく揺れ、悟飯が持っていたペンライトを近づけさせても、揺れている瞳は一切反応しなかった。

「僕は専門家ではありませんが、深い眠りは夢を見ません。瞳が動いているという事は、恐らく同じ夢を見ている筈です。でも、これは…」

悟飯が強制的に目覚めさせようとカカロットの頬を叩いても、彼は全く反応を示さなかった。

体は人形のように項垂れ、呻きすら上げない。

「意識が混濁しています」

悟飯の言葉に息を飲んだのはビーデルだけだ。

言葉の意味が分からない悟空は震える声で悟飯に問う。

「ど、という意味だ」

「このまま目覚めなければ、一生目覚めないという事です」

場の空気どころか、皆の思考が絶望に似た感情が身を凍らせた。

「どついう事だか？、悟飯ちゃん…」

震える唇に手を当ててショックを受けるチチを、ビーデルは耐えながら肩を支える。

「詳しい事は、分かりません。ただ、カカロットさんが見ていた夢が関係しているはずです。実際、夢は精神とリンクしているものです」

悟空が言葉にできず堪らずカカロットの右手を両手で掴めば、カカロットが僅かに体を震わせたのが分かった。

「カカ？」

悟空が名を呼べば、カカロットは深い眠りに付きながら深い息をつく。

泣きそうになりながら彼の名を呼び続け、額に張り付いた前髪を払ってやれば唇が震えた。

「なあ、いつもだったら起きるだろ、カカ」

チチとビーデルにはうまく伝わってはいないが、こんなにも黒く渦巻くカカロットの気に悟空と悟飯は戸惑うばかりだ。

夢で見たのは、仲間達が集う光を拒絶するように、たった一人で立ち尽くすカカロットが暗い闇に飲まれていく光景だった。

寂しそくに、手を伸ばせば届く光に、皆の名を呼ぶこともせず、背を向けてしまった。

いくらカカロットの名を叫んでも彼は振り返りもしない光景は、酷く悲しみが身を引き裂く思いだった。

「父さん、父さん聞いて下さい」



悟空の頬に零れた一筋の涙を、悟飯が拭った。

「お父さん確か、先代の神様から読心術を習っていましたよね」

コクコクと頷く悟空に、悟飯は柔らかに微笑む。

「お父さんの精神力を持っていれば、カカロットさんの深い意識に潜れる事が可能です」

「いいえ、それは無理よ」

しかしすぐさま反対したのはビーデルだ。顔を蒼褪めさせて、はっきりと応える。

「混濁した意識に入れたとしても、繊細な部分を晒されるのよ。下手したら二人とも目覚めなくなるわ」

ビーデルの深刻な言葉に、悟空とチチがぐ、と息を飲む。

悟飯も迷いに迷った言葉だった。しかし、放って置いてしまったら、カカロットは見た夢の通りになってしまう。

「僕だって、カカロットさんの夢にちゃんと向き合えなかった事に後悔しているんです。でも僕は、読心術は無理です」

唇を噛み締めて、悟飯は後悔に撃ち震わせている。

その息子の表情に悟空は決心すると、悟飯の頭を撫でる。

「分かった悟飯。やってみる」

カカロットの頬を撫で、悟空はゆっくりと己の額をカカロットのそれと重ねる。

パンが、二人の祖父の名を呼んでいる。

小さく悟空がカカロットの名を呼べば、空気が徐々に変わっていく。家族が見守る中、悟空は意識を集中する。

海の細波の如く揺れるカカロットの呼吸と合わせてゆく。

眼を閉じた暗闇の向こうで、一筋の光が見えてくる。

体の感覚が薄れていくと同時に、扉が現れてきた。

手を伸ばせ、扉を開ける。愛おしい人を呼び起こすために。

もしかしたら余計な行為かもしれない。

けれど胸が痛い気持ちは、カカロットでしか治せないのだから。

力が抜けて崩れる悟空の肩を、悟飯は慌てて支え起こす。

重ねていた額が離れても、握っている右手はしっかりと繋がっている。

パンもいつの間にか泣き止んでいた。

悟飯が窓に視線を向ければ、夜空には満月が浮かんで、意味ありげに悟空達を照らしていた。

まるで水底へ堕ちていく感覚だ。

呼吸が乱れそうになって、唇を噛み締めて耐える。

カカロットの意識へ潜りこむ瞬間から、悟空の頭の中に入ってくるのはカカロットの記憶だ。

昨夜、二人で抱き合った記憶。優しい光に降り注がれた樹木の下で、純粹すら感じる口付けをした記憶。

そして記憶は段々と過去へと潜っていく。

カカロットが、悟空達と出会う前の記憶が流れ込んでくる。

欠けた月光に照らされ、静かな森林に囲まれた清らかな湧き湯に浮かぶ裸体の自分。

星の美しさを憂う哀しさ。そして故郷への思い。

闇しかなかった空間に、悟空の足が降り立つ。

体が酷く重く、不安がすぐさま押し寄せる。

何処を振り返っても闇ばかりで、左右感覚が麻痺しそうだ。

こんな夢を、カカロットはずっと見ていたのだ。

カカロットが抱えていた苦しみに悔しさを抱き悟空は、俯いていた顔を上げると胸を張ってカカロットの名を叫んだ。

何処にいるかも分からない。それでも、悟空は叫び続けた。

闇は全く響かず、心が不安で折れそうになろうとも、求めた存在を諦められなかった。

少年と手をつないで歩き続けるカカロットは、微かに耳に入った声に立ち止った。

深い深い闇の中へ堕ちていく意識を浮上させれば、カカロットは表情を歪ませた。

自分と呼ぶ声に、胸が痛くなる。

段々と呼ぶ声が大きくなるにつれて、足音も大きくなる。

闇の中から、鮮やかな、光を纏う山吹色が現れた。

「カカ！！」

「…、悟空」

いつもの幻ではなかった。

目の前にいる悟空の微笑みは温かく心を満たすもので、けれど余計カカロットを苦しめてしまう。

「カカ、帰ろう。皆心配してっぞ」

息を切らせて、悟空は手を差し伸べる。しかし、カカロットはそれを拒んだ。

「俺は、お前の元へは帰れない」

「…どうしてだ？」

悟空の問いは強く澄んで、カカロットの重い思考を浮上させる。心地よい声を、悟空の手を掴みたいという思いを必死で耐えた。

「俺は、あの場所へ来るべきではなかった」

口元は微笑んでいても、目尻は涙を堪えていた。

悟空が一步踏み出せば、カカロットは一步下がる。

「どうして、そんな事言うんだ？」

「俺は、罪を犯したんだ」

その声は、悲しみに震えて闇に響き渡る。

カカロットの背後に、色鮮やかな映像が映し出される。

カカロットの傍にいた少年が、ゆっくりと離れてゆくのを二人は気付かない。

炎と破壊と絶叫の風景。建物は壊され、人々は倒れてゆく。

「俺は、自分の力を過信したんだ。皆を傷つけ、全てを破壊した」

カカロットは喉を震わせ泣いていた。

深い悲しみに金の御髪が闇と共に揺れる。

「力の暴走を止められなかった。ただ、侵略者を倒したかっただけなのに」

「だけど、カ力は精一杯戦ったじゃないかっ」

感情と共に濁流のように流れ込んできた記憶に、悟空は飲みこまれぬように声を荒げる。

「なら、お前はそれだけの為に仲間を手に掛けるのか？」

「カ力、それは違っただろう？」

両手を広げて、悟空はカカロットに歩み寄る。

胸を抉る辛い記憶の痛みに、悟空は膝が崩れそうになるのを踏ん張る。

「力の暴走は、おめえのせいじゃない」

「いいや違っ、俺のせいだ」

頭を振って悟空の言葉を否定するカカロットに、悟空は優しく彼の手を取る。

「だって、そうだろう？」

嗚咽を零してカカロットは泣き叫び、膝が崩れて座り込めば仲間達の名を叫んだ。

「故郷は無くなったのに、俺だけ生き残ったんだ。皆を、見殺しにした」

流れ込んでくる悲しみに、悟空も涙を流そうとするが唇を噛み締め  
て堪える。

子供のように泣き叫ぶカカロットの頭を、悟空は両手で包んで抱き  
こんだ。

「カカ、…カカロット、オラを見る」

額や瞼に口付けを与えながら悟空は名を呼び続ける。

涙でぐずぐずになってしまったカカロットの頬を撫で、悟空は微笑  
む。

「カカが、どんな罪を背負おうともオラは構わない。だけど、逃げ  
るのは絶対に許さない」

けれど悟空の言葉は冷たくはなく優しさを感じた。涙で濡れたカカ  
ロットの唇に、悟空はそっと啄んでくる。

温かい涙と温もりが流れ込んできて、カカロットと包む闇が和らい  
でゆく。

「オラ達の世界に来るんじゃないかって、そんなこと言っなよ」

悲しそうに睫毛を震わせて、とうとう我慢できずに悟空も泣いてし  
まう。

「オラは、カカを見つけた時、すっげえ幸せを感じたんだ」

「悟空…」

「消えるとか、言っなよ。オラは、」

二人の額が重なり合う。

カカロットの不安な感情と、慈愛を抱く悟空の気がゆっくりと絡ま

りあって、それはカカロットの瞳が揺らぎから輝きに変わり始める。

「じっちゃんが、オラを拾ってくれたあの場所で、カカロットを見つけた時」

二人の視線が絡み合う。

互いの表情が瞳に映ると、愛おしさが増した。

「ぜってえ、守ってやりたいと思った。じっちゃんがオラを愛してくれた事を、カカにも教えたかった」

必死に自分を呼ぶ、まるで赤ん坊のように樹木と動物達に守られて眠っていた彼を見つけた時は、奇跡と思えて自然と涙が溢れて止まらなかった。

悟空が掴んでいたカカロットの両手に、戸惑い気に力が入る。指を絡ませて、温かい体温を感じて悟空は堪らず笑った。

「俺は、あの場所に居ても、いいのか？」

「そんなの、」

悟空の言葉は最後まで紡がずとも笑顔が物語っていた。

カカロットも笑い返せば、周りの闇が大きく揺らいだ。

カカロットの心情を表していた暗闇が段々と薄れていき、上空から花の綿のように淡い光が降り注いでくる。

その淡い光が二人の体を包みこめば闇は拡散した。

「帰ろう、カカ。みんな心配してる」

もう、この場所にいる理由はない。

悟空はカカロットの手を引いて歩こうとしたが、カカロットはまだ

その場に動かないまま背後を振り向いていた。

カカロットが見つめる先は淡い光が浮遊しているだけで、何もなければカカロットは、静かに手を伸ばした。

「ブロリー」

カカロットがその名を呼べば、悟空が息を飲む気配を感じた。

声に呼応して、光を掻き分けて長い黒髪の男が現れる。先程の少年では無かったが、しっかりと面影はあった。光を反射しない虚ろな瞳にカカロットが映れば、光に滲むような笑みを浮かべた。

歩み寄ってくるブロリーに悟空は警戒して後退するが、カカロットは動かなかった。

微笑みかけて、更にブロリーに手を伸ばす。

「ブロリー、一緒に行こう」

左手は悟空の手をつかみ、右手でブロリーに手を伸ばすカカロットの笑顔は優しさを取り戻していた。瞳は泣き腫らして真赤だが、ブロリーは気にならず眼を細めて笑みを深くする。

カカロットに歩み寄ったけれどブロリーはカカロットの右手を掴まなかった。

ブロリーの腕はカカロットの右手を通り越して、泣き腫らして赤くなった目もとをかさついた親指が触れ、赤みが差した頬へ、ブロリーは触れる程度の口付けを贈った。

離れる時にブロリーが何かを囁けば、カカロットは眼を見開いて再び表情を歪ませて泣いてしまった。



唇が震えて、喉が嗚咽を零そうとするのを無視してブロリーの名を叫ぶ。

「ブロリーッ、ごめん、ごめんな!!」

ブロリーの離れていく腕を掴もうとしたけれど、無情にもカカロットの指はブロリーの体をすり抜けてしまった。

謝り続けるカカロットにブロリーは苦笑するだけで、気にするなと首を左右に振る。

そのやさしい表情は光に飲まれて、霞んでいく。

「ずっと、ずっと俺を助けてくれてたんだよなっ、ごめんな!!」

自分の力に不安を覚えた時も、故郷を破壊した激しい痛みにも、自分の辛い夢に飲まれかけては、いつだって力強い声で救ってくれたぶっきらぼうで、大柄な外見に見合った不器用な優しさは、昔からカカロットの傍にあった。

そしてブロリーは既にこの世には居ないのだと静かに悟ってしまった自分の心が酷く痛んで、それが受け入れられず記憶が失ったままだったのだ。

本当に、ひとりっきりになっちゃったのだと。

その幼馴染の姿が消えるまで名を叫べば、その悲しみを振り切って悟空がカカロットの手を引いて走り出す。

そうすれば、光が縮小して流星群の如く二人の走る先を美しく照らし出す。

走って走り続けても息は苦しくなかった。来た時は、あんなにも悲しい感情が胸を支配していたのに。

今はふっ切った気持ちで清々しかった。

「悟空！ブローリーが、俺の事助けてくれてたんだ！！」

「良かったじゃねえかカカ！！」

カカロットの大粒の涙が、弾ける流星群に触れて鮮やかな花火を生んだ。

散った花火が頬に触れば、自分を愛してくれた家族や仲間達の記憶が溢れてくる。

どうして忘れていたんだろうと、カカロットは後悔する。

それは悟空にも伝わって、二人揃って涙が止まらなかった。

「おめえは、ひとりなんかじゃねえんだ」

罪は、きっと消えはしない。

けれど、それ以上に忘れてはいけない大切な記憶が、カカロットを悟空達が生きる世界へと導いたのかもしれない。

悟空、とカカロットに名を呼ばれ振り返れば、カカロットは悟空の頬に指を添えて口付けを降らせてきた。

「あいしてる」

小さな声だった。

悟空はそれでも意味を知ったのか耳まで真赤にして体温を上昇させる。

悟空が言葉を返す前に、カカロットはもう一度キスをした。

流星群は二人を包み込み、舞い上がって花吹雪へと変化する。

夢の目覚めは、愛おしさの始まりに似ていた。

それが酷く胸を痛めて、その痛みが惜しくてまた二人は涙を流した。

涙を流しながら、ブルマは眩しいほどの夢から静かに目覚めた。  
何故だか理由は分からないが、温かく胸の奥を満たす優しさに泣いたのだ。

ゆっくりと起き上がれば、タイミングを図ってサイドテーブルに置いてある電話が軽やかな音を立てて鳴りだす。寝起きにしては素早い動きで電話を取れば、相手の声を聞いて柔らかく微笑んだ。

「あらヤムチャ、どうしたのこんな陽も昇らない早朝に」

ブルマは、何となくヤムチャが電話をしてきた理由が分かっていた気がした。

「そう、天津飯と餃子も一緒なの……」

ヤムチャも電話越しで涙ぐんで声を震えていた。きっと、二人も同じだろう。

ベッドから降りて、ブルマはブランケットを羽織るとベランダへと出る。

「ええ、私も見たわ二人の夢。どうしてかしらね、ただの夢にしておくには勿体ない綺麗な光景だったわ」

ふふ、と鈴のように喉を震わせて笑うブルマは電話を切る。

すぐにまた電話が鳴りだすが、ブルマはテラスの椅子に放り投げる。電話の相手先はクリリンからだろう、予想しなくとも内容は一緒だ。

「ね、あなたも見たの？ベジータ」

テラスの手摺に腕を預けて、陽光と闇夜が混じり合う境界線の空を眺めていたのはベジータだった。

ブルマはベジータの隣に立ち、彼の腕に自分の腕を絡ませる。

ベジータは恐らく夢は見えてはいないのだろう。

けれどベジータはブルマに一度視線を向けただけで、首を引いて曖昧な肯定をした。

夢を見ずとも、ベジータはあの二人の気を無意識に感じ取っていたのだろう。

ブルマを見たベジータの瞳は穏やかさだけが宿っている。

「故郷の星が、」

たった一言だけ、ベジータは言葉を紡ぐ。

「消えていなければ、…我らの心が穏やかさを知っていれば或るいは、」

そこまで言つて、ベジータは馬鹿馬鹿しいと舌打ちしてしまった。トレーニングルームへ戻ろうとして、ベジータは立ち止る。ブルマも振り返れば、部屋の入口にトランクスと、泊っていた悟天が立ち尽くしていた。

「あらなあに？いつもより早起きなのね」

ブルマの皮肉に、トランクスと悟天は応えなかった。よくよく見れ

ば、二人の目もとは涙に濡れている。

「母さん、もしかして」

「同じよ。私も見たわ」

「じゃあ、あれは…」

二人の切ない表情に、ブルマは眼を細めて微笑んだ。その微笑みは窓から射し込み始めた陽光に照らされとても美しかった。

「さあ、支度しましょう。きっと今日はパーティよ」

騒がしい朝が、いつもより幸せを感じて始まった。

木々の自然窓から降り注ぐ陽光を頬に感じ、閉じていた瞼を押し開ければ隠れていた碧玉の瞳が輝きを反射する。

立派な樹木は鳥や小動物を見守り、地球の脈動を伝えているのか幹に耳を押しあてて聞き耳を立てる力カロットを、樹木は優しい自然の香りで包んでゆく。

リスが力カロットの腕によじ登り、肩に降り立って彼の頬に擦り寄せてくる。

小鳥たちが囀り、森にもう一人の訪問者を教えてくれた。

「悟空、」

樹木の下で此方を見上げていたのは悟空だった。

樹木の枝に座って悟空を見下ろすカカロットは微笑むが、悟空は不機嫌な顔をしていた。

「森へ行くなら、起こせよな」

どうやらこつそり森へ来た事を怒っているようだ。

カカロットは苦笑して飛び下りれば、羽根を休めていた鳥達が飛び去った。

金の御髪と柔らかな黒髪が風に乱れる。頬を掠める黒髪に、カカロットは指を伸ばして悟空の頬に触れて髪を払う。

その優しい仕草に、悟空は頬を染めて顔を背けてしまった。

「何故、今更恥ずかしがるんだ」

「だ、つてさ…」

何が面白いのか笑いながら耳元で囁くカカロットに、悟空は羞恥に体を震わせて腰を抱き寄せようとするカカロットの顎を押しつけようとして、彼の首元から覗くある物に手を止める。

カカロットが首元に下げている物はカードだ。

手元を緩めてそれを見つめる悟空に、カカロットは隙を付いて悟空の頬に口付けを贈る。

カカロットが持っていたのはIDカードで、それを贈ったのは悟飯だった。

あの夢から二人で目覚めて、家族みんなで目もとを泣き腫らし、夕イミング良くやってきたブルマ達も泣き腫らした顔に笑い合った。

そのままの流れで二日続けて大騒ぎした後は、カカロットはもう悪夢を見る事はなくなっていた。

パンに膝を占領されながらそれを悟飯に伝えれば、悟飯は嬉しそうに頷いて、お祝いにとIDカードをくれた。

『戸籍上では、お父さんの生き別れの双子の兄になっています』

『兄、…家族になったって事か？』

『はい。これで、気兼ねることなく僕達は家族ですよ』

後ろで、悟空が自分が兄ではないのかと不満そうな事を言ってきたが、カカロットにはどちらでもよかった。

『ありがとう、大事にする』

ただの紙切れかもしれないが、カカロットにとっては夢で見た輝く光が具現化したような気がした。

その笑顔に周りは喜んでくれて、ブルマ達にも伝えれば、2度目のパーティが始まったのは言うまでもなかった。

「今日、天下一武道会だつていったろ」

「そうだったか？」

「ほら、いい加減戻らねえとパンが探しに来るぞ」

たった半年で口が達者になった可愛らしい孫娘の笑顔を思い出して、二人は笑い合った。

行こうと、悟空に促されてカカロットは悟空の背中に続く。

ふいに、呼ばれたような気がしてカカロットは振り返って樹木を見上げた。

小動物達に囲まれて、誰かが此方を優しく見つめていた。

それが悟空の養父だったか、己の幼馴染だったか定かではなかったが、心はもう痛みだけではなく、確実な温もりが心を満たした。

「何だか嬉しそうだな、悟空」

「カカには分かるか。実はな…」

楽しそうに話す二人の笑い声に、呼応して風が優しく吹き荒れる。新たな冒険が待っていていようと、きっと二人は迷わず走る続けに違いない。

足取りは力強く、音楽を奏するように、きっと旅立つ先には幸せだけではない筈だ。

それでも、いつか最後には命の有る限り踊ろうと約束したラストダンスには程遠く、瞳に映る光景は輝かしく優しい夢の続きだった。

F i n

この話を完成させる為に、一か月を費やしました。

しかし期限が迫って居なければ、もっと長かったに違いない…。

何気に、カカロットと悟空の話しは割と多いんですね。

二人もそうですが、皆でカカロットを愛してあげる場面も書きたかったもので、とりあえずは完成出来て満足です。

お粗末さまでした。



## ピクニックへ逝こう

阿呆丸出しな肝試しギャグ

登場するキャラクター達は皆仲良しです

某ホラーゲームを参考にしています

秋のほろ甘い陽光の暖かさと、遠からず冬を知らせる涼しい風が心地よい日曜の午後。

ホロロン、と軽やかなベルが訪問者を知らせた。

ドアの鍵を開けて、出迎えたのは悟飯だった。

何処か草臥れた表情で、ずれた黒縁眼鏡から覗く瞳は、まだ眠気を帯びていた。

ドアの外に立っていたのは褐色肌の、父親に似た男だった。

顔だけ見て一瞬訳が解らなかったが、その男のカジュアルな服装と、大きな重箱を持った姿だと余計に理解が出来なかった。

「ターレスさん？」

訝しげに男の名を呼べば、ターレスは意地の悪い、彼にとってはそれが愛想でもある笑みを浮かべ、そして言い放った。

「よう、悟飯。ピクニック行こう……」

「お断りします」

ぜ、と最後まで言う前に悟飯は即答してドアを固く閉ざす。

悪い夢の続きのような光景に悟飯は眉間の皺を指で伸ばしていれば、奥の部屋で悟天と絵本を読んでいた悟空がやって来た。

「なあ、ターレス来たのか？何か用だったんか？」

「いえ、大した事じゃ」

ひきつった笑顔で父に応えようとして、背後にあるドアが突然開き、悟飯の後頭部を襲った。

無防備だった為に物凄い鈍い音がリビングに響き、悟飯は首を反らして倒れる。

「悟空さ、ターレスとお義父さが来てるだよ…、って悟飯ちゃんどうしただ！！？」

ドアを押し開けたのは孫家の家計を握るチチだった。

悟飯は直ぐ様飛び起きて振り向いたが、一歩遅かったのかターレスと、一緒に来ていたのかバーダックが孫家に招かれていた。

「どうしたんだターレス。それでつけえ弁当箱」

目を丸くさせて興味津々の悟空と悟天に、ターレスは楽しげに髪を揺らす。

「ブルマに頼んで作らせた」

「威張って言うことですか。それに文法がおかしいです」

地球に移住して半年は経つのに、辞書を投げ付けたい気分だが悟飯は堪えると、バーダックに問い掛ける。

「それで、あの血色の悪い日焼け猿は今度は何を言い出したんです

か」

「言つとくが、肌の色は自前だ。長風呂でいつもスベスベだぜ!!」  
いちいち返すのも面倒なので母にバレないように、冷たい一瞥をくれてやればターレスは音速で目を逸らした。

室内禁煙を目指しているバーダックは、多少苛々しつつも悟飯に視線を向ける。

「昔は、よく行つたんだろ?」

「…、あゝ、ええ、まあ。キャンプですけどね」

「あとテレビの影響だ」

ブルマ宅の巨大スクリーンの前を陣取つて、テレビにかじりつくサイヤ人を想像してしまい、悟飯は疲れた溜め息を溢す。

「それにしたつて、紅葉狩りならともかく。ピクニックは少し遅くありませんか?」

「俺に言つな。行きたいと言い出したのはアイツだ」

それを止めないバーダックもバーダックだが、異様に懷いてしまった悟天を肩車するターレスや、行く気満々の両親の顔を見てしまい、悟飯は出かけた言葉を飲み込んでしまった。

別に行くのは構わないのだ。

天気も良いし、悟飯の徹夜明けの課題もひと段落ついていたが、悟飯はふと疑問を感じた。

「他に誰を誘つたんですか?」

悟天を肩に乗せたターレスは視線を右に向けて思考を巡らせた。

「片っぱしから連絡を取ってみた。まあ、暇な奴は来るだろ」

「ちなみに、場所って何処だか？」

いい加減さは慣れているので放つても別に大したことはないが、問題は場所だ。

荷造りを開始したチチがバーダックに問う。

「場所は、ブルマが手配している。カカロットの瞬間移動で行けば直ぐだろ」

「要するに、場所を聞いたけれど忘れちゃったんですね」

苦笑気味に悟飯が返せば、バーダックは無言無表情で背負っていたリュックで悟飯の後頭部を叩く。

重い音が響き、悟飯はあまりの痛みに後頭部を両手で抑えた。

「つつ、それっ、何が入ってるんですかー!!」

「秘密だ」

意地悪く微笑む姿は、どうにも年相応に見えなくて悟飯は諦めて口を噤んでしまう。

「ねえねえその中、沢山食べ物が入ってるの？」

肩車から降りて小さなリュックに色々詰めている、小学校に入っただけの悟天はタレスに問いかけた。

確かに一般人から見れば20人前ぐらいはありそうな重箱だが、生憎こちらは大喰らいのサイヤ人だ。どう見たって全然足りやしない。

「ああ、中身はホイホイカプセルだ。雰囲気を楽しむのも粹ってやつだよ」

「…子供」

ボソリと悟飯が呟けばタ レスは賺さず睨んでくるが、悟飯が怖いのか直ぐに視線をまた逸らした。

「悟飯、着替えないのか？戸締りは終わったぞ」

「あ、ごめんなさい。直ぐに着替えてきます」

部屋に入って来ようとするバーダックとタ レスに警戒しながら、床に散らばった書類を適当に片付けてゆく。

良くて日帰り、一泊だけだろうから着替えは軽めにもつを鞆に押し込めば、机上へと視線を向ける。

「パソコンは、持っていこうかな…」

まだ少し疲れと眠気が残るが、久しぶりの仲間達の集いだ。参加しないのは勿体ない。

ドアに耳を押しあてて中を探っているタ レスの気配を感じて、勢い良く開けてみたい衝動に駆られるが、こちらの殺気を瞬時に察知したのか、タ レスはすぐさま飛び退いていた。

どういう悲惨な事になるか分かって居るくせに性悪なのは、きっとタ レスの性分なのだろう。

「準備出来たか？忘れ物ないな？」

戸締りも完了して、荷物も詰め込んだ。

目をキラキラしてウキウキしているのは悟天と悟空、それを嬉しそうに眺めているのはチチと悟飯。

その悟空にちょっかいを出すタ レスと、何処か他人事のように遠

い目をするバーダックの六人組は、静かに忽然と姿を消していった。

耳を擽る大きな細波と、碧水晶を思わせるエメラルドグリーンの水  
面を、ジリジリと焦がすような熱さを増す太陽に反射して美しく輝  
いている。

白磁の様な砂浜が遠くまで続き、真つ青な空と海の境界線が見えな  
い広い海辺は、まるで樂園に近かった。

それでも樂園と表現に値しないのは、大きなパラソルの下で寛ぐ孫  
親子を、横切るように水着姿の屈強な男共が子供みたいに走りまわ  
っているからだ。

五回目の旗取り競争はタ レスが勝利したようだ。勝ち誇った顔で  
ラディッツの首を絞め上げ、哀れな叔父に別段助ける事も無く悟飯  
は眠たげに眺める。

「おいカカロット、お前も混ざれって!!」

「おう!! タ レス競争しようぜ」

日焼け止めなど全く必要もないサイヤ人達は、今度は海に向かって  
走り出す。

面倒そうな顔をしつつも、勝負という名に反応してしまうのかバー  
ダックも文句を言っていない。

マイペースで歩いてきたベジータも悟空が加わると聞いた途端、眼  
を光らせて輪に混じってくる。

ただし向こう岸まで競争しようと言っていたのに、掛け声と同時に  
走り出したかと思えば、六人は一列に並んで水面を勢いよく走りだ

すのはどう言う事なのだろう。

良く見れば、舞空術を器用に使って水面走りをしているみたいだ。白熱した戦いに見えなくもないが、実に下らない発想だ。

しかし自分達にとってはこれが普通にこなせるから時折不思議に思えてくる。

右隣のパラソルを見れば、クリリン達も遊びに来ていた。麦わら帽子を被るマロンと悟飯が眼が合えば、可愛い笑い顔を返された。左隣ではヤムチャと天津飯達が来ており、海辺では悟天とトランクス、ウーロンとブーアルと餃子が仲良く砂の城を作っている。

これがまた完璧な五十分の一サイズで、恐らく堤防も作りかねない。背後から鈴の様な笑い声が響いてきて、振り返れば女性陣達が各々の水着を着用してやってきた。

遅めの昼食が出来たのか、女性陣達は色鮮やかな弁当を持っている。しかしそれでも足りないもので、広いテント上でタレスが大事に持つて来たホイホイカプセルを放り投げれば、小さな破裂音と煙の中から、色とりどりの料理が並べられた。

『みんな、ご飯用意出来たわよ』

青い空と海辺を眺め、何処かズレた昼食が始まった。

必死の形相でやはり水面を走って一番乗りしたのは悟空、次にバーダック、ラディッツ、そしてベジータとタレスは同時に到着。

ベジータとタレスは途中で喧嘩を始めたので最下位になってしまったが、八つ当たりにラディッツが蹴られている。

そのラディッツを悟空が庇う、というカタレスとベジータの水着を掴んで海に放り込んだので一時は爆笑が絶えなかったが、落ち着けば食事に集中するだけだ。

「急に誘ってごめんなさいね」

食事もひと段落ついて、パラソルの下で集まってお茶を飲んでいれば、ブルマは今更だがそんな事を言ってきた。

「いいえ、誘って頂いて嬉しいです」

父は用事で来れなくなったとビードルは残念がった。

クリリン達も誘われなかったらむしろ外出しなかったと、嬉しそうに応えた。

それは孫家も同じ事で、いつもイベントを主催してくれるブルマには感謝していた。

「そついやさ、なんでこの島は暑いんだ？もうすぐ冬なのに」

悟天を肩車しながら悟空が戻ってきた。

その向こうでは、子供たちによって立派な防波堤が建てられている。今度はヤムチャと天津飯も加わって組み手をしだしたタレス達に壊されなければいいが、したとしても悟空がきつと笑顔で無慈悲に反撃するだろう。

「この島は南半球に位置していて、北半球とは季節が間逆なんですよ。まあ、ちょうど真ん中の位置に住んでいる僕達にはあまり関係有りませんけどね。と、いますかピクニックと言った本人は、場所は何処でも良いみたいですわね……」

「遊びに行く口実にはなったから、感謝してるわよ。最近忙しかったから。実わねこの無人島、来月にはリゾートホテルがオープンするのよ」

あそこ、とブルマが指差す向こう側には、白い建物が見えた。



城に見立てたホテルは既に完成されているそうで、特別に、ブルマの計らいでホテルに一泊出来るようになったのだ。  
素敵、とうつとりと微笑んだのは女性達だけで、悟飯とクリリン、マロンと砂山を作っている亀仙人だけは、ホテルが壊されやしないかと、嫌な予感が頭を過ぎらせた。

三度目の水面走りでターレス達が地球を一周した頃には、陽はとっぷりと落ちてしまった。

無人島で唯一明かりが灯るホテルへと移動すれば、また別の賑やかさが生まれる。

夕食の時は、余りのサイヤ人達の食べっぷりにホールスタッフ全員が開いた口が塞がらない状態になったが、プロである従業員も三時間見続ければ慣れるものだ。

予めターレス達には破壊的な騒ぎを起こすなと脅迫してはいるので、露天風呂ではそんなに騒ぎはしなかったが、見張りをしていた悟飯が風呂から上がれば、何故かホテル内は静かな空気が流れていた。自分が風呂に入っている間、なにか悪さをしないようにと悟空に見張りを頼んだのだが、あんまり期待していないのが本音だ。

「静かすぎて、逆に不安だ…」

部屋で浴衣からシャツに着替えて、ふらりと広いエントランスへ向かえば、女性陣達が優雅に寛いでいた。

悟飯に気付いたブルマが楽しそうに手を降っているが、少し呂律がおかしい。

チチも頬に赤みが差し、ビーデルと18号がそれに苦笑していて彼女達が手に持っていたのはワイングラスだ。  
傍に居たスタッフに酔い覚ましの水を頼めば、悟飯はエントラスを見渡す。

「母さん、父さん達は？まさか外に？」

彼らが勝手に帰ったりしない筈だ。特に悟空は必ず出かける時は何か言うだろう。  
冷たい水で酔いが覚めてきたブルマが、カウンターを見ながら応えた。

「いいえ。中に居る筈よ。1時間前くらいに、タレスとバーダックがカウンターに立ってたわ」

「そうですか、分かりました。探してきます」

「そんなに心配しなくても、大丈夫だとおもうよ？」

「そうですね、そうだいいんですけど」

18号の忠告に悟飯は笑顔で返すと、飲み過ぎないようにと付け加えてカウンターへと向かう。

カウンターへと赴けば、若いスタッフと話していた初老の男性が此方に気付いて笑顔を浮かべた。

黒い上品なスーツと長い名称の名札を見れば、彼がこのフロアの責任者だと直ぐに分かった。

タレスとバーダックに何か頼み事をされたのかと問えば、男性は笑顔で頷いた。

「はい、確かにタレス様とバーダック様が」

「あの、何か迷惑になる様な事を……」

「いいえとんでもない。タレス様達は退屈していらっしやったよ

うで、いくつかのDVDをお渡ししました」

「…ちなみに、どんなDVDを？」

「とても刺激になるもの、と希望されましたので…」

男性がレンタルした時に記入したリストを見せてもらえば、悟飯は眉間に皺を寄せた。

適当にタ レス達が借りていったらしいが、問題はDVDの内容にあった。

DVDを借りたという事は、既に居場所は確定していた。

## ピクニックへ逝こう？

心臓が押し潰されるような重苦しいサイレン音に、ローズは唾を飲み込んだ。

サイレンが鳴り終えた途端、狭い窓から射し込んでいた太陽が急激に消えていき、闇が狭い室内を飲みこんでゆく。

恐怖に震える手で懐中電灯を点ければ、錆ついて居ただけの黴と腐臭でしかなかった室内が、溶岩に似た熱で溢れかえった。

壁は溶けた泥みたいに捲れ上がり、腐敗臭が増して彼女の恐怖を更に煽った。

闇に浮かぶ熱した赤い色はまるで血肉で、地獄のような悪夢だった。何かを引きづる音が奥から響いてくる。

恐る恐るそこへ懐中電灯を向ければ、床を這う不気味なモノが浮き上がり、ローズは驚愕に表情を歪めた。

ゴトンッ、

暗くした室内に、重いものを落とす音が広い部屋に響いた。わざわざテレビの前にあったソファをどかして、尻尾を持つ男三人と、尻尾の無い男三人が器用に縮こまって座り込んでいた。背後から聞こえた大きな音に、尻尾が驚きにピンと立った。

そして六人が震えながら音がした方へ振り向けば、そこには悟飯が立っていた。

先程の音は、悟飯がテーブルに足をぶつけて備え付けられていたガラスの灰皿を落とした音だった。

ラディッツは尻尾を丸めて悟空の腰に泣きながらしがみついていた。その二人の間に挟まったトランクスも同じく泣きそうな顔をしていて、タレスとバーダックは一見無表情だが、尻尾は毛が逆立っていて、中央に座る、涙を零す悟天の手を必死で左右から掴んでいた。暗い部屋に明かりを灯せば、さらに六人の引きつる顔がよく見えた。

「映画鑑賞に、何で部屋を暗くするんですか」

雰囲気を出すという気持ちも分からなくもないが、此処まで怯えるのなら見なければいいのにと悟飯は思う。見てて面白いから言わないけれど。

近くにあったパッケージに眼を向ければ、「サイレント・ヒル」というタイトルだった。

もうひとつも似たような内容なので、黙っておいた方がよさそうだ。

「もっと面白い作品があったでしょうに。どうしてホラー借りてくるんですか」

しかも、ホラーものはこの2点だけ。

タレスとバーダックの当りのよさに苦笑を禁じ得なかった。

そんな悟飯にラディッツは震えながら悟飯に問いかける。

「悟飯は、あ、ああああアレが怖くねえのか？」

よほど怖いのかテレビに見向きもしない。

「呪いの具現化なんて不可能ですよ。出来るとしたら、憑りつかれて想像もできない変死を遂げるだけです」

眼を細めて笑う悟飯の表情が、タレス達には邪惡に見えた。

映画では悲劇的な映像が流れていて、思わず六人が好奇心に勝てず振り向けば、泣き声と悲鳴が部屋中に響いた。

「全く、サイヤ人なのにどうしてたかが作りものを怖がるんですか」

最終的には部屋を飛び出してしまったが、行先は分かり切っている。エントラスへ行けば、スタッフ達から暖かい飲み物を貰ったタレス達は顔色を青くしていた。

粗暴で強さだけを求めるサイヤ人とは思えない哀れな姿だった。

此処でブロリーなんか連れてきたら瞬殺だなと悟飯は物騒な事を思いつく。

「アイツらには、絶対勝てねえ……」

珍しくバーダックが呟いた。

だが勝負的というよりは、底知れない腐臭すら感じる空気に、本能で嫌悪感を覚えたのだろう。他の皆も何度も頷いている。

「他の遊びをしたらどうですか？」

しかし無人島の静かな地でのリゾートホテルというものはリラックスエーションが目的なので、タレス達が好むような場所はごく僅かだ。

「トランプとかどうです？」

「やだつまんねえ」

「じゃあダーツとか。ビリヤード」

悟飯の提案に悟空さえも難しい顔をした。

ふと窓の外を見れば、海沿いからホテルに向かって、明かりで灯された道が数本あった。

「散歩でもしてきたらどうです？」

「えー、散歩だけじゃ詰らないよ」

今度はトランクスまで不平を漏らし始めた。

悟天も落ち着いたのか、トランクスと揃ってブーブー言いだす。

遊びたいとある程度音量を下げて、六人が口を揃えて悟飯に不満を言っていれば、割って入ってきた声があった。

「なら、肝試しでもする？」

鶴の一声のごとく声を掛けたのはブルマだった。

手にはやはりワイングラスを持っていて、後ろに居るチチ達は止める事もせず微笑んでいるだけだ。

「きもだめし、ってなんだ？」

どうやら知っているのは悟飯と、悟天とトランクスだけで、悟空がブルマに問えば、彼女はうっとりと笑った。

「とおつても面白い遊びよ」

ブルマの思惑にトランクスは何かを言いかけようとしたが、眼を輝かせて「やる！！所で何すんだ？」と言いだしたタレスに遮られてしまった。

悟天は恐る恐る自分の兄を見上げたが、悟飯は素知らぬ顔で笑い、悟天は口を閉ざしてしまった。

「なんじゃ、何か始まるのかのう？」

エントランスに続く大きな扉からテラスへと出れば、パラソルの下で涼風を楽しんでいた亀仙人とクリリン、ヤムチャと天津飯達が騒がしさを連れてきた人物達に振り向いた。

嬉しそうに笑っているのはブルマと、タレスとバーダックと悟空、複雑な顔をしているのはラディッツと悟天とトランクス、思惑に笑いを堪えて居るのは悟飯とビーデルとチチと18号、遠慮がちに距離を取るホテルのスタッフ達だ。

簡単に悟飯が亀仙人達に説明すれば、彼らも複雑な顔をした後、苦笑した。

部屋で起こった事と肝試しという意味を全く知らないタレス達に誰も教えないのは、何処かでこの状況を楽しんでいるからだろう。部屋から持ってきた悟飯のパソコンに、ブルマは嬉々として隠し持っていた虹色の長方形を接続している。

悟飯がブルマに楽しそうに助言しているのを、悟天とトランクスは疑わしい眼で見上げているが、怖いのか何も言えずにいる。

「はい、じゃあ誰が参加しますか？」



準備を整えた悟飯の声掛けに、素早く拳手をしたのはタ レスとバーダックと悟空。しっかりとタ レスに尻尾を掴まれて泣きそうな顔のラディッツ。

何だかんだ言いつつもクリリンとヤムチャも参加すると言えば、その二人に同行すると悟天とトランクスも拳手する。どうやら悟空達と一緒にでは不安だと危機感を覚えたのだろう。

「悟飯は参加しねえのか？」

「別行動で参加しますよ」

参加者も決まり、三手に分かれて各自懐中電灯を渡されれば、今度はホテルの支配人がやってきた。

「それでは、私からご説明させて頂きます。ホテルから海岸へ続く道が四つ存在しており、どれも徒歩三十分は掛かる道のりです。本来なら外灯が灯られておりますが、今回のイベントと言う事で、皆様方には懐中電灯ひとつでお進みください」

「地図とかねえのか？」

「一本道なので、必要は御座いませんよ。海岸に一番最初にたどり着いた方には賞品が用意されておりますので、頑張つて下さい」

優しい笑顔の支配人のその言葉に、皆の眼はキラリと鋭くなる。勝利を確信したように笑ったのはバーダックだ。

「じゃあ勝ち俺達が決まりだな。こっちは宇宙一強い奴が居るんだからな」

しかしそんな勝ち誇っているタ レスチームに、すぐさま反応したのはヤムチャ達だ。

「長い付き合いの俺が言うんだが、悟空は戦闘以外の勝負は興味がないしあんまり当てにならないぞ」

ヤムチャの言葉にクリリンは厳肅に深く頷き、悟天とトランクスに至っては商品の山分けの相談をしていた。バーダックが背後に居る悟空に振り向いて、そして無言で溜息を吐く。どうやら当てにするのを諦めた様だ。

「あと、ルールがあります」

金だ食べ物だと勝手に推測するサイヤ人達と地球人達を冷めた遠い目で眺めた後、悟飯は付け加えておく。

「この島は人様のものです。無暗に暴れたり、物を壊す行動はしないで下さい。もし破ったら…」

悟飯の笑みが影をつくり風も無いのに前髪が揺れば、三人のサイヤ人の尻尾がピンと立ち上がり硬直した。スタッフや女性陣達に気付かれない様に、威圧的な笑みを浮かべる悟飯に気付かないのは悟空くらいだ。

「分かりましたか？」

優しく問えば、悟空以外の参加者が肩を震わせながら何度も頷いた。最後の忠告も言い終わって、ブルマと時計を合わせて合図すれば、三手に分かれたグループは行く道を選んで懐中電灯を灯すと歩き出した。

暗い夜道を一筋の光が灯してゆく。

整備された道には距離を保って外灯が設置されているが、闇夜に浮かぶその物体は何処か薄ら寒い印象を受ける。

その長い道のりを、妙に音程が外れた歌を唄いながら歩くのは悟天とトランクス、その後ろをクリリンとヤムチャが前方を懐中電灯で照らしながら歩いている。

「いい加減、彼奴ら肝試しの意味分かったんじゃないですか？」

「いや、もしかしたら知らずにゴールしそうだぞ」

風に揺れる木々に怯える悟天とトランクスの前方を懐中電灯を照らしつつ、見失わない様に歩みを速めるが、ふとヤムチャがこんな事を言い出した。

「そついやさ、ホテルのスタッフから聞いたんだけどよ」

子供二人に追いついて歩調を緩めながら、ヤムチャの言葉に三人は視線を向ける。

「この島、昔は旧軍の所有物だったらしいぜ」

「へえ、何に使ってたんでしょうかね」

「怪しい実験施設だったりしてな」

「ヤムチャさんホラーゲームのし過ぎですよ」

若干乾いた笑いを零すヤムチャとクリリンだが、悟天とトランクス

の顔は険しくなるだけだ。

「だから心配ないんだって。だってその施設はとつくの昔に壊されてるんだ。ある訳ねえよ」

「ですよねえ、そんな都合の良い話しなんて…」

ふいに、笑いが止まった瞬間に冷たい風が横から吹いた。

その夜風が思ってたより強いのか、不気味な唸り声に似ていて、悟天が短い悲鳴を上げてヤムチャに飛びついてしまった。

トランクスは辛うじて立っているが、表情は大人顔負けに無表情だ。肝試しをする前に見たDVDがどれほど影響を与えているのか簡単に想像が付いてしまい、ヤムチャとクリリンは別の道に行くサイヤ人達の悲鳴が聞こえやしないか不安が過るだけだった。

ピクニックへ逝こう？

「なあ、これ歩きづらくねえか？」

ヤムチャとクリリンの不安などどこ吹く風で、暗闇を懐中電灯で照らしながら先頭に行くのは悟空だ。

その悟空の左腕にしがみつくのはラディッツ、右を歩くのはバーダツク、そして密着に近い形で背後に居るのはタレスだ。

悟空はずっと前を見据えているが、他の三人は忙しなく暗闇を注意深く警戒している。

どうやらやつと肝試しの意味を知ったようだ。

だがしかし自分達の意地は折れ無いので戻るに戻れず、こうやって悟空に密着して歩くしかなかった。

風が木々を揺らせる度にラディッツは尻尾を膨らませ、その過敏な怯えに煽られてバーダツクとタレスは口を閉ざしたままだ。

五分ほど歩いただろうか。

悟空の歩みが突然止まり、三人の表情が凍りつく。

懐中電灯だけが照らす暗闇の先には、ある物が立てかけられていた。

「分かれ道だ」

懐中電灯を照らすのは、分かれ道と立て札。

右と左に分かれた道の前まで歩み寄り、悟空は左右の道を照らす。

二つの立て札は古すぎてまともに字が読めなかった。

悟空がとぎれとぎれの文字を読める訳ないし、三人はなおさらだ。

「だっち行く？」

ふと違和感。

バーダックはホテルの支配人が言っていた事を思い出した。

「おかしいだろ。支配人は分かれ道は無いと言っていたんだぞ」  
「だが出て来たぜ」

タシタシと立て札を軽く叩くタレスの言葉に、他の三人も首を傾げる。

「海岸に居る皆の気配を探れば良いんじゃないかねえのか？」

「あ、そつか。兄ちゃんあつたま良いなあ」

ほんわかと笑う悟空に一瞬だけ三人は絆され掛けるが、本当にあんまり頼りにならないと現実視する羽目になり溜息が零れた。

悟空は空を仰いで、集中している。

三人は気の探り方を知らないで、これだけは悟空が頼りだ。息を飲んで見守る三人に、悟空は困ったように笑いかけた。

「ごめ、わかんねえ」

「…、は？んだよそれ」

「なあカカロット、わざとやってんのか」

「洒落になんねえぞソレ」

タレス、バーダック、ラディッツと順番に問い詰める三人に、悟空は後去るしかない。

「本当だつて！！何でか分かんねえけど探せないんだっ」

悟空の表情に嘘は無かった。そもそも悟空は嘘は付けないので本当の事だろう。

空を飛ぶという方法もあったが、あらかじめ悟飯から禁止令を出されているのでそれを破つてバレた後の怖さがそれを可能にさせてはくれなかった。

「うしっ、これで決めよう」

そう言つて悟空が草むらから取つてきたのは木の枝だ。

すぐ満面の笑みなものだから、3人は反論を封じられた。

どうせ反論したとしても遅い。する前に悟空は小枝を突き立て、そして手を離す方が早かった。

コロん、と小枝がゆっくりと落ちたのは左の道だった。

四人は小枝と暗闇を纏う道を交互に見る。

「なんか嫌な予感がする」

「暗い道はどっちも一緒だぞタ レス」

「もう一回やれ」

「だからどっちも一緒だと思つぜ親父」

中々進もうとしない三人に悟空は眼を細めると、スタスタと歩きだす。

「んじゃ三人は右行けよ。オラ左行く」

「ちよつと待て！！！！」

結局は懐中電灯を持つ悟空が主導権を握って居て、震える声で悟空の後ろを慌てて追いかけていく。

懐中電灯の淡い光と、四人の可愛らしくない怯え声が暗い道へ溶けていけば。

分かれ道に立てかけられた立て札が、音も無く消えてゆき、まるで何もなかったように冷たい風が吹いて行った。

「……、あり？」

やはり歩きにくい密着した状態で暗い道を懐中電灯で照らしながら再び歩いて数分、塗装された綺麗な道が途端に途切れたのだ。

出口かと思いきや喜びに顔を上げる四人は直ぐに違うと気付く。

ゴールは海なのに、ちっとも細波が聞こえないし潮の香りがしなかった。

それになにより、海岸で待っている筈の仲間達の気配が全くないのだ。

「ま、ままままさか迷っ……」

顔を青くさせて怯えだすラディッツが悟空に抱きつけば、バードツクはウザそうに長男の頭を叩く。

「馬鹿、よく見てみる。入り口に戻ってきたんだ」

広い暗闇に眼が慣れてきて、懐中電灯が無くてもバードツクが指さす方向にある大きな建物が見えてきた。

よく見れば、皆が宿泊しているホテルではないか。灯りが点って居ないので分からなかったのだ。



「うん？なんで戻ってきちゃったんだ？」

首を傾げる悟空にテラスを見渡すタレスは振り向く。

「なあ、何で真っ暗なんだよ。おかしくねえ？」

たしか小島のリゾートホテルのスタッフは住み込みで働いている筈だ。

肝試しを開始する前は確かに広いホテル全体に、暖かく柔らかな照明が灯されていたのに、今は外灯すら暖かい光を灯ってはいない。

悟空が懐中電灯を閃かせれば、小さな光はテラスのパラソルや動物の形をした木々が夜風に揺れている。

もうすぐ今年最後の大イベントが近付いているので、ホテルオープンと同時に飾り付けも派手にするのか赤い色の装飾品が目立つが、暗闇の中では何処か薄ら寒さを覚える。

エントラスへと続く窓へ四人は歩み寄る。

眼を凝らせて覗きこんでも、ホテル内にも本当に人の気配がなかった。

肝試しが始まる前は、あんなに賑やかな音楽が流れて笑いが絶えない場所だったのに。

今は、伽藍といていて暗闇が四人の恐怖を煽った。

「みんな、どっか出かけちゃったのか？」

そんな悟空の呟きに、三人は確証も無く言い返せず、ただ視線を泳がせる。

バーダックがドアノブを掴めば、軽い音を立てて扉が開く。

迷わず足を踏み入れれば、他の三人は迷ったのは一瞬で直ぐにバー

ダックの後に続く。

調整された室温ではなく、夜の冷たい空気が四人の薄着を通り過ぎる。

人の気配はなくとも室内は埃も塵も無く綺麗で、逆にそれが不安を呼んだ。

エントラスホールに近付けば、テーブルにはブルマ達が飲んでいたワイングラスがそのまま置かれている。

確かに、彼女達は此処に居たのだ。

だがどうしても皆の気配が辿れない。

何に勘付いたのか、悟空の顔色が真っ青になり、間近で見ているラディッツが次に表情を歪める。

辺りを探索しているバーダックとタレスに声を掛けようとして、奥の廊下から微かに物音がしたのを聞き逃さなかった。

そして同時に黒い靄が掛かった様なその人の気配に、悟空はそこへ向かって速足に向かう。

ラディッツが慌てて追いかけて、それに気付いたバーダックとタレスも追いかける。

眼が慣れてきたとはいえ、一切灯りが点らない暗い廊下を懐中電灯を頼りに速足で過ぎ去る。

途中で他の部屋にも覗いたが人の気配はなく、悟空達は互いの息遣いと傍に居るという事だけが唯一の救いだった。

カッン、カッン、と確かに床を鳴らす足音が遠くから響いてきて、曲がり角を曲がる度に、その足音の影さえも見失いそうになり、ただただ追いかけるしか出来なかった。

長い廊下を抜けて中庭を挟んだ橋を渡り、港側に面したもう一つのエントラスホールへ辿りつけば、そこで悟空の足は止まった。

足を止めたのは、別に足音を見失ったからではなかった。

「…、んだよ、どうしちまったんだ」

タレスが思わず震わせた声に、他の三人も同じ気持ちなのか口をあけて絶句する。

たしか初めてホテルを案内された時に見たエントラスホールは、まるで海中で煌く珊瑚礁のように、辺り一面、様々な青色の宝石が散りばめられた青一色の美しいエントラスホールだった。

しかしその美しかったエントラスホールは見るも無残な姿になっていた。

海の波をイメージしたカーテンはどす黒く染まり切り刻まれ、深い毛並みの群青色のソファは原形を留めておらず何故か焼け焦げ、天井を美しく着飾っていた青水晶の巨大なシャンデリアは、歪なワイヤーを垂らせて床に落下して粉々に碎かれ横たわっていた。

せめて他の色彩があればまだ良かったものの、そこには闇色しかおらず、青色をただ黒く染め上げていただけだった。

「おかしい」

喉から苦鳴を漏らして呟くバーダックに、悟空は泣きそうになるのを堪え強く頷く。

それはタレスとラディッツも同じだ。

この無残な光景を見れば、直ぐに皆に何かあったと瞬時に思いつくが、それもどうにも怪しかった。

それを、自分達が気付かない筈がないのだ。

ラディッツは泣きを通り越して固まり、タレスは特に当てにならない。

皆の気配を探せられる悟空が首を縦に振れば、バーダックも険しい

表情を隠しきれなかった。

再び、ゆっくりとした足音が響いた。  
そうすれば四人は反射的にその音がした方へ向かうしかない。

「なあ、親父っ」

「何だ」

声を震わせながら懐中電灯を持って先頭に行く悟空の背を追いながら、ラディッツはバーダックに問うた。

「これも、肝試してやつなのか？」

「俺もそう思ったが、詳しくは知らん」

「だがよ、悟飯ならやりかねないぜ」

一瞬、悟飯の冷たい微笑を思い浮かべたがそもそもこんな大掛かりな仕掛けなどひとりで短時間で出来る筈がない。

「多分、違えよ」

先頭をまっすぐ進む悟空は、迷わず断言する。

「悟飯も参加するって言ったんだ。あいつは嘘つかねえよ」

悟空の発言に震えは無い。

悟空の歩みはスタッフルームへと向かい、長い廊下、在庫室、事務室を通り、そして最後に足を向けたのは、調理場だった。

「たまに無茶すつけど、本気で嫌な事はしねえよ」

そこで響いていた足音も止み、四人も止まる。  
非常灯だけが点滅する鉛色の扉に付いている窓から中を覗いてみたけれど、真っ暗で見えない。

「なあ、こんな所にこんな頑丈な扉なんてあつたか？」

ラディッツが首を傾げながら扉を叩けば、ゴンツ、と豪華なホテルには似合わない鈍い音が暗い空間に響く。

懐中電灯で照らせよくよく見れば、綺麗な青色の壁紙に不似合いな、古びた鉄の扉だ。

扉の奥から、不穏な空気を感じて四人の背中に悪寒が走る。

「行くか？」

背後に居る三人に振り向いた悟空の表情は、固い。

「お、俺は行かねえ」

人一倍怯えているラディッツに、しかし賛同する者はいない。  
タレスとバーダックも若干表情が引きつってはいるが首を縦に振らない。

「つんでだよ！！他の所探せば良いだろ！！」

「いんや、これはアイツの挑発に違いない」

はつきりと断言したのはバーダックだ。

それに頷いているのはタレスで、悟空は分からないようだ。

ピクニックへ逝こう？

なんか出ました

「悟飯が仕組んだっていいたいのかよ」

「カカロットの言葉を信じない訳じゃねえが、そもそもあいつは俺らにはぞんざいな扱いだぞ」

悟空に聞こえない様に三人は囁き合う。

たかが作り物と断言した悟飯と、このイベントを提案したのはブルマだ。

なにか裏があるのだと最初に気付けなかったのが誤算だ。

「他の奴らもグルってこともあるぞ」

「ホテルの従業員もそれに加わっていたら、納得できるな」

もしかしたら、本当に皆は何処かに隠れていて自分達が怯えて居る様を眺めているのかと考えてしまえば、三人から沸き上がるのは恐怖よりも怒りだ。

「行くんだろう？」

気味の悪い笑みを浮かべ始めた三人に悟空は不審者でも見る様な眼差しを向けた後、重い扉に手を掛ける。

錆びた鉄が床を擦り出す耳障りな音を立てて扉が開く。

懐中電灯で扉の向こうの暗闇を照らせば、数十段の階段が現れた。

四人が階段を一步一步踏み出す度に、階段を叩く乾いた音が響き渡

る。

恐怖から苛立ちへと感情を返還させたからだろうか、先程よりも歩みは緊張はあるものの力強い。

階段は直ぐに終わった。

暗闇だがとても広い空間なのは淀んだ冷たい空気で分かる。

その長く続く暗く冷たい部屋を埋めつくすのは沢山の扉だ。

いくつか壊れた意味の分からない機材などが広い廊下に転がって居て、床や壁は老朽で捲れがり、赤く錆びたそこは酷く異臭がした。扉を見れば、やはり頑丈な鉄で出来ており、番号が書かれたプレートが全ての扉に付けられていた。

タ レスがひとつの扉の小さな窓を覗きこめば、異臭と混じって、古びた機材が横たわっている。

奇妙な機材にタ レスは眉を潜めた。

病院などで見かけるベッドに似ているが、拘束具らしき物が備え付けられており、そのベッドの隣には様々な道具が並べられている。

そこまで見て、タ レスは扉から素早く離れると廊下を進む悟空達を追いかける。

いくつもの曲がり角があったが悟空は迷わずまっすぐ進んで行く。悟空の左横にぴったりとひつついたタ レスは、ふと悟空に問いかける。

「聞くが、ホテルの地下にこんな施設つてあるもんなのか？」

どう見たってホテルの方が真新しいし、この異様な空間を見ればかなり長い時まで存在しているのだと分かる。

「いや、そもそもなんの施設なんだ？」

「これも肝試しの作りものなのか？」

「だったら相当趣味が悪いぞ」

無意識に、四人の歩くスピードが速まる。

ここまで、懐中電灯ひとつで暗闇を歩き続けるなんて考えもしなかったからか、さっきまでの勢いは何処へやら恐怖感が高まったのは表情を見れば分かる。

「随分歩いたぜ。誰も居ないんなら戻るしかないだろ」

恐怖に耐えきれないのかラディッツが提案すれば、流石の悟空でも足を止めた。

ずっと歩き続けても壁や出入り口は見えない。

曲がり角を曲がるとも考えたが、迷うだけだとすぐに判断した。

「最初に来た道に戻ろう。もしかしたら皆、海岸に居る…」

悟空がそう言つてバーダックに振り向いた瞬間だった。

血相を変えたターレスの顔が悟空の視界を埋め尽くしたかと思うよりも、両手で後頭部を抱えられて床へと押し倒す勢いで体重を乗せてきた衝撃に驚かされた。

二人の頭上を、風を切る物体が横切る。

鉄に噛み付く耳障りな音に顔を上げれば、表情をひきつらせたバーダックとラディッツが後去っていた。

二人の視線は、悟空とターレスの頭上に向けられている。

恐る恐る見上げれば、そこにあったのは巨大な熊でも一刀両断可能な、不気味な鉈なたのような刃が悟空とターレスの頭上を滑空し、勢い



余って鉄壁にめり込んでいた。

悟空が咄嗟に避けるよりもその攻撃は早く、そして前触れもなく闇から現れたソレにいち早く反応できたのは悟空のすぐ後ろにいたターレスだけで、考えるよりも本能で動かなければ、恐らく二人の首はなかっただろう。

どつ、と冷や汗が溢れて視界が一瞬歪んだ。

普通の人間ならば、自分が首を切り落とされる痛みさえも自覚できずに絶命するだろうが、生憎と体だけは頑丈なサイヤ人が喰らえば、切断されず鉄壁に叩き付けられて頭蓋を割るか、首の骨があなぬ方向へ折れ曲がるかどちらかだ。

無駄に思考が駆け巡った後に、恐怖が追いついてきた。

鉄壁に噛み付いていた巨大な鉈が強引に回転、鉄屑を撒き散らして鉈はそのまま垂直落下する。

その下には悟空とターレスの脳天。

ラディッツが二人の名を呼ぶ前に、二人は獣歩行で素早く前進。

鉈の矛先がターレスの縮こまった尾の毛を、数ミリ奪って地面に落下する。

老朽で固いだけの床が落下した場所だけ陥没した。

ひゃっ、とターレスの肩が上がる。

尻尾が危険に晒されたのが余程怖ろしかったのか必死に自分の尾を抱えている。

絶句して立ち尽くすバードックとターレスの視線の先には、懐中電灯に照らされていない闇に埋もれた長い腕がのっそりと延びてきた。生傷と膿と痣だらけの逞しい腕が、巨大な鉈の柄を握っていた。

床に減り込んだ鉈が、肩腕だけで持ち上げられる。

悟空が立ちあがって距離を取れば、タイミング良く闇に蠢くモノが

姿を現した。

ミシリと裸足の足が床を踏む。

長く古びた布を腰に巻いた、上半身裸の男だ。

だがそれだけでは四人は絶句しない。

三角形を模した鉄の異形な板を頭に被っているなど、誰が想像できるだろうか。

悟空は思わず懐中電灯を取り落としそうになり、慌てて身構える。

それは他の三人も一緒だ。

ラディッツが代表して叫ぶ。

「なんなんだアイツは！！！」

裏返った声で叫んでも三人が応えられる訳がなく、ましてや目の前に居る大男が喋る空気すら見せない。

巨大な鉈を、大男が引きずってゆっくりと近づけば、無意識に四人は後退する。

呻き声なのか愉悦なのか分からない、頭を覆う鉄の板から毒気すら感じる息を吐きだした。

その気持ち悪さに表情を歪めようとして、ふと視線が大男の後ろ手に隠れていた物に向かう。

大男は右手で鉈を持ち、隠れていた左手に手にしていた物を見て、悟空はとうとう懐中電灯を床に落としてしまった。

他の三人は驚いているだけだが、段々と顔色を悪くして軽くえづいた。

大男が左手に持っているのは、人間らしきものだ。確証を持ってないのは、皮膚を力任せに剥ぎ取られ、筋肉や臓物がむ

き出しになつてゐるからだ。

頭蓋は割られ脳の一部が溶けて床をさらに汚している。

右の眼球は神経を伸ばして床に転がつていた。

床に落ちた懐中電灯が、皮膚を剥ぎ取られた人間の顔を映す。

瞼のない左目は恐怖に見開かれたままで、唇の無い口腔からは血と混じつた涎が滴る。

皮膚を剥ぎ取られても尚、その人間は生きていた。

よくよく壁を見れば、腐つた臭いの原因は皮膚を剥ぎ取られた人間達の血肉と糞尿に鉄が錆びていて、よりグロテスクに見えた。

ラディッツがその光景に耐えきれず倒れそうになったが、バーダックが無言で長男の頭を叩いて正気に戻す。

「カカロット！懐中電灯を拾え！！」

バーダックの喝に我に返つた悟空は慌てて懐中電灯を拾おうとしたが、大男の行動の方が早かつた。

なんの振り上げも無く大男の右手が閃いて、水平に横切つた鉈が悟空の額を狙う。

だが悟空の額は割れなかつた。

傍に居たタレスが、咄嗟に鉈を蹴り上げたからだ。

恐怖に軸がずれて力を半分しか發揮できなかったが、大男は予想外の反撃だつたのかよろめき呻いた。

「おおおおおつ、すげえ！蹴つたよ！！」

何処に感動しているのかタレスに、それが癢に障つたのかバーダックは一言で切り捨てる。

「なら、奴は幻影ではないっつーことだ」

そう切り捨てれば、タ レスの表情はすぐに暗くなる。

バーダックとタ レスの言う通り、いや、悟空が襲われた時点で幻影ではないと分かった。

幻影でなければ、四人がここまで恐怖する訳がなかった。

胃がチリチリするような、怖気すら感じてしまつては、いくら戦闘民族であろうと戦いにくいあいてには間違いなかった。

しかもこの場合は、戦える戦えないの範囲を逸脱している。

「なあどうすんだ！父ちゃん」

「んなの決まつてるだろうがっ」

みなまで言うまでも無く、バーダックが来た道を振り返ると慎重に走り出した。

それに三人は迷いなく続く。

通常の人間よりは視力が高いが、懐中電灯一本だけでは足元は不安定だ。

いくら夜目が効いてきたとはいえ、こつも暗闇の、不気味な道を無暗に走り出すほど無謀ではない。

振り返るまでもなく確実に追いかけてくる大男が引きずる鉦の音にただただ恐怖心だけが募るだけで、ふと、タ レスは先程覗きこんだ扉の窓を視界に捕えた。

扉の向こうの光景を見た瞬間、タ レスは喉が詰まる押し殺した悲鳴を漏らした。

何もなかった筈の扉の向こうでは、複数の人間が輪を囲んで立ち尽くしていた。

手元は蠢いていて、輪の中心にはベッドに括りつけられた人間が白目をむき出しにして口から泡を吹いていた。

輪を囲んだ人間が手にしているのは病院の手術などで使う刃物で、

血にまみれている。

泡を吹いている人間の方は、腹が切り裂かれ臓物が剥き出しになっていて体温の上昇で湯気が立っていた。

其処まで見て、タレスは身が竦み上がった。

隣で走るラディッツの肩越しにある扉の向こうでは、頭蓋を割られて脳を手掴みで取られて痙攣する人間と眼が合い、その次の部屋では逆さ吊りにされた人間が不気味な獣に頭から食いちぎられている。先頭を走るバーダックも同じ光景を見たのか、顔色は青を通り越して白い。

こんな光景をラディッツや悟空が見たら失神どころではない。走るので精一杯なのかそれとも怖すぎて余所見できないのか二人は行く道を睨むだけだ。

背後からはまだあの音が、遠からず聞こえ続ける。まるで此方が怖がるのを楽しんでいるように見えて、タレスは叫ぶしかなかった。

「何なんだよつ、一体どうなってるんだよ！あれが人間のやる事か？！超怖いんですけどー！」

「叫ぶ暇あんならとつとと走れー！」

バーダックが肩越しに振り返って叫ぶのが早かったか、四人の横スレスレを巨大な鉈が過ぎ去って壁に刺さった。

少しズレて居たら両腕を失う所だったラディッツは叫ぶどころか絶句して瞬きすらしない。

「兄ちゃん走れー！」

悟空に背中を押され我に返ったラディッツは再び走り出したが直ぐ

に立ち止る事になる。

速度を急激に落としたバードックは目の前の光景に啞然とした。

「おい、嘘だろ……!!」

手を伸ばせば、冷たい壁に指が触れる。

行き止りだった。

だがそんな事はある得ない事実だった。

四人は廊下をまっすぐ進んだのだ。

行き止りなんて無かった筈だ。

だってほんの数十分前は、階段があつたからだ。

曲がり角も無くなっていて、扉を開ける勇気がある筈もなくどうすれば良いかと迷っていれば、大男の足音が急激に近付いてくる。

闇に埋もれた道から、不気味な大男の体が浮かび上がってくる。

確実に近付いてくる大男に四人は顔を見合わせると、悟空が静かに気を高ぶらせてゆく。

だが恐怖で気は大きく乱れている。

大男と戦う事も出来る。しかし得体の知れない存在に近寄る事さえ嫌なのに戦うなど正気の沙汰とは思えなかった。

「俺達、生皮剥がされんのかな」

ほんの二時間前までは、テレビで見ていたホラーが現実のものとなり直視し辛くなってタレスは呟いた。

そんな呟きに応えるように大男が鉈を振り上げた瞬間だった。

突如、廊下を照らす眩い光が瞬いた。

閃光弾の光だ。

四人は眩しさに眼を細め、大男はその光に苦しげな悲鳴を上げて闇の中へと下がるうとする。

しかし光はすぐに急速に弱まってゆき、それを狙って再び大男は迫りくる。

「皆さんっ、こっちです!!」

聞きなれた声が廊下に響く。

そちらへ視線を向ければ、数ある扉のひとつを誰かが開け放っていた。

その声に顔を上げた悟空が、喜びに顔が綻んだ。

## ピクニックへ逝こう？（未完）

「悟飯！！！」

悟空は喜びに息子の名を呼んだが、他の三人は訝しげな顔をして、突然現れた悟飯に疑心の目を向ける。

「お前が仕組んだんじゃないのか？！！」

「僕が主犯なら助けに来ますか？！早く！奴が来ます！！」

闇に隠れていた大男が再び姿を現せてくる。

三人は戸惑ったが、悟空が迷いなく走り出したので、仕方なく走り出せばそのすぐ背後に迫った大男に、悟飯は再度、閃光弾を放つ。その隙について四人が扉を潜り抜けたのを確認すると、悟飯は急いで扉を閉める。

その瞬間、頑丈な扉に凄まじい音を響かせて巨大な鉈が噛みついてきた。

大男が暴れて扉を壊そうとする前に、悟飯は扉に鍵を掛ける。

「行きましよう、長くは持ちません」

そう言ってる合間にも、鉈は暴れ出して強引に扉をこじ開けようとする。

悟飯が自分の持っている懐中電灯で向こう先の廊下を指し示すと、流石に悟空も悟飯に問いかける。

「なあ、これも肝試しなのか？」



悟空の問いに、悟飯は苦笑するだけだ。

それにタレスが言い返そうとして、それを止めたのはバーダックだ。

「この先を行けば、出口なんだな」

「はい、恐らく」

悟飯は曖昧に応える。

しかし此処で言い争いをしている暇はない。

とにかく出口を目指して走り出そうとして、悟空は悟飯に振り返った。

「悟飯？」

悟飯は、四人を追いかける事もなく立ち尽くしていた。

「僕は行けません」

「何バカな事言ってるんだ!!」

二人が心配でバーダック達も立ち止ってしまった。

「まさか、他の皆も此処に居て迷ってるのか？」

声を震わせて問う悟空に、悟飯はただ笑って首を左右に振る。

「いいえ、皆さんは海岸で父さん達が戻ってくるのを待っていますよ」

「だったら早く、」

悟空が悟飯の腕を掴もうとして、しかしそれは出来なかった。

悟空の腕を、悟飯の体がすり抜けたからだ。

驚愕する四人に悟飯はただ優しく微笑むと、廊下の向こう先を指さす。

「行つて下さい。すみません、怖い思いをさせてしまつて」

「悟飯」

『悟飯』を残して逃げるのに戸惑つたが、悟空は深く頷いて走り出す。

何か言いたげなタレスも悟空に続き、それをバーダックとラディッツが追う。

悟飯が持つていた懐中電灯の光が消えて、扉が破壊される音が聞こえた時には、四人は最早振り返る事もせず、ただひたすら長い廊下を走り続けた。

暖かい南国とはいえ陽が落ちると途端に肌寒さを増す海岸を、人工的な灯りが点っている。

肝試しのゴール地点の為に急遽設置した人工灯に囲まれ、暖かい飲み物を手に、不参加組は悟空達とクリリン達の帰りを待っていた。寒さのせいかワインが進んで大人の女性陣は二度目のほろ酔い気分だ。

天津飯とウーロン達もスタッフが用意してくれたバーベキューを囲つて此方も夜食が始まっている。

「ねえ、ちよつと遅くなあい？」

呂律が緩くなったブルマの問いに、他の者達も頷く。

「そうですね。30分はもう既に過ぎておりますし、差し引いたとしても此れは時間が掛かり過ぎですね」

腕時計を見たホテルの支配人が、待機していたスタッフに声を掛ける。

その数分後に、ホテルから海岸へ続く道筋を外灯が照らします。

どうやら他のスタッフ達が連絡を取り合って灯りを点してくれたようだ。

## 久遠の色

それは、幸福の記憶。

遠く奏でる音と色の旋律。

細やかな粒子が一定の時間を有して混じり合い、新たな色へと変化してゆく。

例えばAが白としてBへと変化する時に赤へと変化するならば青のCが、AとBの間に入り込めばAとBに色が分かれるか、それとも新たな色を生み出すのか、単純な仕組みだがまた別の色が配入されれば、それは数万通りの色を表す。

所謂、仮想力場とはそんなものだ。

一定の時間と組織を与えてやれば、それは創造主の手を離れて色という旋律を静かに奏でてゆくだろう。

しかし、一度だけ。

交わるはずもない色が、数万分の1の確率で、ささやかな奇跡を起こす。

「パパ、」

室温清浄機で湿度を保たれた小さな書斎に、幼い声が響く。

部屋の主の几帳面さが出た、種類別に分けられ綺麗に整頓された古

い本が並んでいる。

リビングや仕事場にある本と違い、蔵書や初版は此处で大切に保管して要る。手にしていた本を机に置き、名を呼ばれた悟飯は愛娘に振り向いた。

「どした？パン」

最近、若かりし頃の妻にますます似てきた少女は、父が本棚の奥から顔を出す姿を見て笑みを浮かべた。

「友達と約束があつて出掛けるの」

「ママは？」

「夕飯のお買い物よ」

「そつ、気を付けて行つておいで」

悟飯が微笑めばパンも笑い返して玄関へ向かおうとして、何かを思い出したのか振り向く。

「おじいちゃんが、あたしの部屋で寝てるの。夕御飯になつたら起こして上げてねっ」

まるで母親にそっくりな口調と笑顔に悟飯は苦笑すれば、娘の背中を見送った。

パタンと扉が閉まれば、広い部屋は寂しげに静謐を纏う。

部屋を出て長い廊下を歩き、娘の部屋へスルリと音もなく入る。

趣味の良い妻と娘によってファンシーに彩られた部屋の中央で、父は文字通り横になっていた。

気の優しい娘は祖父が風邪を引かないように掛布を与えていたようだ。冬間近の冷たい風に、大人の体を丸めて寝息を立てている。

そろりと足音を消して父に歩み寄る。

気の知れた気配だからだろうか、無防備に安らかな寝顔を見せる姿に愛おしい気持ちが増える。

癖のある柔らかい黒髪に触れようとして、悟飯は何かに気づいた。

かしゅん、

と小さな音が規則的に鳴り響く。

辺りを見渡し、娘の机の上にある虹色の球体を見つける。

よく見れば様々な色個体を持つ素粒子が混ざり合って球体を鮮やかにさせている。

その球体から、何かをはめ込むような音が響いている。

「お父さん」

悟飯は、ゆつくりと父の肩を揺すり起こす。3回ほど呼べば、父は瞼を開き息子を霞んだ視界に入れる。

「んあ…悟、飯？」

「ねえお父さん、起きて下さい」

「何だ、夕飯か？」

「いいえ、もつと良いものです」

そう言われて、起こされた悟空は怪訝に思えば、部屋の雰囲気が変わる瞬間を感じた。

涼やかな音色が静謐で満たしていた部屋を優しく響かせる。オルゴールだ。

何かの始まりのような音楽。

「なあ、悟…」

「し、黙って見てて下さい」

悪戯する子供に似た笑顔で悟飯は徐に天井を指さす。

悟空も吊られて顔を上げた瞬間、それは起こった。

かしゅんと最後に音を立てた球体は、蒲公英たんぽぽが種を空へ飛ばすように色個体が散り散りに天井へと散ってゆく。

光と科学公式で操られた色素粒子は、様々な物を描いてゆく。

「う、わぁー…」

悟空は眠気を吹き飛ばしその光景に見入る。

天井に描かれたのは家族の写真だった。

両親が結婚した時代から始まり、ビーデルの両親、悟飯とビーデルが生まれた日、仲間達と沢山の思い出を写した写真。

そして娘が生まれ、最後の戦いを終えた時に皆で写した写真が、一定の時間を有して流れてゆく。

「色素配列って、面白いんですよ」

感嘆の息を漏らす悟空の隣に、悟飯は腰を下ろす。

「色の種類を増やせば増やすほど、それは宇宙の原子よりも沢山の式を構築させてくれます。ですが…」

悟飯が言葉を切ったと同時に、天井の芸術は寂しくも霧散してしまっ

球体を見れば、小さな音を立ててまた静かに色素粒子の渦を遊ぶように作っている。

「ある一定の組み立てを指定して実体化させるのに、数万分の一の確率を必要とします」

「かく、りつ？」

「さっきのように天井に絵を描くのに必要な媒体は、1ヶ月に一度しか揃わないと言う事です」

「それ、て凄いのか？」

「パンの誕生日プレゼントにしようところそり設置したんですが、先に見ちゃいましたね」

長い間、顔を見せなかった孫娘のために修行を我慢して娘と遊ぶ父の姿は、とても幸福感を覚えた。

こんな幸せな時間など、どれくらい前の記憶だろう。

「ねえ、お父さん」

球体を指で弾いては色を混ぜてゆく悟飯の声に、悟空は俯かせた顔を上げた。

「僕、貴方の息子として生まれた事をとても幸せに思ってますよ」

いくつもある惑星の中でただひとつの『地球』を選び、養父に愛され、優しい人々に導かれ、愛する母を守り、家族を慈しみ、故郷を命懸けで守った偉大なる父。

でも、それだけの感情ではないことも気付いてしまった。

それだけで、散らばって消えそうになっていた色彩が途端に集まって踊るように花開くように心を満たしてゆく。



「父さんは？」

この宇宙の中で唯一無二の、僕達の奇跡を信じますか？。

「あと少し調節すれば、1日1回の割合で見れますよ」

絨毯に大の字で転がる父の顔を覗き込めば、父はまだ天井を眺め続けていた。

「パンには内緒ですよ？」

嘘のつけない父に片目を瞑ってみせれば、悟空は悟飯に視線を向けた。

「…、オラな」

続きを促すように慈愛に満ちた眼差しを向ければ、悟空は泣きそうな顔で笑った。

「この星で、おめえや他のみんなと出会えて、オラそれだけで奇跡で幸せなんだ」

破天荒な所もあった。

迷惑も多大に掛けた。

それでも皆は自分を信じてくれた。

それだけで、

「お父さん」

「貴方は、笑って傍にいてくれるだけで充分ですよ」

「で、も…」

「幸せは平等ですけど、別に制限なんて無いですよ」

罪深いかもしれないけど。

最後だけは言葉にできなかった。

きつと父は、幸せの意味を履き違えるから。

「ずっと、貴方の幸せを願っています」

貴方は、世界にそれだけの奇跡を与えてくれたから。

それは愛の象徴で、幸せの証であり、小さく胸に穴を開けるような痛みを伴った誓いだった。

- f i n -

幸せと言って。その度に、貴方に愛していると伝えたい。

## きつと君は泣くまいと

蒸し暑さを連れてくる梅雨も一息休む、うららかな春も下旬の午後。

小気味良い腹を鳴らせて、大きな魚を背負って悟空は帰ってきた。

霧も晴れぬ早朝は修行に出掛け、それを終えたら森へ入って食料や薬草を調達。

自分が出稼ぎ出来ない分、養父から教えて貰った効能の薬草は都市では高級食材とされている。

今日は『母の日』だと、大学生になった息子達が教えてくれた。いつも大変だけど身を案じてくれる妻を想い、今日くらいはと悟空はいつになく張り切っていた。

こちらは予定は組んではないが、夕方からはトランクスや息子達が主催する夕食会があるので、急いで帰ってきたのだ。

自宅へと入って、おや、と気付く。

妻の気配が様子がおかしかった。

朝陽が窓から照らすリビングを抜けて、息遣いが聞こえる寝室へと向かう。

ソロリと忍び足で寝室へと入れば、妻は一人掛けチェアに揺られながら眠りの中にいた。

エプロンが隣にあるので、さっきまで洗濯をしていたのだろう、歩み寄れば石鹸の良い香りが悟空の鼻先をくすぐった。

名を呼び掛けて、躊躇する。

妻の手の中には家族写真が一枚。

皆で撮った写真だ。

それを握る手は年齢と苦労さが滲んでいて皺があった。

きゆう、と胸が少しだけ苦しくて、悟空は幸福感やら嬉しさやらで目頭が熱くなるのを感じた。  
膝について、妻の手を取る。

小さく妻の名を呼んで、そこへ愛おしく唇を寄せる。

己は、いつも君を想っていると。

天涯孤独だった己に養父とはまた違う家族という愛情を教えてくれた小さな手には、きっと己は勝てない。

悟空さ、と恥ずかしげに名を呼ばれ、顔を上げれば、頬を染めた妻と目が合う。

昔からその微笑みは変わらず、己に安らぎを与えてくれる。

合図も了承もなく、二人は唇を重ね合わせる。

穏やかな午後の昼下がりが、幸せで満たされてゆく。

君は今も幸せですか？

己は幸福感で泣きそうです。

孫家週間一日目。

どんな時代でもこの二人は大好き。

きつと君は泣くまいと？

高い窓から降り注ぐ朝陽は薄暗い書斎に届かず。

淡く人工的に灯っているのは、色様々な数式を彩らせる浮遊する球体だ。

人の体温を感知して距離を取って浮遊するQPが、己を作ってくれた主の頬に冷たい水素球体を寄せて、また色鮮やかに点滅させて弾かれてゆく。

浅い眠りから悟飯が目覚める。

流石に徹夜が続くと寝落ちは怖いものだと思息が出る。

椅子から腰を上げて背伸びをすれば、凝った肩が軋みを上げる。

だがそれでも、昨夜の疲れは嬉しい記憶だ。

最近整理した机の上にあるのは、まだ赤いリボンを解かれていない本達と、新しい万年筆が並ぶ。

目出鯛事が続くのは喜ばしい事だ。

一昨日は母の日で夕食会を盛大に祝い、昨夜は己の出生祝い。

母と父との愛情によって望まれて産まれた己を、周りの人達は名を呼んで祝ってくれる嬉しさは二日酔いと共に緩やかに残っている。

時計を見やれば、まだ夜明け直前の時刻。

日付が変わったら宴会状態となって片づけが終了したのは三時間前だったのを最後に、記憶が無い。

「今日が休めで良かった…」

緩やかな頭痛は無視して書斎を出る。

リビングへ続く廊下へと出れば、天井窓から降り注ぐ陽光に照らされ、母や弟、新しい家族となったビーデルやブルマとトランクスがソファに横になって安らかな寝息を立てていた。

祖父や武天老師、クリリン達も居たがそう言えば先に帰ったんだと思いだす。

皆お互い忙しい身であるから、こういう口実で仲間達と集うのは嬉しいものだ。

床に落ちたブランケットを、まだ起きる気配を見せない妻のビーデルの肩に掛け直す。

ふと、視界に入らない存在に気付く。

父の姿が無かった。

久しく人の気配を探らなかつたから、溜息をついて視線を遠くにやる。

父の気配は家の屋上にあつた。

軽やかな足取りで屋上へと向かえば、寝不足な眼に昇った朝陽は強かつた。

「よう、悟飯」

「おはよう御座います。お父さん」

父も寝不足なのか、眠たそうな顔で振り向いてきた。

その姿が何だか懐かしくてまっすぐ歩み寄れば、父も笑って手を伸ばしてきた。

「もう立派な大人だな」

「いいえ、そうでもないですよ」

指先に触れた父の手は、昔は大きくて暖かつたけれど。今は同じくらいの大きさで、少しだけ近付いた気がした。

「大人になれば変わるかと思いましたが、中々変わりそうもありません」

せんよ」

「何か変わりたかったのか？」

頬を緩ませて、笑い合った二人の横顔は輝く朝陽に照らされている。

「今は分かりませんが。きっとお父さんが僕や家族、皆を思つ気持ちと変わりませんよ」

そう応えれば父は一瞬だけ切なげなものを瞳に宿らせたが、すぐに距離を離れたから口は噤んでしまった。

聞きたかったが、けれど今日だけは、あんまり考えたくない。

「産まれてきてくれて、ありがとな」

「僕も、…」

祝福してくれて。

重ねた熱が答えだ。

沢山の愛の中からひとつを選ぶのは難しいけれど、

「お父さんの息子として産まれた事を、誇りに思ってます」

自分の幸せは、ひとつだけではないだろうから。

朝日が頭上を照らし、新しい日々の歩みを導いていた。

君が生まれた時、初めて大切にしたい宝物を見つけた気分だった。



きつと君は泣くまいと？

軽やかな破裂音と紙吹雪に、悟空はドアノブを掴んだまま眼を見開いて立ち尽くした。

『おめでとう、悟空』

急な呼び出しでCC社に赴いたけれど、呼び出した当の本人であるブルマ達の姿はなく、広いリビングへ訪れた途端、出迎えてくれたのは仲間達だった。

見慣れた仲間や、彼の妻や息子達が各々の笑顔で悟空を囲み祝いの言葉を贈った。

しかし本人は首を傾げたままだ。

「なに呆けた顔してるのよ孫君」

このイベントを主催したブルマが嬉しそうに悟空の背中を軽く突いた。片方の手にはワインが掲げられている。

「オラ、なんかやったか？」

「おじいちゃんの誕生日だよ」

仲間達の波を割って、一人の少女の声が響く。

幼い少女の両手には大きな花束が抱えられ、悟空に駆け寄るとそれを手渡す。

幾分と可愛らしく成長した孫娘のパンだった。

笑顔は母親似で、聡明な瞳はますます悟飯そっくりになっていた。

「でも、オラ誕生日ってよく知らねえぞ？」

「だから、つくったの!!」

「僕や悟天、パンとの誕生日のちょうど中間にしました」

こちらも大きなリボンでラッピングされたプレゼントを抱えた悟飯が説明してくる。

他の皆も様々な色紙で包まれたプレゼントを抱え、悟空におめでとくと祝ってくる。

しかし悟空は戸惑ったままだ。

「いやでも、オラお返しなんて全部は無理だぞ」

妙な所で遠慮する悟空に、最初に笑ったのはブルマだった。

「いいえ、私達が勝手にやりたかったただだから、孫君は変わらずに御馳走を食べてくれてれば良いの」

そつだそつだと皆は頷いて、悟空を御馳走の所まで誘導しようとしたが、いつになく悟空は真剣な表情だ、

「ねえ、困った?」

哀しそうに問いかけて来るパンに、悟空は慌てて首を横に振る。

「いんや違うんだ。ただ、オラはいつも皆に迷惑な事ばかりやらかしちまうから」

「あら、ちゃんと自覚はあったのね」

茶化してくるブルマにもう一度反論しようとして、悟空は口を開きかけたが、前触れもなくブルマが悟空に飛びついて来た。

突然すぎるのでよろめいたが、悟空はしっかりとブルマを支えた。

「ほら、昔の通りよ」

「な、なにが？」

悟空の頬に悪戯のキスをブルマは楽しそうに笑って贈る。

「孫君は、私が助けてっていつも助けてくれたじゃない」

どんなに遠く離れていても、その声にいつだって応えてくれた事を。

「でも、」

「ほら！――うだうだ考えてないでっ」

ブルマが強く悟空の背中を押す。

仲間達の波を通り過ぎて、ある場所へと連れて来られる。

そこには、壁一面に張られた悟空と仲間達の写真だ。

初めてドラゴンボールを探しに旅に出た日や、亀仙人の修行やら天下第一武道会、RR軍での壮絶な戦いに、ピッコロ大魔王との決戦。まさか実兄が来るまで普通の人間だと信じていたが、そこから息をつく暇もなく続いた激戦は、決して悟空だけが特別ではなかった。しかしそれでも、皆は悟空の言動を理解してくれてあるうことが祝福してくれる。

もったいないくらいの幸せが心を満たして、悟空は思わず泣いてしまった。

その泣き顔に慌てたのはパンで、一生懸命ハンカチを手渡してくる孫娘に悟空はますます涙が止まらない。

中には悟空に吊られて泣いている仲間達も居たが、どうやら遅れてきた他の仲間達もやってきたようだ。

「皆呼んだわよ」

「皆って、他にだれ…」

途中まで言いかけて、悟空は言葉を止めた。

泣き腫らしてしまった眼を見開いて、ドアの前に建つ人物が悟空と眼が合つて名を呼べば、悟空は嬉し泣きな顔で抱きついた。首を傾げたパンがビードルに問いかける。

「ねえ、あの人誰？」

「ああ、彼ね。どうやって仲良くなった訳はよく知らないけど。孫君が名を付けてあげた友達だそうよ」

悟空が、パンの名を呼んだ。

やけに身長が高い大柄な男は、優しそうに此方に手を振っていた。

そつね、名前は、とブルマが名を覚えてくれた。

悟空に好かれ好いてくれるのだ、きつととても優しい人なのだろう。

各々のプレゼントを抱えて、悟空に『おめでとう』と言った。

たとえ貴方が不安になつてしまつても、その不安を取り除いてやりたい。

幸せを感じるままに、貴方に沢山の祝いの言葉を。

きつと、貴方には全部届かないだろうから。

両手に抱えた絆と勇気を君は惜しみなく分け与えてくれるから、  
愛で返したい。

きつと君は泣くまいと？

「悟天が居ない？」

小腹が空いたので台所へ顔を出したが、忙しそうに大きなケーキにフルーツを飾っているチチとブルマには何となく声が掛けられずにいれば、そんな悟空にビーデルが苦笑しながらクッキーが入った袋を渡した。

ピザの生地を作らされていると、ひょっこりと顔を出したのはトランクスだった。

幾分成長した少年は、ずる賢い印象を与える瞳を向けて首をかしげていた。

問い掛ければ、どうやらトランクスはこのパーティーの主役である悟天を探しているようだ。

「あらどうして？簡単に探せるでしょう？」

生クリームが乗ったパテを弄びながら問うブルマに、しかしトランクスは首を左右に降った。

「気を隠してるみたいでさ、探せないんだ…」

「それ本当なのか？」

実はあと三十分もすれば悟天が通う小学校の仲の良いクラスメイトが来るのだ。

当の本人が出迎えなければ意味がない。

少し元気がないトランクスに、悟空は目を向ける。

名を呼んでどうした、と聞けばトランクスは複雑な顔をした。

「…招待状」  
『招待状?』

聞き返して、嗚呼そういえば悟天はクラスメイト達に手作りの招待状を渡すと言ってたなと思ひ出す。  
それを聞いたブルマが呆れたように笑う。

「トランクス、アンタまだ悟天君から招待状貰えなかったこと、怒ってるの?」

「お、怒ってないよ。ただ…」

反射的に言い返そうとしたが、トランクスは口を閉じてしまった。  
目を合わせない息子に、ブルマはため息をつく。

「悟天君は、アンタはそんな事しなくても来てくれるって信じてるから、だからアンタも来たんでしょ?」

ブルマの言葉にトランクスは素直に頷くが、どうやら軽く口喧嘩をしたようだ。

謝りたくて悟天を探しているのに、本人が見つからなくてトランクスは今にも泣きそうだ。

もうすぐ戻ってくると言うのは簡単だが、チチとビーデルも言えずにいる。

「なら、オラが探して来てやる」

手を拱いているトランクスに助け船を渡したのは悟空だった。  
クッキーを平らげて椅子から立ち上がると、まだトランクスは自分が探すと言い張る。

「トランクスは、今から来る悟天の友達と遊んでくれねえか？頼むよ、」

母親譲りの柔らかい髪を撫でてくる悟空が笑えば、トランクスは渋々頷いて、よろよろと廊下を歩いて行った。

あれでも根は優しい子だ、きつと悟天が戻ってくるまで律儀に約束を守ってくれるだろう。

「じゃ、行ってくる」

「悟空さ、出来るだけ早くな」

「おう、分かってる」

窓から外へと飛び越えて、最後のクッキーを頬張る。

悟空は、なんとなくだが悟天が居る場所を知っていた。

以前、悟空が天界から帰って来た時に悟天が教えてくれた秘密の場所がある。

きつとそこだろう。

昨夜、自分の誕生日なのに何処か寂しげな表情をしていた息子に、悟空は切なげに息をついた。

思った通り、自宅のすぐ裏山にある隠れるようにあった洞窟、もうひとつの息子の部屋に悟天は居た。

昔は悟飯が使っていた場所だが、兄から譲り受けたと嬉しそうに話してくれていたのを思い出す。

洞窟の入口に、大小様々な動物達が洞窟を覗きこんで寂しげに鳴いていた。

パオズ山に居る悟天の友達だろう。

動物達の間を潜り抜けて洞窟へと入れば、悟天は大きな熊のお腹に抱きついて蹲っていた。



父が来ている事は既に気付いている筈だ。

「悟天、どうした」

悟天に歩み寄ってその柔らかな黒髪を撫でてやれば、哀しそうな眼が見上げてきた。

「今日、おめえの為に皆来てくれるんだぞ。主役が居なくちゃ寂しいだろ？」

「うん、分かってる、んだけど…」

「トランクスと喧嘩しちまったんだって？」

「僕、トランクス君に酷い事しちゃった」

唇を震わせて、まだまだ幼さが強く残る悟天の顔は見る見るうちに歪んでいく。

「トランクスは一番の親友なんだろ？」

「…うん」

「なら、ちゃんともう一回伝えればいいじゃねえか。トランクス、おめえに謝りたくてずっと探してるぞ」

「本当？トランクス君、怒ってない？」

応える代わりに、悟空は悟天の頭を撫で回した。

しかし、悟天の表情はまだ晴れやかにはならない。

「まだ何かあるのか？」

「…、あのね、本当はね」

しゃくりあげて悟天は泣いてしまった。

頬にすりよってくる小熊に抱きついてしまう悟天に、悟空はただ訳を聞く事しか出来ない。

「本当はね、森のお友達も招待したかったんだ。でも、お母さんが……」

「そつか、お母さん、動物苦手だもんなあ……」

「ドラゴンさんやサーベルタイガーさんは、皆を怖がらせちゃうからダメなんだって。皆、優しいのに」

妻の気持ちも分からなくもない。

が、上手い事を云えないのも悟空は迷っていた。

しかしどうしても心優しい息子の願いを叶えてやりたい気持ちは強い。

そう思えば、悟空は悟天の名を呼ぶ。

「悟天、父ちゃんに良い考えがあるんだ。だから、皆の所へ帰るって約束できるか？」

「できるの？お父さん」

「ああ、任せとけ。だから、はやくトランクスと仲直りしてくるんだ」

泣きやんだ悟天の背中を押して、洞窟へと出る。

そうすれば、遠くない家から、悟天の名を呼ぶ子供達の声が響いてくる。

どうやらパーティーが待ちきれないようだ。

まだ此方を窺う悟天を促し、悟空は逆方向へと飛びだす。

悟空が向かった先は神殿だった。

直ぐに降り立って挨拶もそこそこにデンデに会々と、ドラゴンボールを大至急集めるよう頼んだ。

「良い考えがあるんだ。よかったらデンデ、ミスターポポも、カリン様もヤジロベーも協力してくれ」

悟空が嬉しそうに話すのを、デンデは眼を輝かせ、ミスターポポも嬉しそうに頷き、カリンとヤジロベーも感慨深く頷いた。

天井まで届くのではなからうかという巨大なケーキタワーは、二時間もしないうちに悟天やトランクス、誕生日を祝いに来たクラスメイト達の腹の中へ消えていった。約半分は悟天とトランクスの腹の中だが、そのお陰で二人の仲直りは直ぐに済んだ。

「結局、お父さん何処行っちゃたんでしょね」

「ケーキ、楽しみにしていたのに……」

プレゼントの山を片付けている悟飯とビーデルがチチ達と談笑している時だった。

前触れもなく、大きな影が悟天達の頭上を覆い尽くした。

子供達が騒ぎだし、便乗して慌てた悟飯は状況がいまいち把握できずに見上げれば、見覚えのあるシルエットに啞然とする。

「ね、ねえ悟飯君！あれってもしかして……」

「うん、神龍だ……」

地平線にまで届くのではなからうかという長い尾は煌く翡翠の鱗に覆われ、大きな口、白い牙。

子供達を見下ろしてくる優しい眼差しに、悟天は誰の仕業なのかすぐに分かった。

「お父さん！！！」

「悟天、遅くなつて悪かったなあ」

神龍の背から降りてきたのは悟空だけでなく、デンデ達も乗っており、予想外の来訪と祝いの言葉に悟天はまた泣きそうになる。

「おっと、まだ泣くのは早いぞ悟天」

悟空が背後を仰ぎ見る。

吊られて悟天達も見上げれば、子供達はさらに喜びの聲が上がる。先程、洞窟に居た悟天の森の友達だった。

しかしよくよく見れば、動物達の身体が妙に小さい。

悟空の肩くらいまで大きかったサーベルタイガーは、子犬の様に小さく、小山並みに大きかったドラゴンは悟空の腕に抱えられていた。

「神龍に頼んで、今日一日だけ小さくして貰ったんだ。これだったら、皆で遊べるだろ？」

「うん、うんっ、ありがとお、お父さん」

思わず呂律が回らないくらいの悟天の泣きっぷりに、トランクスも吊られて泣いてしまった。

そんな二人を、子供達はもう一度バースデーソングで祝福してくれた。

役目を終えた神龍が空へと舞い上がり、流星群と共に消えてゆく。

その美しい光景は息を飲むほどだ。

悟天やトランクス、子供たちにとっては忘れられない一日となっただろう。

「暫くは、夢心地でいられそうですね」

悟飯の意地悪っぽい科白に、悟空は吹き出しそうになったが我慢した。

優しい君の願いをひとつだけ叶えようとしたら、何だかオマケמידで心を満たす歌が添えられた。

夜の闇は今暫く流星群にかき消され、両手に抱えきれない程の幸せが降ってくる。

振り向いた君の瞳は、もう涙は流れ消えた後だった。

可愛い悟天が書きたかったので最後の最後に出し切りました。  
お気に召しましたら幸いです。

今年も孫家週間、有難う御座いました。

## Blot:Heart(前書き)

魔人ブウ編。

作中には露骨な暴力表現が含まれています。

色々酷いキャラが許せない方は、閲覧を御遠慮下さい。

此方の作品には、女性向け要素が含まれています。

## Blot:Heart

吐き気よりも気持ち悪い感触が、全ての感覚を縛りつけている。首を締め付ける苦しみに、脳が沸騰する熱から一瞬だけ意識が鮮明になる。

痛みに紛れて与えられる熱に、俯かせていた視線を上げれば、見慣れた相手の顔があった。

「う、はん…っ」

名を呼んでもその痛みは薄れる事はない。

乱暴に触れて来る【息子】の手は、死人の様に冷たく。声すら、虚しく宙に響かず落ちてしまっただけだった。

強く踏み締めればゴムに近い弾力の気持ち悪さに、悟空は息を突く。

最初は一緒に行動していたベジータは、分かれ道でとつくに姿を見失った。

彼の気を遠くもなく感じるのは確かで、分厚く隔てられた桃色の壁の向こうで吸収されてしまった仲間達を探しているのだろう。

やはり老界王神から貰ったポタラでの、ベジットの合体を解かれたのは多少なりとも誤算だった。

急だったがベジータに強引に納得させて融合したとはいえ、手に入

れたパワーは想像を遙かに超えていた。

戦う事すら躊躇するほどの強い魔人ブウを超えた力に、過信していた訳ではなかった。

最初から仲間達を吸収されたのを知っていたから、自ら吸収される機会を待ったのに。

これではもし仲間を救う最中にでも邪魔されれば、ベジータは本来の目的であるフュージョンを許してくれそうもない。

腐りかけた甘ったるい匂いに、悟空は吐きそうになる。

歩けども歩けどもあるのは薄気味悪い景色だけで、探している仲間達の気配が中々探れない事が、悟空の不安を更に煽った。

何処を見渡しても蠢いて脈打つ光景は、魔人ブウの体内に居るのだと考えたくもない事を巡らせる。曲がり角らしき箇所は、闇に包まれていて其処へ進もうとも勇気が出ない。

今からでも遅くは無い。

ベジータが進んで行った道へ戻って、もう一度フュージョンを持ちかけようか。

彼を説得するのに骨が折れるが、こんな悪寒に肌が栗立つ空間に居るよりはマシだ。

こういう場所は、嫌いだ。

吐き気がして、脳が眩暈よりもなお質の悪い感覚に捕らわれそうになる。

溜息を吐きそうになって、ぐ、と堪えるしか出来ない。

自分の意地を抑えて、来た道に戻ろうと踵を返した時、悟空は動きを止めて視線を上げた。

「悟飯……？」



僅かに感じた気の乱れは、ベジータではなく悟飯のものだった。視線を巡らせて駆けだす。

薄暗い曲がり角をまったく平衡感覚も分からない空間を走り抜け最深部へ辿り着けば、冷たいくらいの空気に包まれた先に、悟空が探していた人物がいた。

山吹色の道着に、自分と大差変わらない身長。そして自分に良く似た面影は正しく息子だった。

名を呼んで駆けようとして、戸惑う。

探し出した息子の悟飯の身体は半分以上、魔人ブウの体内の桃色の壁に飲み込まれていたのだ。

悟飯はぐったりと頂垂れていて顔が見えず、嫌な予感を覚えたがそれも一瞬だけで、迷わず駆けよる。

「悟飯！」

息子に触れば、死人の様に冷たかった。

慌てて胸元に耳を寄せれば、辛うじて心臓の音が聞こえて悟空は安堵に息を突く。

どうにかこの気味の悪い拘束から解放させようと悟空がそれに触れると、悟飯から苦鳴の息が漏れる。

「悟飯！気が付いたか！！」

「お、とう、さん？どうして、此处に……」

視界が霞んで見えないのか、悟飯の瞳は焦点が合っていない。

「んな事は後回しだ、兎に角、直ぐに出してやるからな」

悟飯の腕に雁字搦めに拘束する弾力のある壁を無理やり引っ張ってゆくと、飲み込まれ掛けていた悟飯の身体はどうやら無事の様だ。

拘束が緩んだ所を見つけて悟飯の腕を掴んで引つ張り出せば、ズルリと滑った音を立てて悟飯が抜け出られた。

身体が無事なのを確認して、悟空は直ぐに立ち上がる。

恐らく悟天やトランクス、ピッコロ達も近くに居る筈だ。

ベジータの気は感じられずどうなっているのか分からない今、悟飯の回復をともに待ってられない。

「悟飯、立てるか？直ぐにベジータと合流しよう」

座り込んでいる悟飯の肩を掴んで促そうとすると、逆に悟空の手は悟飯の冷たい手に掴まれてしまう。その手は力強く、悟空は思わず眉を顰める。

「悟飯？どした、もしかして苦しいのか？」

「行く必要はありませんよ、お父さん」

よくよく見れば、悟飯は薄く笑っている。

風もなく前髪が揺れ、悟飯は目を細めて父を見上げる。

その瞳は、いまだ濁ったままだ。

悪寒が背筋に走った時には、悟空は素早く後退する。

数秒遅れて、髪の数センチが消滅した。

殺気すら感じる痛烈な拳撃を繰り出したのは悟飯で、予想だになかった攻撃を避けられたのは悟空の一瞬の判断だった。

悟空を捕えられなかった事に悟飯は別段気にも留めず、ただ冷たい視線を静かに悟空に向けている。

その視線は邪悪に満ちていて、純粹の欠片すらなかった。

一定の距離を取って、悟空は目の前に居る【息子の姿をした物】を

睨んだ。

だが何かがおかしいとも感じている。

「っおめえ、悟飯じゃねえな！」

「半分本物ですよ」

にこやかに笑う姿は優しい息子、しかし纏う力は邪悪そのもので、そして見紛う事無き、パワーの質は息子本人だ。

その気味悪さに悟空は吐きそうになるが、堪えるしか出来ない。

「言ってる意味がわかんねえぞ」

「身体は幻ですが、神経回路、記憶、パワーは僕そのものですよ。お父さん」

雄弁に語る【悟飯】に、しかし悟空は未だ信じられない顔をする。だが信じるしかないのだ。

間違える筈もない悟飯の気を纏っていれば。

悟空が返答に困っていれば、【悟飯】は確実に距離を詰めてくる。

「お父さん達が入ってきた事は分かっていましたから。態々僕の方から来てあげたんです。だから……」

目を細めてうつとりと語る【悟飯】が、重苦しい気を放出させてくる。

【悟飯】が一步近づけば、悟空は一步下がる。

その度に弾力のある壁は脈打ち、悟空を不愉快にさせる。

「お父さんを殺して、僕はもっと強くなります」

熱に浮かされた【悟飯】の表情に、悟空は怒りすら覚えた。

魔人ブウに吸収されてしまえば、自分達の尊厳すら奪われてしまうのか。

パワーのみならず記憶も、肉体も、非情に変えられてしまうのか。そして同時に、悟空は後悔も抱く。

「ごめんな、悟飯。オラがもつとしっかりしてれば、おめえが吸収されることもなかったのによ…」

「言い訳なら地獄でやってください」

本物ではないと分かっているでも大切な家族に言われてしまえば、悟空は身を引き裂かれるような痛みが更に吐き気を催せてくる。

拳を強く握って気を高ぶらせてゆけば、悟飯も応えるように冷たく笑って距離を縮めて来る。

悟飯の圧倒的な力は、悟空の身を竦ませたが後退する事は許されなかった。

「ねえ、お父さん知ってました？小さい頃はよく我慢してましたけど、僕はやっぱり戦うのが嫌だったんですよ」

飛ばしていた意識が浮上して、いまだ痙攣を続けている自分の指が見えた。

そこで漸く、地面に蹲っていたのだと気付く。

体中が軋みに悲鳴を上げて、【悟飯】が優しく語りかける声に視

線を向ける事しか出来ない。

頬杖をついてまるで歌うように、【悟飯】は目の前の悟空を眺め続ける。

「僕に全部、責任を押しつけて死ぬなんて。あれから僕がどんな思いで生きてきたか、きつとお父さんには分からないでしょうね」

【悟飯】が軽く腕を振り上げると、紙を擦るに近い音が悟空の鼻先を襲う。

その直後、悟空は鼻腔を襲う熱と鉄の匂いに口元を指で覆えば、指の間から少なからず血が伝った。

肩が震え立ち上がる事さえできずに、悟空はただ目の前に居る【悟飯】を睨むだけだ。

悟空の血の匂いに興奮したのか、【悟飯】の右目が蠢いて赤黒く染まりそれだけで、悟空は【悟飯】のおぞましい力を思い知らされる。脇腹が軋んで【悟飯】の容赦ない蹴りをもう一度喰らえば、折れた骨はきつと臓器を傷付けるだろう。

「ねえ、お父さん、聞いてる？」

「うああつ、」

【悟飯】は悟空の柔らかい黒髪に指を差し込んで、俯いている頭を力任せに掴んで顎を反らさせる。

割れるほどの苦痛が続く頭ではまともな返答が出来ない。

【悟飯】が笑いながら、悟空の耳元で囁く。

「それとも、天国でそこらへんの女とやりまくって、僕達の事は忘れてた？」

悪寒と共に悟空の残っていた怒りが爆発した。

瞳は再び碧へ、髪は煌く金へ変わり一気に膨張した爆風は【悟飯】の身体を弾き、軋む体を叱咤して悟空は【悟飯】に押し掛かって首を締め上げる。

沸騰した怒りに振り上げた悟空の指先が【悟飯】の首を切り裂こうとしたが、悟空は動きを止めてしまう。

【悟飯】の右目が元に戻り、苦しそうに呻いて悟空の名を呼んだ。

「おとう、さん、やめて、攻撃したら吸収された僕まで死にますっ」「っ、悟、は、ん…！」

助けを求める大切な息子の顔を見て、悟空は表情を歪ませて力を緩めてしまった。

「はい残念」

手を振りおろす事を躊躇した悟空を待つてやるほど、【悟飯】は甘くは無い。

苦しみ呻く息子から一変、冷たく微笑んだ【悟飯】は上に乗る悟空の腹に容赦なく膝蹴りを放てば、ゴリユ、と鈍い音を立てて悟空が吹き飛ばされる。

勢いよく吹き飛ばされた身体は壁に激突するが、そのまま地面へと倒れてしまうと思いきや、弾力を持った壁が突如、悟空の身体を柔らかく呑み込んでいき、もがけばもがくほど壁は悟空を拘束していった。

「ねえお父さん、僕は貴方を憎む事だつてできたんです」

俯いた視界に、【悟飯】の足元が見えて心臓が凍りつく。

喉を鳴らせて笑う【悟飯】の冷たい指が、身動きの取れなくなった悟空の顎のラインをなぞってくる。

噎せ返る甘い匂いに、悟空の視界は薄れていくも決して【悟飯】に懇願はしなかった。

飲み込まれそうになるその気持ち悪さに表情を歪ませる悟空に、【悟飯】はうっとり微笑んで優しく囁いてくる。

「僕を呼んで下さい」

「おめえは悟飯なんかじゃねえ!!」

「記憶も、パワーも【孫 悟飯】と共有しています。僕も孫 悟飯ですよ」

「ち、がうつ、」

「僕がこんな事をするのは僕の意味ではないと、言いたいんですか？」

冷たい怒りが含まれた低い声にすら、悟空は決して耳に入れない。気を高ぶらせて拘束から逃れようと四肢をがむしゃらに動かす悟空が気付く筈もなく、無情にも振り上げた【悟飯】の手が、鈍い音を立てて悟空に振り下ろした。

まるで鏡の裏側から見ているようだ。

見えない壁を壊そうと何度も叩いているのに、ちっとも壊れやしない。

重い拘束や痛みなんか気にならない。

己の大切な人が自分と瓜二つの奴に殴られている光景なんて、自分の痛みなんて比べられるものじゃない。

「お、とうさんっ、どうして」

どうして反撃しないのかと、苦しげに悟飯は呻く。

確かに、最初の戦いで父から受けた左腕への蹴りは此方にも激しい痛みが届いた。

だが奴が放つ攻撃は自分のパワーそのもので、父が顔色を変えて蹲る姿は、

悟飯にとっては悪夢そのものだった。

「攻撃して下さい、お願いですから……」

そして悟飯の心を激しく掻き毟るものがもうひとつ。

怒りが高まれば高まるほど、奴の力も高まり。

そしてもっとも知られてはいけなかった、奥深くに抱いてた「感情」が別の手の者によって暴かれる恐怖。

『憎んでたんでしょう？お父さんを』

項垂れる悟飯の耳元に、聞き間違える事が無い高い声が響く。

ゆっくりと振り返れば、幼き頃の自分が微笑んでいた。

ステップを踏んで、幼い悟飯が真下にある酷い光景を見下ろす。

『無責任なお父さんを見限って、罵りたかったんでしょう？』

反論しかけて、悟飯は絶望に口を噤んだ。

目の前に居る自分は、間違える筈もない自分なのだ。

パワーや容姿、記憶だけではない。

かつてないほどに強く、黒く渦巻く抱いてはいけない感情全てが、分身なのだ。

だからと言って、尊厳を無視されて大切な人を奪われている事は事実なのだ。



物心ついた時から、父の偉大さを知っていた。

戦いの渦へ巻き込まれて、父を全く恨まなかった訳でもなかった。けれど母や弟、仲間達とは質の違う感情を抱いてしまった事を一度だって後悔した事は無かった。

あやまちに気付いたからこそ、自分は強くあれたのだ。

「違うないとは言わない、だけど」

何処へぶつけていいのか分からない凄まじい熱が、闇に吹き荒れる。こんなに力を暴発させているのに、真下に居る父は気付いてくれない。

ただ幼い子供は艶やかに微笑んで、膝を突く悟飯の頬に手を滑らせる。

『我慢しなきゃ良いのに、そしたら…』

「貴様なんとか、一緒にするな」

幼い唇が自分の鼻先へ向けられて、腐臭と甘い香りに不快感が脳を揺らす。

触れて来る手を打ち払って、子供の姿をした闇を睨む。

「むしろ貴様を哀れむね。人を愛する喜びを、人に愛される喜びなんて知らない貴様が、僕や父さんの力を越えられる訳がない」

子供の笑顔は一瞬凍りついて、悟飯の言葉が理解できないのか首を傾げ、そして最後には冷たく笑って吐き捨てる。

『分かんない』

最後に、朗らかに笑って消えていった。  
無邪気で残酷で、まっすぐに自分によく似た。  
闇はそれでも揺るがず、悟飯を苦しめた。

「なんだ、此処は…」

逸れた悟空さえも気に掛けず、ベジータは辿り着いた場所を見上げて思うままに呟く。

薄暗く、甘い匂いと腐敗臭漂う空気に気分が悪くなるよりもなお質が悪いのは、蠢く壁が、感じた事のあるパワーの正体だ。

しかしその知っているパワーは背筋が凍るような力ではなく、胸やけがしそうな悪質な力だ。

言うなれば、魔人ブウに酷似している。

「どういう事だ」

ベジータは理解できなかった。

何故ならばそのパワーを持つ孫 悟飯は、ベジータの目の前に居るからだ。

弾力のある桃色の球体に捕らわれた、気を失っているだろう悟飯の後ろにはトランクスと悟天、ピッコロも居た。

しかし遠くない場所で肌を叩くのは、間違える筈もない悟飯の凄まじいパワーだ。

そしてある嫌な予感がベジータを襲う。

確か、地球上には魔人ブウがある数人を覗いて人間を滅亡させた

せいで、奴の標的になる存在は居ない筈である。

だとすれば、悟飯のパワーを吸い取った魔人ブウが此処まで凄まじい威力を出して戦っているという事は、相手は自分以外とあと一人だけという事になる。

舌打ちして、ベジータは迷った。

不安定な場所で、ただでさえ探しにくくなった悟空の気を探すのは容易なことではない。

踵を返そうとした足を、ベジータは前に戻す。

ゆっくりと球体に近付いて、それと繋がっている管の様なものを引っ掴む。

魔人ブウの異常なパワーの源が悟飯達であるのなら、それを断ち切れれば良いのだ。

管に指を喰いこませば、桃色の壁が脈打ってベジータに不快感を突きつける。

どうなるか知った事ではない。

ただ、悟飯の気を纏った奴と戦う悟空の悲しみに満ちた表情が脳裏を掠め、同じく吸収され利用された哀れな息子解放したくて力を入れる事を躊躇しなかった。

心が強く軋んで、泣きそうになった。

振り上げた腕が、眩暈を起こすほどに殴打してくる。

息を弾ませて愉悦に自分を呼ぶ声は、息子ではないと頭では分かっているつもりでも、悲しまずには居られなかった。

出来るのは、ただ思いを声に出す事だけ。

「ごめん、ごめんな」

ふいに【悟飯】の動きが止まる。

悟空の言葉が理解できない【悟飯】の表情は、中途半端に不気味だった。

「一人で辛かったんだよな。おめえに無理強いさせた、オラが全部いけないんだよな」

「お父さん…」

腕を下ろした【悟飯】が何となく悟空に触れようとした瞬間、力クンとまるで糸が切れた操り人形の様に地面に蹲ってしまった。悟空を圧迫していた力が消えて、拘束していた桃色の壁も蠢きを失くして解放した。

様子の可笑しい【悟飯】に近付こうか迷いつつ歩み寄れば、再び動き出して悟空の足首を掴む。

それに驚いて悟空は手を振り上げたが、様子が違う事に気づく。

「悟飯、本物の悟飯、なのか？」

「お、とうさ、ん…」

蠢いていた赤黒い右目は元に戻り、邪悪な気も消え去っていた。

苦しみに呻いていても、悟空には彼が本物の息子だと直ぐに気付けた。

「多分、ベジータさんが僕達を見つけてくれたんです」

「ベジータが…」

「お父さん、お願いがあります。僕を攻撃してください」

全力で、容赦のないくらいに。

父の足にしがみついて懇願する悟飯に、悟空は首を横に振ろうとした。

しかし悟飯は足を離そうとしない。

「この身体は僕のじゃないし、奴を抑えていられるのも僅かです。お願いですっ」

「で、も…」

迷いを捨て切らない悟空に、悟飯は優しく微笑む。

「大丈夫、僕はそれくらいで死にません。貴方の息子ですから」

悟飯が苦しみに呻きだし、右目が再び蠢きだす。

苦しいのを必死で我慢して、悟飯は悟空に笑いかける。

「貴方の息子は、誰よりも強いんです、だから…」

悟飯の言葉が途中で途切れて、濡れた音は別段響かずに地に堕ちる。

違和感を与えて来る腹部を見れば、悟空の震える手が悟飯の腹を突き破っていた。

やはり本物ではないのだから、血は出ない。

悟空の顔を見れば、痛々しそうな表情だ。

もう声も出ない。

最後に、ごめんなさいと唇を震わせるだけで、悟飯の身体は液体となって消えていった。

重い身体を引きずらせて、悟空は立ち上がる。

結局は、最後に謝って来た悟飯には理由は聞けなかった。

この戦いが終わったら、教えてくれるのだろうか。  
だが悟空は頭を振って混乱する思考を止めた。

記憶も、パワーも共有していると、奴は言った。

ならばあの行動も、息子が望んでいたかもしれないのか。  
それも悟空はすでに思考の端に追いやった。

感情をコピーしようとも、パワーを吸収しようともそれは所詮、歪な模造品で。

魔人ブウと悟飯には大きな差が歴然としていたからだ。

奴は、人を許し、愛する方法を知らない。

大切な仲間達の姿を思い、悟空は立ち上がる。  
逸れていたベジータの気配を発見して、悟空は走りだす。

答えが聞きたい訳ではない。

心の奥に潜む、気付かれてはいけない思いを、知ってしまっただけ。  
気付かれたくなくて、気付いてやれなくて、

「ごめんな、」と背負う事の重さに耐えきれず吐息を吐いた。

FIN

神様は見た（前書き）

恐らく、此方がE Nの本性とも云うべきかもしれませんが…

作中には女性向け（B L）要素が含まれています。

男性向けではありません。

同性不純行為に嫌悪を抱かれた方の閲覧は御遠慮下さい。

## 神様は見た

足を運んでいた天界から戻ってくれば、神殿の離宮から見知った気配を感じた。

「神様、悟空が来てる」

「そうみたいですね、ポポさん」

出迎えてくれたミスターポポに羽織っていたローブを手渡すと、小さく息を付く。

閻魔の小言は毎度の事らしいが、まだまだ経験が浅い少年神デンデは渴いた笑いを溢した。

疲労は肩を重くしたが、悟空が来ていると知った瞬間、上機嫌になったのを禁じ得なかった。

御尊顔を拝めることすら己には立場が皆無な、老界王神の元へよく訪れる悟空は、老界王神から借りてくる絵本をデンデにも見せてくれるのだ。

この間貸してくれた絵本の続きを見たいと呟けば、悟空は喜んで借りてきてくれる。

さまざまな国の絵本を持ってきてくれる悟空が待ち遠しくて、週に一回はデンデの楽しみになっていた。

「悟空、ピッコロと一緒に居る」

「分かりました、行ってきますね」



足取り軽く、離宮へは数分で辿り着けた。  
今の季節は梅雨だ。

下界へ意識を向ければ、雨音が耳を心地よく撥ってくる。  
長雨の季節は穏やかな時が流れるものだ。

いつも世界中を飛び回ったりする悟空と、瞑想で一日の大半を過ごすピッコロはこの季節だけは離宮の滞在率は多かった。

夜、ましてや季節など無かったナメック星とは全く違うこの地球の人々は、ひとつひとつの季節の行事を楽しむ種族だ。

ついこの間まで、薄桃色に美しく咲く桜の暖かな気温だったのに。

「先月のお花見、楽しかったなあ」

社会勉強だと、適当な理由を付けて悟空達はデンデを色々な場所を、楽しいことを教えてくれる。

しかし今は突然の雨に、下界は再び一時の肌寒さと雨音の静寂に包まれていた。

雲の上である為、一年中静かな青空の上空に神殿はあるが、こうして意識を集中させれば、地球の息遣いをいつでも感じる事が出来る。

足音も立てず、デンデは離宮に辿り着く。  
扉は開いていた。

白い紗幕が風に柔らかく靡いて、部屋から清らかな風が溢れてくる。

ふいに、デンデは緊張した。

二人が居るであろう部屋へ顔を覗かせれば、見えた景色に思考が真っ白になったからだ。

紗幕がめくりあげられた天蓋ベッドから、特徴的な黒髪が覗いた。

そして投げ出された足首。

山吹色の胴着を見なくても、ベッドで寝ているのは悟空だとすぐに分かった。

しかし妙な感覚を覚えたのは、ベッドで健やかな寝息を立てる悟空の傍にピッコロが居たからだ。

ベッドヘッドに腰掛け、眠っている悟空の黒髪に、ピッコロはゆっくりと指を絡ませていた。

太陽の光を吸い込んだ様な柔らかな黒髪に、ピッコロは頬を僅に緩ませた。

それを覗き見していたデンデも、釣られて頬をうつすらと朱に染めてしまった。

眠ってしまった悟空を起こすのだろうかと思っただが、悟空の髪を掬うピッコロの指は優しい仕草で、起こす気配はない。

デンデは違和感を覚えた。

ミスターポポからは、地球人の生態を教えられている。

特に強く興味を示したのは地球人の想像豊かな愛情表現だ。

地球人は触れあう事で互いの温もりや言葉で愛情を示す。ナメック星人と違う所は多かったが、それは種族間の問題だ。それ以外は、感情は極めて特殊といった訳ではない。

明らかに触れ合い方が違うと分かったのはつい最近だがコレは完全に別問題だ。

「…、ピッコロ」

嬉しそうな悟空の声がして、デンデは俯いた顔を上げた。  
視線に映ったのは、悟空とピッコロが唇を啄み合う光景だった。

鈍器で頭を打たれたような衝撃が走る。

でかかった声を必死で抑え、どうすれば良いか分からず離宮から走り去るしかなかった。

頭がぐるぐるしていた。

悟空は地球人で、ピッコロはナメツク星人。

生態も何もかもが違う者同士の営みに、デンデさえもあの行為がどんな意味を示すかは分かった。

悟飯との師弟関係とは違う、必要以上の接触を要さない筈の、ピッコロの優しい横顔で悟空を見つめる光景は、脳を痺れさせる錯覚を産み出そうとする。

「神様？」

気付いたら本殿へと辿り着いていた。

デンデの帰りを待っていたポポの顔を見た瞬間、デンデは抑えていた感情を涙で表現してしまった。

「っ、ポポさんっ」

「神様、どうした？」

ポポに抱き着けば、優しい従者はデンデの背中を撫でてくる。

頭がまだぐるぐるしている。

「どうしよう、ポポさん……」

あれは、きっと許されない行為だ。

だがデンドはそう思う度に胸が痛くなるのを感じる。

あれほど幸福そうで、暖かさを覚える光景が禁忌などと、デンドは思いたくなかった。

テーブルの上には、悟空が持ってきてくれた本があったが、その純粹すら感じる本を直視することができなかった。

内緒の内緒の、愛しい人達の秘め事

## たったひとつの願い（前書き）

作中には女性向け要素（BL）が含まれています。  
同性同士のアレな表現が含まれています。  
嫌悪を覚える方の閲覧は御遠慮下さい。

## たったひとつの願い

### たった一つの願い

只一人の為だけに造られたからこそ、その一人の為だけに強く存在したいと願った。

たとえ命の灯を捻り潰すために手を伸ばしたとしても、認識される対象で居たかった。

仄暗い水の底で、ただ一人の為だけに生まれたこの力で腕で、

引きずり落としたかったのか、壊したかったのか。

未だにそれは、曖昧な問いと応えにすぎなくて。

熱を抱くはずのない無機質な模造品に過ぎない脳髓が、一人だけを求めて焦がれ止まない。

風が凄まじく唸る音が耳元で聞こえた瞬間、鳩尾に衝撃が落ちた。

ひゅっ、と喉元からせり上がる吐瀉物よりも金の御髪が散るように消えた感覚に、鳥肌が総立つ。

膝が地に着く前に後頭部を掴まれ、反撃する暇すら与えられずに、振り下ろされた拳を視界の端に捕えた時には横面を殴られた。

殴られた衝撃は殺される事無く、吹き飛ばされて背後にあった冷たい壁に叩きつけられる。

雪が肩に落ちてきても、寒さは欠片すら感じない。腹と頬は痛くても視界は逆にクリアになる。

雪を重く踏む音に顔を上げれば、陽光を背負った、雪のように冷たい男が立っている。

温かみのない巨躯、氷の瞳、生命を感じないその存在は全てが脅威だった。

これが、

「俺が、生まれた意味だ」

白髪が靡くき、声も冷たく、無機質で威圧的で。

けれど、こちらに向ける笑顔が何処となく人間臭くて、さっきまで露ほども感じなかった悪寒に声を詰まらせた。

「孫 悟空」

背筋を撫でられるような、身震いのする声に吐きそうになる。

相手の背後を遠めに見やれば、仲間達が力なく倒れている。

助けを求めたい訳ではないが、この視線から逃れられるなら何でもよかった。

こうなる事だと、一体誰が予想しただろう。

計算し尽くされた戦いに、自分達を遙かに超えた力を目の前にして怖れ慄かない訳がない。

人造人間との戦いは今回が初めてではない。

己のサイヤ人としての血が騒ぐような、武者震いではなかったのが、更に不安を募らせた。

至高なる狂科学者の執念が、ただひとつの目的である悟空の死を追求した結果なのだ。

自ら命を賭して完成させた恐怖しか生まない存在に、悟空の感情など予測内なのだろうか、ともに呼吸が出来ずにいる悟空を見下ろしても相手の男は常に微笑んでいた。

「何をそんなに怖れている？」

「っ、んな訳あるかつ」

「そうか、」

擲掄に問われ悟空がムキになって応えれば、男は背を少し屈ませると助走も無く悟空へと一気に距離を詰める。

立ち上がるうとしていた悟空は慌てて背を氷壁に預けると、息を止めて腰を落とす。

その瞬間、巨軀で捕まえよとしていた男の両腕が狙いが定められず空を掴めば、低空へと逃げた悟空はチャンスとばかりに頭上にある男のがら空きになった腹へ蹴りを放つ。

ごりゅ、と鈍い音が耳を拾った。だがそれは攻撃が突破した音ではない事に、悟空は気付く前に絶望感を味わうのが早かった。

悟空の膝は確かに男の腹に叩きこまれていた。だが、男からは苦鳴の声すら漏れなかった。その変わりのように、乾いた笑い声が悟空の恐怖を更に煽る。

「俺は人間では無いのだ。臓器の痛みは皆無だ」

そう言うが早いか悟空の隙を付き、ボロボロの道着の胸元を掴み上げると、ひと呼吸もなく地へ叩きつける。

悟空の胸元へ男の拳がめり込み、ミシリ、と骨が軋んだ。

悲鳴すら上げられず、悟空の潰れるような息が肺から出ていくのが男の精巧な耳が拾う。微細な指先から感じる、悟空の息絶え絶えな脈動に、男は指を緩めた。

意識を保たせるだけで精一杯なのか、濁り始めた悟空の視界は男を見てはいなかった。

薄い唇から洩れる弱い呼吸音に、男は眼を細めた。

ずっと望んでいた悟空の死を目の前にして、言い知れない抱く筈も



ない鈍い音が男の後頭部を熱くさせた。

途端、遠くにある研究室のスーパーコンピュータから異常を示すエラー音が鳴り始めたのが分かったが、男はそれを無視した。そんな葛藤と戦いながら、男はゆっくりと悟空に手を伸ばす。

分厚い手袋に包まれた冷たく大きな手が、青白い頬を滑る<sup>1</sup>。

それでも濁った視界が戻らないのが気に入らないのか、顎を強く掴めば悟空は呻きだす。

悟空の薄い呼吸を、男の無機質な瞳が感知する。

それに引き寄せられるように男は悟空の唇を割って、自分のそれをゆっくりと重ねる。

悟空の薄い呼吸が熱が、男の後頭部から発せられる熱に強く反応する。

抱く筈もない感情が、痛みがなかったはずの腹辺りがじくじくと熱を持ち始めて、男はその感覚に堪らず笑みを漏らした。

「俺はな、孫　悟空。思っていた事がひとつだけある」

喋りかける言葉は優しく、しかし悟空を捕える指先は力強いのに変わる。

呼吸すら必要としない、冷たい声が悟空の耳元に囁かれる。

俺は、8号を消してやりたい。

怖気すら感じる優しい声に、悟空の鮮明になり始めた思考に恐怖を塗りこませる。

「お前から自由を与えられた、名前を授けられた兄が、狂おしいほどに、憎いよ」

必要のない、存在しなくても支障がない感情だと思っていた。  
何時からだろうか。ただひとりの記憶だけを、脳にインプットされ  
た時かもしれない。

その存在を破壊したいのか、犯したいのか。  
単純な答えだと思っていた。

けれど違うと感じたのは、『兄』の存在。  
それさえも、後頭部の熱を前にしたら既に曖昧に近い。  
どうしたら、己ただひとりになれるのだろう。

お前の全てを壊せば、お前の全て以外を壊せば。  
存在意義を、己だけにすれば。

「…じゅ、さ…じゅ、う」

首の頸動脈すれすれを、男の指が圧迫している苦しみに、悟空は漸  
く男の名を呼ぶ。

それだけで、存在しない筈の感情が一気に湧き溢れる。

殺したい、壊したい、堕としたい。

本能的に逃げる悟空の足を掴み寄せれば、再び苦痛に呻く表情に、  
鉄の脳髓が限界を超えて沸騰していきそうだ。

「俺は、お前に壊されるだろうか」

その呟きは、悟空の温かく苦しげな呻きを奪いつくす。  
そして、彼のその輝く手で無機質な命を散らすまで。  
叶う筈もない願いを、抱きながら。

叶わない願いなら、その青く輝く力で、己の感情ごと壊して欲しい。

## HERO（仮）

作中には若干、専門用語が含まれています。

軽やかな音楽が流れる、昼下がりの銀行内。

様々な人々が順番を待ち、受付を済ましている中で突然、けたたましい破裂音が響いた。

心臓を凍りつかせるその音に人々は驚愕の表情で振り向き、音がした方へ視線が集中する。

銀行の入口で、数人の警備員が呻きながら倒れていた。

その視線を辿れば、出入口を塞いでいたのは七人の、何とも奇妙な格好の体格の良い男達だ。

ヌイグルミや不気味なお面を被った七人の男達の

中央で、右手を掲げたスーツ姿の男が一人。

眼鏡を掛けた、サラリーマン風の男は冷たい笑みを浮かべている。

その男達の手に持っているのは、殺傷能力が高いと言われている、銃だった。

店員や客達が瞬時に彼らが何しに来たのか理解すると、悲鳴を上げそうになったが、先にもう一発の銃声が響いて、悲鳴は押し殺される。

「抵抗しなければ、殺しはしません」

中心に居るスーツ姿の男が丁寧な口調で、なおかつ余裕で笑顔を添

えてきた。

それを合図に、二人は持っている銃で客に床に這うように命じ、一人は出入り口を、二人は受付内へ侵入して従業員を一か所に集め出した。

残り二人は、奥へ駆け込んで階段を上がってゆく。

そしてリーダーらしきスーツ姿の男は、優雅な動作で持っていたシヨルダーバッグをカウンターに置くと、怯えて泣きそうになっている女性スタッフに笑いかけた。

「あの金庫を、開けてもらえませんか？」

チラリと遠くへ視線を見やれば、奥に巨大な金庫があった。

並みの爆発ではビクともしない、分厚い鉄の扉に守られた金庫を狙っているらしき男に、女性スタッフは青ざめた様子で応える。

「で、でも、金庫の暗証番号は三時間毎に変わって、支店長しか番号は分かりません」

「うん、だから君に頼んでいるんですよ」

優しく笑って、女性スタッフに銃を突き付ける、

悲鳴を上げる女性に、スーツの男はただ冷たく見据えるだけだ。

「今すぐ支店長に電話して、警察に連絡するように伝えてくれませんか？ 近くのカフェで間抜け面して、ターキーサンドなんか食べてるんですよ？」

スタッフ達の行動を全て把握している男にとっては造作も無かったようだ。

銃で脅して電話させる女性に、スーツの男は楽しそうに笑う。

「そうそう、警察に無断で突入されたら困りますから。嘘の暗証番号教えたら全員ぶち殺すので、ちゃんと伝えてくださいね？」

どうやら、男達は警察を呼ばれても恐れはないようだ。

常習犯か、それとも自分達の作戦に余程自身があるのか、泣きながら支店長に電話する女性スタッフに最早一瞥すらせず、辺りを見渡す。

「安心して良いですよ皆さん、僕達の邪魔をしなければ、無事に帰れますから」

客達に笑う様は、まるで悪魔の様だった。

次々にバッグに金を積み込んでゆく覆面の男達を、ただただ絶望感で見ているだけしか出来ずにいた。

しかし、この銀行強盗達は一切気付いていないだろう。

この計画が失敗に終わるという事を。

銀行内に設置してある奥にあるトイレに居る人物が、とんでもない相手だという事に気付くのは、銀行の支店長が電話を受けて、慌てて警察に連絡をし、多くの警察官と特殊部隊が到着した直後だった。

「ええと、まず整理券を取って…」

銀行強盗が襲撃する五分前。

銀行内の奥にある男子トイレの個室で、そんな声が響いていた。

ぶつぶつと独り言にしては大きい声の持ち主は、若々しい男だった。紺のジーンズに清潔感のある白のシャツ、上から生地が薄く通気性の良い青のトレーナーを来た、跳ねた特徴のある黒髪の男は、持っている紙を睨んでいた。

眉を八の字に曲げて、お金の振り込み方法が書かれている紙をずっと眺め続けている。

珍しくカジュアルな服装を着た悟空だった。

しかし何故彼が、こんな来た事もなさそうな場所で悩んでいるかというと、原因は二時間前に遡る。

「社会勉強？」

家族揃ってと言っても、悟飯は学校だが、チチと悟天を連れてCC社へと赴いた時だ。

もうすぐ小学校へ入学する悟天についての話で、トランク스가通う学校へ入学する事になったのだが、なにせ都会へ行き慣れていない悟天が一人で通学できるかと、話題が昇ったのだ。

舞空術はどうするとか、変な人に着いていくという事は無いが、下手に何かに巻き込まれやしないかと話していたらふいに、

「孫君で試してみたら？」

ほら、土地勘なくて子供みたいなもんだし。

というブルマの軽い発言が、チチの何かのスイッチを点滅させたのか、ある事を思いついた。

チビ二人と庭で組み手をしていた悟空は、楽しそうなチチとブルマに手招きされ、紙と財布、あと着替えを手渡された。

「なにすんだ？」

「ちよつと、御使いを頼まれてほしいだよ」

「銀行に行つて、指定の口座にお金を入れてきて欲しいのよ」

「それ、オラがやらなくちゃいけないのか？」

「そうなのよ。私達これから大事な用事が出来たのよ」

本当は嘘なのだが行くのを渋ろうとする悟空に、チチはさらに畳み掛けて来る。

「美味しいお土産、いっぱい買ってくるだよ」

そう言えば、悟空はやると一言即答したのは言うまでもなかった。早まったかなと気付く前にブルマは銀行への道のりを教え、分からなくなったら店員に聞けと言って、入口で見送った。

もう既に後悔し始めたのか、チラチラと此方を窺ってくる悟空に「夕飯がないよ」と更に追い打ちを掛ければ、悟空は血相を変えて駆け足で駆けて行った。

「悟空さ、大丈夫だろうか……」

「まさに、初めてのお使いよね」

本来は悟天にやらせるべきかと思う反面、二人は笑いを堪える事が出来なかった。

そんな目論見を知らないトランクスと悟天は、首を傾げて悟空が歩いて行った道を眺めていた。



「うう、なんでこんなもん引き受けちゃったんだろう」

騒がしい都会すらあまり出歩かないのに、着慣れない服を着て、街を歩くなんて恥ずかしい以前の問題だ。

繁華街を歩いている時に、何故か女性達が、ほう、と溜息をついてうつとりとした目で見つめて来るのだ。

しかもそれが銀行へ入っても続いた為、思わずトイレへ逃げてしまったのだ。

まったくこんな場所すら来た事のない悟空が、人を呼びとめる事が出来る筈もなく、このまま瞬間移動で帰ったらお土産が貰えないと唸っていたら、受付カウンターの方から、耳障りな破裂音が届いた。

顔を上げて、悟空は眉を潜める。

意識せずそちらへと気配を探れば、数名を覗いて人々が驚きと恐怖で一杯になっていた。

また破裂音。

悟空には、その音には聞き覚えがあった。

幼い頃に、悪い男達がよく使っていた鉄の塊が破裂した不愉快極まりない音に、悟空は瞬時に理解する。

テレビなどで言っていた、銀行のお金を狙って襲撃する事件を、何度か見たことがある。

世の中には、悪い武器で悪い事をする人間が居るのだと、旅を続けていた時にブルマに教えられた。

そして、自分にはそれをやめさせる術をもっているとも教えてくれた。

息子自身も、正義感が強くよく変な格好をしては人々を助けている

ので、自分も何かするべきなのだろうか。

とにかく、此处に引きこもっていても仕方がない。

御使いは、恐らくこの状態だと無理だろう。

そう結論付けて個室から出ようとして、出入り口が開いて人が入ってくる音がした。

「…トイレ、異常なし」

小さな機械音とくぐもった声。

咄嗟に気配を消したので相手には気付かれなかった。

くぐもった声は男らしく、足音を鳴らせてトイレの窓を開ける音がある。

もしかしたら、逃げてきた人かもしれない。

外の状況を知りたくて、悟空は迷わず個室から出て行った。

「なあ、一体なにがあったん…」

できるだけ声を抑えて入って来た男に声をかければ、男は大袈裟に肩を震わせて勢いよく悟空に振り向いた。

奇妙な覆面をつけた男に、悟空は予想外に驚く。

「貴様っ、いつの間に現れたんだ!!」

「可笑しな仮面なんか被って、パーティーでもやってんのか?」

よく見れば、玩具の様な銃を持っていた覆面の男は、開けた窓から手を伸ばして仲間らしき別の男を引っ張り入れる所だった。

「おいつ、どうした!!」

外にいる仲間の腕を離して可愛くない犬のぬいぐるみを被った男は、素早く小脇に下げた銃に手を伸ばし、悟空に突き付けようとしたが、悟空が動いたのが早かった。

綺麗に磨かれたタイルを、悟空が音もなく踵で叩く。

それは辛うじて相手の視界に入るか入らないかの一瞬だった。

犬の頭のぬいぐるみを被った男が所持していた拳銃を構える。

スライド部分が若干小さいグロックと言われる、強化プラスチックの比較的撃ちやすい拳銃が、近距離の悟空の額を狙おうとしたが、すでに男の視界には悟空の姿は消えている。

右へ左へと身体を捻って、標準が定まる前に素早く動く悟空に驚き男は冷静に判断できない。

「うわっ」

被りものから覗く、驚愕に見開いた瞳に悟空の顔が映る。

男の視界の端に悟空のにこやかな笑顔が過ぎり、その直後には右手の激痛。

「あ、やっべ」

昔から危機感だけは人並み以上の悟空が、グロックが危険なのだと反射的にソレに手を掛けて男の手の内側へと曲げれば、たとえ悟空が手加減しようが、それは通常の人間にしてみれば達人技だ。

発砲した時の反動と熱を軽くする為に強化プラスチックを使用した銃の、スライド部分が奇妙な音を立てて悟空の指が食い込んだ。

引き金を引くのも忘れ完全にへしやげた銃を凝視しつつ、男は右手

の激痛に耐えきれず手離してしまう。

悟空も手を離せば、銃はいとも簡単に玩具の部品のようにバラバラになってタイルに散らばる。

男は驚愕の眼差しを悟空から逸らせないまま、腰に差したナイフに手を伸ばす。

しかし悟空にはその行動はスローモーションにしか見えない。一歩下がれば悟空の首すれすれで、よく磨かれたサバイバルナイフが横切る。

涼しい顔でそれをやんわりと避ければ、今度は悟空が動く。

予想外の人物の登場とあり得ない行動に冷静さは欠け、ゆっくりと動いた悟空の左足に男は気付かないでいた。

軽い声を掛けて、それに男が気付く前に両足が蹴られた。

蹴られた衝動が強く、男はなんの抵抗もなく身体が横に倒れる。

「おい、大丈夫か？」

いくら自分に危害を加えようとした相手とはいえ、自分が本気を出せば相手の身体がどうなるか分かっているから、悟空は思わず声を掛ける。

蹴られた衝撃が強かったのか、その反動で大きく身体も横転。

こめかみを強く殴打して、男は脳震盪を起こしていた。

どうしようもないので仕方なく横たわせれば、窓の外から騒がしい声が聞こえる。

「おい、何があつたんだ！！」

「まだ中と繋がらないのか？」

「まだ無理です。セキュリティーを解除しないと繋がりません」

規則的な機械音と、何かを嵌めこむ音。

思わず背を屈ませて聞こえてくる音に耳を傾け気配を探れば、人数は五人だろうか。

耳鳴りの様な音が悟空の集中力を遮ってくる。

考えなくとも外から聞こえる声の人物達は、足元に倒れて居る男の仲間で、いまカウンターで良からぬ事をしている奴らと合流するのが目的だろう。

壁を蹴って昇ってくる気配がする。

銃を持った人物達をなぎ倒すのは造作もない事だ。

出来ない事もないが、もし発砲されてしまえば店内に居る仲間達に知られてしまう。

力の加減がいまいち分からない自分が、下手に動けばどうなるかそれが問題だった。

だからといって、恐怖に怯えて助けを求める人々を、それを恐怖で抑えつける悪人達を見逃すほど自分は無責任ではない。

顔を上げて、悟空は後ろを振り返る。

掃除用具入れの隣に立ってかけられたある物を見て、悟空は何を思いついたのかそれに手を伸ばすのと、再びよじ登って来た男が窓の縁に手を掛けたのは同時だった。

「それにしても、よくこんな作戦を立てられたな」

「まあ、金羽振りが良いリーダーの考えなんざ、知りたくもねえけど」

「おい、お前も行け」

銀行の裏路地を、黒く塗りつぶされたワゴン車で人目を避けるように置かれている。

その向こう側で、黒ずくめの体格の良い男達が数人、異様な殺気を持って会話をしていた。

様々なコードに繋がれたパソコンに前で忙しくキーボードを弾く男は、いやに眼の大きなネズミの被りものを着ていて、銃の装填を確認しているのはネコの被りもの。

壁に登り始めた男はウサギ、黒塗りのワゴン車から大きな荷物を取りだす男はウマの。

その他似た感じの男が二人、すべて色が異様に派手な不気味な動物の被りものを男達は被っていた。

「おい、さっきのは何だったんだ？」

「知るかよ、小便でも漏らしたんじゃないのか？」

「ああ、アイツ確かこの仕事は初めてだったしな」

「女の生理用品でも買ってやれば良いだろ」

下品な失笑が響く男達の頭上を、前触れもなく風を切る音と共に影が過る。

重い音を立てて、ワゴン車のボンネットに何かが落下する。

その重い音に男達が驚きウマが慌てて覗きこめば、ボンネットの上に居たのは、先ほど壁を登っていた筈のウサギだった。

身体を僅かに痙攣させて、お腹を抑えて呻いている。

腹に巻いていた防弾チョッキが何か硬い物で殴られたのか、チタン製の金属がへこんでいた。

被りものから剥き出しの眼が驚愕に見開き、登った筈の二階の窓を見上げた瞬間、もう一つの影がそこから落下するのを見た。

ウサギの視界には、跳ねた黒髪と青色の服を捕える。

風を纏って、輪の中へ音もなく着地したのは男達の仲間ではなかった。

あまりの突然の襲撃と呑気な顔で現れた人物に、ネズミが反射的に銃を突きつける。

それに我に返って他の男達も持っている銃を発砲す前に、突然現れた人物はすでに腕を閃かせていた。

金属を木製の物で叩く音が裏路地に響き渡る。

風が唸りを上げ、男達は蛙の様な呻いた悲鳴を上げて倒れた。ひとりは腕を抑え、ふたりは顔を抑えてのたうち回っている。

腹を抑えて、嘔吐している者さえいた。

その個所には、殴られた痕がくつきりと残っている。

男達は、攻撃してきた相手が持つ道具を見て、言葉を失った。

骨が軋むほどに激痛を与えた棒の様な物の先には、緑色のブラシ。

「なっ、ん、…」

どれだけ強化された掃除用具なのかと思うよりも、それに負けた自分にショックで力なく倒れる。

しかしその掃除用具は特に変わった所は無いのだ。

ただ使う相手がそれをチタン製の防弾ジョッキをも粉碎し、凄まじい威力を発揮させたのだが、生憎それを男達が理解する前に意識を手放した。

「うーん、やっぱり加減がわかんねえ」

あはは、と乾いた笑いを悟空は立てたが、それに対して応える者は居なかった。

と、まあ此処まで書いてみました。映画『ダイハード』シリーズが大好き過ぎて、なんちゃってヒーロー。悟飯はどんな敵にも一切容赦しない性格ですが、悟空はなにかとパワーを最低限まで制御する性格なのでやらせたら楽しそうだなと。

デッキブラシで防弾チョッキを粉砕するという芸当が出来るのはサイヤ人だけです。

更新は不定期。続きは、書く気はちよつと失せてます。



## 偽りの輝き

劇場版八作目ネタです

無菌室に響くのは赤ん坊の泣き声。

男の頭の中をかき回すのは、甲高い泣き声。鼓膜を震わせ、脳髄を揺らすその泣き声はまるで呪いの如く幼い記憶に刻み込んでくる。他の赤ん坊も泣いているが、何処か違う。手が触れそうになるほどの近くに居る、相前後して生まれた赤ん坊の声だけが、男の頭をかき乱し、苦しめる。

まるで自分を主張するように泣いていた赤ん坊が、連れて行かれた。何処に連れていかれたのかは分からない。それでも、まるで幻聴の様に泣き声が頭の中で響き続ける。

静寂で冷たい無菌室に重い足音が鳴る。次いで足を掴まれたと思えば、胸に激しい痛みが走る。

けれど泣く事も呻く事も出来ず、ただ頭の中で響くのは、甲高い泣き声だけ。

目の前に父が居た。塵溜めの中で、蹲っていた。父が苦しげな声で男を呼ぶ。

しかしそれでも声が出せず父を呼べず、ずっと頭の中で響くのは、甲高い泣き声だけ。

重苦しい光と衝撃波だけが、男の頭の中のヒステリックに近い音を

拡散させた。

破壊の音だけが赤ん坊の泣き声を消し去ってくれる。

男は叫んだ。言葉にならず、溢れ出る力が身体と脳髓を軋ませても、まるでその赤ん坊が目の前に居る様に、手を伸ばす。

空気を掴む、砂に近い、重い空気は、ただ悪夢を蹴散らすだけで。

闇の夢の中で残ったのは、ガラスになつて砕けた赤ん坊と、男の顔。しかし甲高い泣き声は、やむ気配を見せてはくれなかった。

声にならない言葉を叫び、名も呼ばれない赤ん坊の泣き声に、呼応する。

「聞いているのか？悟空」

手を仰いで空気を乱し、天窓に飾られていた装飾品に指を滑らせれば、軽やかな音が悟空の耳を心地よく震わせた。

特殊な力場により空中で揺れる装飾品の中央で浮遊するのは砂時計の様に斑模様にも渦巻く小さな惑星で、星星が悟空の指先で煌いていた。

鈴がまた鳴り響く。

「聞してるよ、界王さま」

珍しげに眺めていた装飾品と小惑星から視線をずらして小さな部屋の出入り口へと向ければ、北の銀河を管理する界王が溜息を零して

いた。

「修行の時、何度も見ておるだろう『モジュールコスモ』は」

「ん、でもこの前見たのと違うぞ？」

「当たり前じゃ、この『モジュールコスモ』は実際の銀河を縮小して映像化しておるのだからな。お前さん達が住む地球の規模なら消えずに済むが、小さな惑星は他の惑星と衝突し、誕生の大爆発を引き起こし、星を煌かせ、新たな星を生むもんなんじゃ」

「へえ、じゃあの時見た綺麗な星は、もうねえのか」

それでも鈍く輝く小さな惑星を飽きもせず見上げる悟空に堪りかねて界王が指を右へ振るうと、突然現れた輝く彗星に惑星は押し潰され、大爆発すら許されず無残にも消えてしまった。界王に振り向いた悟空の表情は、何処か悲しげだ。

「数日後の姿じゃ。本物の星はいずれそうなる」

界王が指を今度は左に振れば別の新しい惑星と、銀河が形成される。この場にある小宇宙は存在も時間も本物であるが、疑似体でしかない。

光りが拡散するだけで、実際起こる熱も衝撃波も悟空の肌には何も感じさせない。

悟空はそう思えば、輝いていた悟空の瞳は途端に興が削がれ、もう見向きすらしない。

椅子から立ちあがって、悟空はまだ着替えていない自らのスーツ姿を見下ろす。

あんな場所へ連れていった所でなにも効果は生まないと、妻はいつになったら分かってくれるのだろうかと頭を悩ませた。

息子の悟飯は悟空よりもうんと賢くて要領も大人顔負けだ。あんな

監獄みたいな窮屈な場所に居なくても、きつとあの子が本気になれば何にだってなれるのだ。悟空は自分の説明下手にぐうの音も出ないでいた。

ネクタイを崩しシャツのボタンを取ろうとして、軽く舌打ちをする。

只今執筆中の劇場版ネタ。こう、下手に経験が長いと前振りが長すぎて時々苦労する。コレまだ序盤なんだよなあ。書き始めは面白かったので、こっちにもあぶ。

あと、最後までは書きません。ガチで女性向けなので。あと戦闘シーンも入れる予定だが、うーん、進まない。

## Conduct : when : drunk

悪ふざけで書いた話です。女性向け要素を含む作品です。  
ギャグテイストで。

それは、ある飲み物から始まった。

日課となっている地獄でのブロリーとの組み手の時間までまだ余裕があつたから、老界王神の部屋へ行つて沢山ある本棚の中から面白そうな本を物色しようと赴いた時だ。

この前、悟空が持つていこうとした本のタイトルを見て老界王神は血相を変え、暇を持て余している界王達を呼び付けて部屋の掃除をしたのはまだ記憶に新しい。

赤い帯が付いている本はダメだときつく言われているので、それ以外を選んでいく。本当はブロリーにも見せてやりたいが、セルやフリーザが茶々を入れて来て、ソレを蹴散らすブロリーを宥めるのに苦労してそれ以降本は持つて行っていない。

お気に入りの本を何冊か読み返して、壁かけの時計を見てそろそろ約束の時間だと気付く。綺麗な本を棚に戻して部屋を後にしようとした時、ふと部屋に唯一ある人間界の電化製品である冷蔵庫に眼が行く。

食べ過ぎるなとブツブツ文句はいいつつ、老界王神はいつも冷蔵庫に何種類かのお菓子やら食べ物が置かれている。それはもう自分一人では絶対食べられない程の量を。尚且つ色取り取りのケーキがとても美味しいのだ。

そう思えば、悟空の腹は都合よく小気味いい音を鳴らす。  
自分以外誰も居ないのに関わらず、悟空は抜き足差し足で冷蔵庫へ向かう。

ワクワクしながらいざ冷蔵庫を開けて、果たして悟空は少々残念

な顔をした。期待していた菓子は、入っていなかったのだ。

普段はもうちょっとゆっくりとした時間帯に遊びに来るので、きつと老界王神はお菓子を調達しに行っているのだろう。流石に、恩を仇で返す様な事は言えない。

仕方がないと立ちあがってブローリーが待つ地獄へ行こうと冷蔵庫の扉に手を掛けようとして、ある物を見つけた。

横に、小さな瓶を見つけたのだ。透明な瓶には、薄桃色の液体。飲み物だろうかと思空は気になってそれに手を伸ばした。

大きめな蓋を回して開けて、臭いをかぐ。色で連想される様な、甘い果実の香りだった。ラベルは張られていないが、これはもう飲み物そのものだ。

興味が沸いて、口を付ける。恐る恐る瓶を上に向けてヒンヤリとした甘い香りの液体が思空の唇に触れて口腔内へ注がれた瞬間、背後から厳しい声がかかった。

「だからお前さんは、どうしてやらなくてもいい意地汚さを発揮させるんじゃない」

慌てて口腔内に注がれた甘い液体を飲みこんで、瓶を冷蔵庫に戻して背後に振り返る。其処に居たのは、部屋の主である老界王神が大きな紙袋を片手に呆れた顔で思空を見ていた。

おそらくその紙袋には、思空が望んでいる物が入っているのだろう。しかしこんな気まずい場面を見られても尚、お菓子をせがむほど思空も羞恥がない訳ではない。

「お主、今頃は地獄で遊んでいるのではないのか」

「今から行くと思うってたんだ」

「菓子は持って行かんのか」

「いいよ、どうせいくらあっても足りないし」

以前お土産で持っていた時に、壮絶な戦いになったのを思い出して悟空はげんまりした。

時計を見て、そろそろ行かないと本当にマズイと思った立ちあがった瞬間、グラリと悟空の視界が一瞬歪み、立ちくらみを起こす。

「なんじゃ珍しい、寝不足か悟空」

「いや、毎日八時間ちゃんと寝てるぞ」

「そうか、分かったからさっさと行かんか」

しっ、しっ、と邪険にされ、悟空は渋々老界王神の横を通って出入り口へ向かう。その時、老界王神の鼻先を掠めたのは、悟空からは嗅ぎ慣れない香りだった。

「悟空、お前さん冷蔵庫にある瓶の奴、飲んだじゃろ」

老界王神がそう言えば、悟空はギクリと肩を震わせた。悪戯がバシたような気まずい笑顔を見せつ悟空に、老界王神は呆れた溜息をつく。

「あー、うん、ちょっとだけ」

「何か変な感じはないかのう」

「へ？いや、別に…」

尚も問いかけようとして、悟空は時計を見て老界王神の言葉を遮って、走って行ってしまった。

「ふむ。度も低いし、たいした事にはならんだろっ」

喋りもちゃんとしていたし、足取りはもふらつきは無かった。飲んだのは本当に少しだけなのだろうと、老界王神は思った。

悟空が見ると分かっていてラベルも貼らなかったのを棚に上げて、老界王神は紙袋に手をつ突っ込んで中華まんを取り出して頬張る。

しかし老界王神はこの事がいずれどんな大惨事を生む事になるだろうと、予想することなど出来る筈もなかった。

果てしなく暗い地獄の空から悟空が舞い降りて来るのを先に気付いたのはセルだった。

退屈そうに座り込んでいたのにいきなり立ちあがるもんだから、近くに居たフリーザも顔を上げて、悟空を視界に入ると不愉快そうな顔をした。

「よう、セル、フリーザ」

朗らかな笑顔で手を振ってやってくる悟空に対して皮肉気に笑っているのはセルだけで、フリーザや近くでバレーをしていた隊長不在のギニュー特戦隊は、何だか歓迎ムードではないようだ。

「なんだよ、愛想わりいなフリーザ」

「どうして僕が、大っ嫌いな貴様に愛想を振り撒かなきゃなんないのさ」

「オラの気が晴れる」

思わず身を乗り出そうとしたフリーザだが、悟空に蹴散らされることはわかっているので下手に出られなかった。



「それにしても、よく続くものだな」  
「何が？」

地獄に來た目的は、セルとフリーザは身にしみる程分かつている。最初はよくからかつては、思い出したくもない壮絶な戦いを強いられた事もあったが、慣れればあとは勝手に嫌味を口にします。

セルが悟空の手元を指差す。悟空はそれで気付いた。あのまま慌てて絵本を本棚に戻さずに地獄に來てしまったのを。

「あの破壊する事しか考えていないような男が、そんなつまらない物を見て喜ぶと思うか？」

そのセルの言葉に、一瞬で空気が重くなる。

悟空は感情を表情に出してはいないが、ただ口を閉じてセルを黙って見上げている。

「戦いを挑むだけなら、無意味な干渉は止める事だな。所詮、化け物に高等な考えなど……」

セルの言葉が途中で途切れる。

激痛に襲われその元を辿れば、セルの脚を悟空が容赦なく踏みつけていた。尚も踏み潰し、余りの威力に地面が亀裂を生んでいた。

避ける事をプライドが許さないセルが悟空を睨みつけければ、悟空は笑顔を浮かべていたが、しかし瞳には感情の色は膨れていない。

悟空の内なる激情が、颶風となって吹き荒れる。

近くに居たフリーザが口を開けて啞然としている。

あきらかに悟空の様子が可笑しかったからだ。

いつもだったら、こんな言葉の応酬は悟空は笑って飛び蹴りを喰らわせるが、激怒するほどの怒りではなかった。

確かに本気の怒りではあったが、ここまで冷たい雰囲気でききなり攻撃する悟空に違和感しかなかった。

「何故、いきなり攻撃するのだ。孫 悟空」

「そりやおめえ、オメエが嫌味言うから」

「貴様は、いつも理解できず最終的には蹴散らすだけだろうが」  
「そうだっけ」

冷たい表情をすぐに崩し、満面な笑みを浮かべる。しかしセルの脚を踏みつける力は緩めない。

今度は近くに居たフリーザ達が捲し立ててきた。

ヒステリックに叫んではいるが、悟空には半分理解できずとも、怒りが沸いて来るのだけは分かった。

「うるさい」

地の底から響く様な声に、騒がしさが一斉に崩壊した。悟空の黒髪が揺れ始め、力が高ぶっているのが流石にフリーザでさえも分かる。

「うるさいうるさいうるさああいつ」

叫ぶ度に足が振り下ろされ、セルの脚の骨が粉碎する音だけが異常に響く。

「なんでいきなり、逆ギレかましてんだお前は!!」

「逆ギレはそっちの得意技だろうが!!」

「だからそれを、逆ギレというんだ!」

最大の危機感を覚え、セルは腕を振り上げて悟空を攻撃するが、その前に悟空は後転してセルの攻撃を避けていた。

高い岩山に仁王立ちして、悟空はセル達を見下ろす。

何故だろうと、悟空は不思議に思っていた。

気分が、すこぶる良いのだ。さっきはセルの言葉に怒りを覚えたが、それも一瞬だけで気分は凄く清々しい。

いつの間にか、ギャラリーが増えている。

かつて戦ったきたような見覚えのある様のない様な顔ぶれが集まってくる。

持っていた本を傷が付かない様にそつと地面に置くと、ゆっくりと飛びあがって、すぐ横に居た奴の胸倉を掴んで勢いよく投げつければ、勢いを増したソイツは別の奴を巻き込んで吹き飛ばされてしまった。

「暇つぶしだ。まとめて掛かって来い」

地獄中に響き渡る咆哮はしかし、金色に輝きだした光りに全て飲み込まれてしまった。

ほんの少しだけ時間は遡る。悟空が降りたつた場所から数百キロ離れた場所で、奇妙な歌声と共に四人の人影があった。

童謡【もりのくまさん】のリズムで歌ってみて下さい

「あるうひゝ、地獄の中」

「ブロリーに、出会った」

「阿鼻叫喚のみち、ブロリーに出会った」

不似合いなスキップも付けて、順にタ レス、ラディッツ、バーダックと上手とは言えない一人だけ棒読みの歌が地獄に響かずにいた。

寂しげで広大な地獄を練り歩くのは四人だ。バーダックとラディッツは互いに距離を作って肩を並べ、前を進む二人にあまり視線を向けないように歩く。

前を悠然と歩くのは、ブロリーだ。静かな物腰に、髪は黒く生温かいのか冷たいのか分からない風に靡いている。

そして軽やかに歩き続けるブロリーの左脇には、仏頂面のタレスが抱えられダラリとされるがままになっていた。

周りの人間には分かりづらいが、地獄に来て巻き込まれて時間が立つと、ブロリーの微表情で機嫌の善し悪しが分かる三人は、それでも下手にブロリーに口出しは出来なかった。

ブロリーが今だけ機嫌が良いのは、これから悟空がやってくるからだ。

悟空が定期的に地獄に来る前はそれはもう洒落にならないくらいの暴れっぷりで、更に悟空と外見だけはそっくりなバーダックとタレス、ついでにラディッツが襲われる事は必然で、精神的に追い詰められてタレスが悟空に助けを求めたのは言うまでもなかった。約束通り定期的に来てくれるから、ブロリーは御機嫌だし時々暴れるが、それでも三人の被害はより少なくなったという訳だ。

「なあ、何で俺だけ抱えられてんだよ」

「しょうがねえべ、俺はカカロットの父親だからな」

「俺はそもそも似てねえし」

もうかれこれ、タ レスが掴まって二時間は経過している。絞殺される恐怖に震えていたが、流石にこの時間までこの格好のままだと、恐怖どころか羞恥すらどうでもよくなったらしい。

先程の歌がその余裕さを表していた。

それに下手な事を言ったら、すぐさまブロリーの髪は黒から青に変化するので、自分の命の危険（死んでいるが）を感じて抵抗の意を随分前に捨てている。

「それにしたって、カカロットのやつ遅いよなあ」

しかし何故か、悟空はまだ姿を表せないでいる。ラディッツがそう言えば、タ レスは諦めていた抵抗を思い出し顔を青くさせる。

「も、もし本当にカカロットが来なかったら、俺、八つ当たり居殺されるんじゃないっ」

「そっという事になるな。まあ安心しろ、骨は拾ってやる」

冗談には聞こえないからバーダックの台詞は笑えない。それでも逃げないのは、すぐに見つかるかと分かっているからだ。

さっきの歌が余程気に入ったのか、鼻歌を漏らすバーダックの目に、もはやタ レスの姿は映っていない。

三十分ほどこの状態が続いた頃だろうか。そろそろブロリーの御機嫌も斜めになって、ブロリーの黒髪が段々と青になりかけて周りが

陽炎の様に揺らめきだした時、高台の向こうから地響きと爆炎が轟いた。

四人は悟空の様に相手の気を感じ取れないが、地獄を震わせるほどの威力はブロリー以外には地獄には居ない。

「やった！カカロットか？！」

これで解放されると叫びかけた瞬間、ブロリーは一気に加速を増して走り出す。

あわててバーダックとラディッツも続き向かう先は、爆音の煙が舞う高台の向こうだった。

ブロリーが軽い足取りでタレスを小脇に抱えたまま高台を登り切れば、別の広場にたつ。

四人の黒髪を乱すのは爆風と煙だった。

ただ何か硬い物を殴りつけるような音だけが煙の中から響いて、

タレスは目を凝らした。

のんびりと追いかけてきたバーダックとラディッツが辿り着いた頃には、見晴らしがよくなっていた。

段々と晴れていく爆風の中、一人背を向けて佇んでいたのは山吹色の道着を着た人物だ。ブロリー達は人の気を察知できはしないが、目の前に居る相手が待ち望んでいた人物だと直ぐに分かった。

特徴的な黒髪が地獄の生温かい風に靡いて、見えにくい横顔が足元を見ていた。

爆煙はまだ完全には晴れず何を見ているのか分からなかったが、それに構わずブロリーはまるで長く待ち望んでいたように名を呼ぶ。

「カカロット」

抱えられていたタ レスが放り出される。本物の悟空が来たのだ。最早ブロリーはタ レスには興味がない。

悟空が、ゆっくりとブロリー達に振り返った。

爆風はまだ消えていない。

妙な違和感を、タ レスとバーダックが感じ取った。ラディッツはバーダックの険しくなった顔を見上げて怪訝そうだ。二人の視線は、ブロリーではなく、悟空に向かっていたからだ。

「ブロリー」

タ レス達の視線すら気にも留めず、悟空はブロリーだけを視界に捕えて、呆けていた表情が一気に笑みを綻ばせる。

その笑顔がなんとも輝かしさを纏っていたので、それを向けられているブロリーをタ レスが覗きこめば、ブロリーの表情の酷さに軽く悲鳴を上げた。

「なんかおかしくねえか」

「は？何がだよ親父」

「カカロットだよ」

顎で我が息子を差すバーダックにラディッツはますます首を傾げる。

悟空を見れば、笑顔を浮かべながらゆっくりとブロリーの元へ駆け寄っている光景が遠からず分かる。ブロリーは何故か固まっていた。

「あいつ、あんな態度一度もした事ねえだろ」

最初こそすれ、悟空は渋々ブロリーの相手をしていたくらいだ。

落ち着いてからは、悟空もそれなりに楽しんでいたが、輝くほどの笑顔を浮かべはしなかったのだ。

それが今はどうだろう。満面な笑みをブロリーに向け、駆け寄って来るではないか。

異様な雰囲気を纏う悟空に、バーダックとタレスは彼の笑顔に身震いを感じた。

「それになんだ、この引きずる様な音は」

その音は、やはり悟空のほうから聞こえた。

足元を覆っていた爆煙が消えていく。そして引きずる音の正体を知った瞬間、ラディッツの表情が恐怖に歪んだ。

悟空の右手には、老界王神から借りている絵本を大事そうに抱えていた。恐らく、楽しみにしていたブロリーの為に持ってきたのだろう。近頃セル達が煩いから暫くは持つてこないと思っていたが。

それより問題は、左手に握っているものだ。掴んでいる物が引きずる音を響かせているのだ。

奇妙な物体だ。黄色の脂肪泡が見える黄緑色の生き物だ。どうみてもセルの欠片だった。上半身なのか下半身なのか分からないが、奴の得意技である再生能力はうまく働いていないようだ。

どういう力を使っているのか、蘇れないセルの何処かの突起を引っ掴んで引きずっていたのだ。

あまりにも正反對な物を両手に持ち、地獄の景色を背景に駆け寄る悟空の清々しいまでの笑顔は、まるで死神だ。

だがしかし、純粋な怒りとお人よしの優しさしか知らないバーダック達には余程怖ろしく見えただろうが、ブロリーは平然としていた。



悟空が発生させている颶風が距離を縮めることにブロリーの黒髪を靡かせる。

タ レスが無意識の危機感でブロリーから更に飛び退いたのと、悟空とブロリーの距離が五メートル内に入ったのは同時だった。

終始笑顔だった悟空の表情が一瞬にして止まるのが、バーダックの視界に入る。悟空が大きく右手を振るえば、ラディッツが慌てて両手を前に出して飛び出す。

必死にキヤッチしたのは悟空が放り投げた絵本だ。ラディッツがキヤッチしてくれると分かっていたのか、繊細な本なのに傷もなく丁寧に正確にラディッツに向けて投げた悟空の行動が、バーダック達には理解できない。

タ レスを感じた危機感は、悟空の左手がセルの欠片を手放した瞬間に実現した。

少し腰を下げ軽く飛んだ悟空の右腕が、完全に無防備だったブロリーの首はがっちりとホールドされ、二人の身体は一瞬止まった。ブロリーの表情は一切変わらず、悟空が右腕に体重を乗せた途端、ブロリーの身体は背中から地面に叩きつけられる。

凄まじい衝撃だった。

ブロリーを叩き付けた地面が、唸るような音を出すと陥没したのだ。衝撃に耐えきれず罅割れがバーダック達の所まで届くほどに。

悟空がラディッツに絵本を投げ渡した理由がやっと分かった。

そして先程の爆風も、すべて悟空がしかした事なのだ。

しかし悟空の攻撃はこれで終わりではない。悟空はすぐさまブロリーの上に馬乗りになると、彼の横目掛けて殴ろうと腕を振り下ろすが、その直後にやっと我に返ったブロリーも反撃を開始する。

悟空の鼻先に、空気を震わせる気弾が発生。

それがブロリーの右腕から発生しているのだと気付いた悟空は、慌てもせずブロリーの右腕を両手で掴むと、楽しそうにへし折らんばかりの圧力を加え、ブロリーの右腕は抵抗もなく方向転換。

強烈な音を唸らせる気弾は、発生させたブロリー自身に放たれた。

その場が数秒だけ光に包まれた。

爆発に飲み込まれる前に更に遠くに逃げていたバーダック達を爆風に巻き込まれるほどの威力に、もはやラディッツは言葉を失っている。

「すげえな、出会い頭にラリアットか」

「なんだあの無茶苦茶な返しはよ」

いくら宇宙最強とはいえブロリーの反撃をああも一瞬でねじ伏せる悟空に、タレスとバーダックは思った事を口にする事しか出来ない。

ただ遠目で眺める事しか出来ないバーダック達の視界に、吹き荒れる爆風から出てきた影を捕えた。影は悟空だった。

高台の上に、悟空が着地する。

楽しそうに目を細めて爆風が消えるのを待っていたが、すぐに別の颯風で消え去った。

颯風を生んだのはブロリーだ。先程の威力で削り上げられた地面は更に陥没し、その中心に居たのは、黒髪を蒼炎に変えて佇むブロリーだ。

明らかに先程と目つきが変わっている。

いつもならすぐさま髪の色も金に、身体も何倍にも膨張させて力を誇示していたのだが悟空との組み手で学習したのか、無暗な暴走は少なくなっていた。

そのブロリーの姿を、悟空はうつとりとした表情で眺めている。ブロリーも、悟空をうつとりとした表情で眺めていた。

動けないでいるのはバーダック達だけだ。

他にもセルやフリーザ達も気付いている筈だが（すぐに復活するか）、いつさい現れない所を見ると、ブロリーの恐ろしさに近付きたくないのか、それとも悟空が怖ろしいのか。おそらく両方だろうと推測できる。

だがバーダックには妙な事が引つ掛かっていた。

「やはり、カカロットの様子がおかしい」

それはラディッツとタレスも流石に気付いていた。問題は、それを起こした原因だ。

自分達がブロリーに、ブロリーが悟空に会う前に事が起こったのだろうとは分かっているが、それがセルやフリーザだとは考えにくい。ブロリー以外に悟空の手を本気で煩わせる存在が、地獄に居ないからだ。

三人の考えを余所に、悟空とブロリーの打ち合いは始まっていた。

予測していたのか、高台から飛び降りた瞬間にブロリーが助走もなく一気に距離を詰めて来るのを、悟空は笑顔で迎える。

悟空が優雅に身体を右に捻って半回転、その反動がついた空中右蹴りは、加速して詰め寄ってきたブロリーの首を狙う。ブロリーはそれを視線すら動かせず受け流すが、それはフェイクだ。

悟空の身体は、ブロリーに右手で左足を掴まれたまま次は左へ横回転。そのまま右足も繰り出されブロリーの頭は悟空の脚に挟まれた。

悟空の表情は至って穏やかだ。軽く声を上げて、悟空は両脚に力を咥え、身体を左に捻ってブロリーの首を擦じ切ろうとする。

その前に、ブロリーの両手が動く。首をがっちり固定している脚を無視して、ブロリーの右手が悟空の後ろ左太股掴んで腕を振るえば、悟空は吃驚して身体を無理やり反対方向へ回転せざるをえない。

反転した先で迎えたのは、ブロリーの膝蹴りだ。狙いは、がら空きになった悟空の腹。

悟空は抵抗どころか、相変わらず笑顔のままだ。

容赦がないのは、あの頃から変わらずブロリーも同じだ。

表情に出ないからこそ、その内から溢れだす力はより絶大となる。

振り上げられた痛烈な蹴りが悟空の横腹を掠めたのをブロリーが感じ取ったのは確かだった。しかしそれも一瞬だけだ。

すぐさまブロリーは視界が赤く染まるのを感じたからだ。

左のこめかみに衝撃。減り込んでいたのは悟空の右の踵だ。流石に痛みによろけたブロリーの間を付いて、悟空が距離を詰める。

その凄まじい光景を、口を開けて見上げていたのはバーダック達だけだ。

他の地獄の者達は気配を消して怯えている。

それほどに、二人の戦いは想像を絶するからだ。

全力を出していないとはいえ悟空が容赦なくブロリーの横面を殴るだけで、ブロリーが悟空に蹴りを放つだけで空気が大きく震え、二人の衝撃音が唸る風となりバーダック達の身体を叩く。

しかし暫くそれを眺め続けて、ラディッツがハタと気付く。

「これ、誰が止めるんだ？」

いつもなら組み手でブロリーが気絶するか、悟空が飽きて終わりと云うと終了するのだが、組み手の時間はだいたい二時間ほどで終わる。放っておいても、たまに巻き込まれるぐらいだった。

しかし今の悟空は惚けた様子は全く見えず、異常に様子がおかしい。もしかしたら、

「おいっ、こっち来るぞ!!」

険しい表情のタレスに、禍々しい気弾が降り注がれる。だが悟空は三人に気遣う事すらない。

悟空の放った気弾がブロリーを掠めて降ってこれば、三人に逃げ道は無い。

こちらはその寒気のするような気弾に少しでも触れただけで、一瞬で魂まで灰にされる威力だ。いくら直ぐに蘇るからと云って、痛みが続けば流石に心が折れる。悟空は、きつと此方の悲鳴すら聞いてはくれないだろう。

悟空がブロリーと距離を取ると、徐に両手を頭上に掲げだす。ズン、と重苦しい音を響かせて頭上に巨大な気弾が悟空の両手から生まれる。

その気弾はバーダック達でさえ慄かせ恐怖を煽る、正に最悪な地獄と化す威力を持っていた。

ブロリーだけが愉悦に微笑むだけで、悟空がその気弾を無情に打ち放とうとした瞬間、背後から声が掛かった。

「いい加減にしろ！悟空!!」

その何処か癪に障る声に、悟空は面倒そうな顔をして振り向いた。

すっかり興を削がれたのか禍々しい気弾は一瞬にして拡散してゆく。大惨事を免れたバーダック達が思わず安堵の息を吐いて、悟空の暴走を止めてくれた人物を見上げた。

「…相変わらず、良い所で邪魔してくれるな。パイク ハン」  
「そう思っているのは、お前だけだぞ悟空」

白いターバンを靡かせて現れたのは、悟空の次に強いと謳われるパイク ハンだった。  
腕を組んで、珍しく悟空を睨み上げている。どうやら悟空の様子がおかしいのを、彼は知っているようだ。

辺りの惨状を見渡してパイク ハンは疲れた様な溜息を吐く。

「そろそろやめろ。本当に地獄が機能しなくなるほど、暴れるつもりか」

「いいじゃん別に。こいつら好き勝手暴れるから、あってもなくても同じだろ」

「やりすぎだと言っているんだ」

全てが破壊され焼け野原となり、閑散とした地獄は機能しないどころか地獄の死者すら復活しづらくなっていた。

確かに悟空は派手に暴れたのは今回だけではないが、地獄が機能しなくなるほどの破壊は流石にマズイだろう。

「後で閻魔様にどやされるのは別に構わんが、俺まで迷惑が被るから勘弁してくれ」

閻魔大王の、眩暈がするほどの大音量の説教を思い出したのか、悟空は気まずそうな顔をする。

しかし不満そうな顔は変わらず、物足りなさそうな顔をする悟空に  
パイク ハンは目を細める。

「兎に角、ブロリーとの組み手は中止しろ。お前のせいで、地獄の  
死者が閻魔様に泣き付きそうな勢いで抗議デモをしているんだ。止  
めるのを手伝え」

「…嫌だ」

「おい、お前のせいでこうなんっただぞ、いい加減に」

「オラまだ暴れ足りない！！」

頭を振って、悟空は反撃を窺っていたブロリーに向かって勢いよ  
く抱き付いた。ブロリーは吃驚した顔で悟空を受け止めるだけで、  
何をしてくすのか分かっていたパイク ハンは流石に怒りを覚えて  
悟空に掴みかかろうとしたが間に合わず、瞬間移動してしまった  
悟空を捕まえる事が出来なかった。

消える前に、悟空が彼に向かって舌を出していたのが目に入り、  
パイク ハンの怒りが頂点に達した。

「あんのつ、昼行燈がああ！！」

怒りの叫びは虚しく響くだけで、それを啞然と見上げるのバーダ  
ック達はどつと疲れて突っ込む気すら無かった。

「で、結局あいつら何処行っただ？」

パイク ハンがバーダック達に気付いて、悟空が暴れた原因が何だ  
ったのかを聞くまで地獄が閑散とした静寂を過ごしたのは、小鬼達  
が戻ってくるたった数十分だけだろう。

ラディッツが絵本を預かったままだと気付くのは、もう少し経って  
からの事だった。

続きがあるのですが、まあそれは当然女性向けですので…ゲフンッゲフンッ

悟空がブロリーを関節技で締め上げるシーンを書きたいがためにまさか此処まで長くなるとは思わなんだ…お粗末さまでした



## 【Love which scuttled】

悟ブル。ピッコロ大魔王との決戦の三年後。

天下一武道会で再会した悟空とブルマ他仲間達の話し。

視線を上げれば、己の前を走る彼の背中があつた。

見た事も、感じた事もない初めての「感情」が、心を震わせるのを覚えた。

「じつちゃん、生き返って良かったな！みんなも元気そうだ！」

三年ぶりの天下一武道会は土砂降りの雨から始まり、幾分成長したブルマが亀仙人達と再会を果たした時だった。

何処か聞き覚えのある、けれど霧が掛かって思い出せない様な青年が振り向いた先に立っていた。

珍しい傘に隠れていた顔が露わになる。白い布を頭に巻いた青年だ。しかしブルマや亀仙人達にはどうにも見覚えがない青年だ。

誰？と頭を傾げて青年を眺めていて、そのあどけない表情にブルマ達はオヤ、とデジャヴを感じた。

ずっと会いたかった少年の笑顔と重なる。

「クリリンやヤムチャや天津飯達は何処だ？もう予選会場にいつちまったのか？」

少年の強さに感化されて三年前に飛び出していったクリリン達の名

を青年が言えば、ブルマ達の確信は大きくなった。

「ま、ま、まさかつ」

「悟空か?!」

名前を呼べば青年は、最後に会ったあどけなさを残した少年と同じように笑った。

タイミングを図った様に雨は止み、雨雲から顔を出した陽光と輝く虹を浴びた青年の柔らかい笑みに、ブルマは驚きと共に喜びが胸を弾ませた。

呆気にとられているうちにクリリン達もやってきて、一時は再会の喜びに笑い合った。

ピッコロ大魔王との決戦の後、悟空は神殿で、神様に選ばれて修行に行ったと聞いてから三年、ずっと会いたくて会えなかった見違えるほどに成長した悟空との再会がやっと叶ったのだ。

クリリンなど泣いて悟空に飛びついていて。賑やかな笑い声が晴れた空と賑やかな祭りに混ざり、涼しい風が、再会を喜び合う友を距離を置いて眺めているブルマの頬を撫でていった。

「このヤロウ！会いたかったぞ悟空！」

「はは、オラもまた会えて嬉しいぞ」

ヤムチャや天津飯はいまだ戸惑いながら悟空を眺めていたが、段々と話してゆくうちに二人も悟空の再会の喜びを改めて感じていた。

「ブルマさん？」

魅入る様に彼らを眺めているブルマに話し掛けたのはランチだった。

すっかり雨がやんだのに驚いた表情で傘を差している彼女を訝しんだのだ。

「あ、うつん、なんでもないわ」

取りつくろう様に笑っていれば、悟空達が大会の受付を済ませていた。

それなりに鍛えた勇ましい者達が集まっているが、悟空達が居る場所だけ空気が、歩く度に風と共に纏う雰囲気あまりにも違っていた。

誰かれ構わず挑発する者や近寄りがたい者が厳めしい面を揃える中、悟空達は常に笑みを絶やさず、颯爽と歩き続けた。

そんな彼の横顔を眺めていたブルマは自分の胸が高鳴っている事を自覚した。

ウーロンは隣で自分の呟きに「ミハーだなあ」と嫌味を言ったが、聞こえない振りをした。

一般は入れないので暫く休憩所で待っていれば、予選を軽くこなせてきたクリリン達が戻ってきた。「餃子は？」と問えば天津飯だけは険しい顔をしていたが、聞くに聞けずブルマ達は話題を変えるしかなかった。

「所で、悟空はどうしたんじゃ」

「トイレに行くと言っていましたよ」

一緒に予選会場へ行つたのだから一緒に戻って来ると思っていたが、悟空の姿がない事に亀仙人は首を傾げた。

武道会参加は初めてではないので迷いはしないだろうと誰も気には止めなかった。

クリリン達の話の聞いていると、悟空は外見だけではなく中身も大きく成長したそうだ。

特に仲間を驚かせたのは三年前には無かった、落ち付いた雰囲気だ。たった三年で、落ち付きのない常に動きまわっていた悟空からは想像できず、ブルマは驚いた顔で聞き入っていた。

途中からランチも悟空の話題に混ざりだして修行の頃の話を始め、ふいに、ブルマは妙な感覚を覚えた。

良く知って居る筈の存在に、知らない出来事が突然舞い込んできた様な、そしてそれを本人ではない別の人間の口から聞いた、感情を鈍らせる疎外感。

「どうしたブルマ、少し顔色が変わぞ」

それをすぐさま察知したのはヤムチャだった。テーブルを囲んだ仲間達が此方に心配げに視線を向けて来る。

いつもはお喋りに乗ってくる自分が大人しい事に訝しんだのだ。

どうしたものかとブルマが返答に困っていれば、隣にいたランチが突然立ち上がる。

どうしたと全員の視線がブルマからランチに変わると、ランチは突然、ティッシュを鼻に持つていくと、全員は吃驚した顔になる。彼女がそれをすればどうなるか分かっているからだ。

「は、はつくしゅん！」

ランチがくしゃみした瞬間、ランチの黒髪は綺麗な金髪へ変わり、おっとりした優しい表情が冷たい表情へと豹変する。

初めて見た時はみな驚きを隠せなかったが、彼女はくしゃみで人格も外見も変わる特居体質なのだ。

悟空達と出会う前は色々悪さをしていたそうだが、口調は荒っぽさはあるが平和を送っているようだ。

「ランチさん？」

ブルマが名を呼べば、ランチは無言で仲間達を見渡すと隣にいるブルマの腕を掴んで立ちあがらせる。

ブルマは訳が分からずポカンとしたままで、ランチが手を取ったまま歩きだそうとすると、クリリンが慌てて声をかける。

「え、ちょ、ランチさん？何処行くんですか？」

「うるせえな、普通そいうこと聞くか？デリカシーがねえぞクリリン」

肩だけ振り返ってランチが睨み返せば、此方が力が上な筈なのにクリリンはたじろいでしまった。ランチとブルマの表情を見て、ウーロンがクリリンを座らせる。

付き合いが一番長いウーロンはブルマの表情に薄々感づいたのだから、早く行けと手で合図していった。

天津飯は訳が分からない様な顔をして、ヤムチャはただブルマの背中を見つめるだけで、亀仙人はただ笑うだけだった。

大股開いて歩き続けるランチの前を塞ぐ人間はいない。凄味を利かせるランチを怖れて武道会を見に来た一般人は怖れて避けるのだ。

「ねえ、ランチさん」

仲間達の視線から完全に離れた位置で、ようやくランチは立ち止っ

た。慌てて足にブレーキをかけて、ブルマも歩みを止める。

風に綺麗にたゆたう金髪が綺麗だなあと思っていれば、ランチはブルマに振り返ってきた。

「なんか不思議だよな」

むず痒そうに笑うランチに、ブルマは口を閉ざして続きを待つ。

「俺は、あんた達と出会う前は相当の悪だったんだ。それなのに…」

一層強い風が、ランチとブルマの髪を乱す。しかしランチの声は、周りの騒がしさに負けずしっかりと耳に入ってくる。

「居心地が良いなんて、馬鹿げた事だと思っていた」

ランチの瞳は寂しさを纏っていた。悟空達と出会うまで彼女がどんな事をしてきたのかブルマは聞いた事がない。

必要ないと感じたからだ。興味あつて軽く聞いた事もあつたが、別に偏見など無かったから今があればいいと思っていたのだ。

自分と彼女の間に悟空達が居るからと、無意識に気を使う事もなかった。

「悟空達が強くなつてゆくのを見ていたと思った」

自分でも口にするのが驚きなのか、ランチの言葉は深い意味を宿らせていた。

彼らと全く違う人生を歩む自分が、こんな近くにいていいのかと思つた時もあつたとも言つた。

そしてブルマは、そんな事など悟空達は気にしないのにと感じた。そんな風に思える様になつたが、自分も「ドラゴンボール」という

きっかけがなかったら絶対出会う事など不可能だったのだ。

「だから、俺の知らない悟空達を聞くと、ちょっと寂しい」

軽く思考の海に漂いそうになって、ランチの言葉にブルマはドキリとする。

目線がかち合えば、ランチははにかむ様な笑顔を向けてきた。気付いていたのだ、黒髪の時のランチも。

自分が知らない「少年だった彼」の話を聞く度に感じるそれが寂しいと、ブルマはそこで漸く自分の感情に気付いた。ブルマもランチの笑みに吊られて喉を震わせた。

「そうね。アイツらの前では言えないわね」

クリリン達みたいに戦いの中で友情を見出す事は出来ないから、もし言ったとしても理解できまい。

きつと黒髪のランチも同じ事を思っているだろうか。

「さて、俺はちょっとその辺ブラついてくる」

そう言つて、ランチは背を向けて去って行つた。止める理由もないのでブルマは黙って見送ると、自分も自分で、何だか皆の元へ戻る気になれなかった。

確か試合までまだ時間はあるだろうから、その辺を歩き回ろうとブルマが歩き出した時、騒がしい声が耳に入ってきた。

普段なら煩わしさだけで気にもしない騒ぎだが、数人の体格が逞しい男達に囲まれている人物の髪型を見て、ブルマは通り過ぎようとした足を急いで戻した。

そして嫌な予感がすぐに過った。

過去、少年と旅をしてきた時に身に付けた危機感と云うべきものだろう。

急いで走り寄れば輪の中に居た人物がブルマに気付き、笑みを浮かべた。

「ブルマ！」

「ちよつと孫君！あんた何やってんの！！」

そこに居たのは悟空だった。トイレ行つたんじゃないのかと問いかけようとして、ブルマは悟空を囲む集団に改めて気付く。

悟空を囲んでいた者達は、決して善良な市民とは言いにくい屈強過ぎる男達だ。

恐らく悟空達と同じく武道大会出場を果たしに来た者達だろう。

しかし大会出場者の特徴はヤムチャ達から聞いているので、予選で敗退している筈だ。そんな男達が何故、悟空を囲んでいるのかブルマには理解できなかった。

数は六人、五人は身長は平均くらいで、一人はリーダー格なのか悟空の二倍ほどの長身だった。見るからにガラの悪そうな男がブルマをひと睨みすると、ブルマは我に返った様に悲鳴を上げて悟空の後ろに隠れる。

「ちよ、ちよつと孫君ホントに何したの？」

「何もしてねえよ」

悟空は喧嘩早い性格だが、基本的には自分より弱い相手には興味のない人間だ。しかしその人間が悪さをしていたら話は別だが、考えれば予選会場で何かあったのかと予想できる。

出会った時から思っていた事だが、悟空の力は異常に過ぎるからだ。その辺にあるジムや道場等で習う武術より、悟空達が習得した修行



の方が過酷だと聞いて居たのだ。

ガラの悪い男の一人が、悟空を睨みながら口を開く。

「なに、コイツが予選でイカサマしてるんじゃないかと思ってな」  
「こんな青臭い餓鬼が、チャパ王をいとも簡単に倒すなんて、イカサマやらないと勝てねえだろ」

嫉妬と悪意のある眼差しに悟空は訝しんだが、やはり理解できないのか首を傾げるだけだ。

多少は予想はしていた言葉通りだった事に、ブルマも溜息をつきたくなる。

「ねえ、孫君の事知らないの？この子、前は準優勝まで行ったんだけど」

多少自慢を含んだブルマの言葉に、男達は一瞬たじろいだ。本当に知らなかったようだ。自信満々に言っていたので、他の大会ではそれなりの名が通っていたのだろう、ますます疑いの目を向けてきたのは直ぐだった。

「嘘を付け！！んなヘラヘラしてる奴に、アニキが負ける訳ねえだろ！！」

アニキと云った男が、リーダー格らしき大男の名を高らかに叫ぶ。どうやら予選会場で悟空に負けた事を認めたくないようだ。悟空は悟空の方で、こんな奴居たっけ？という顔をしていた。

「今回は残念だったな、次頑張ってくれよ」

ブルマの怯え様に悟空はこの場は何もしない方が良く、軽く声を

掛けて男達の輪から抜けようとしたが、大男が二人の道を塞いでしまった。

ブルマがどうしようかと眼を泳がせていたら突然、悟空がブルマの肩を掴んできた。

え、と驚く暇もなく悟空は軽く頭を下げると、二人の頭上を金属製の棒が通り過ぎた。今度は膝を抱えられ、横抱きにされた状態で悟空が軽く声を上げると、悟空はブルマを抱えて右へ旋回した。

その旋回して発生した風で、左右から襲いかかろうとした男二人が悟空を捕える事が出来ずにお互い衝突した。

棒を持っていた男が再び奇襲。背を反らせて攻撃を回避すると、悟空は眼を光らせて軽く蹴りを放とうとしたが、先にブルマが慌てて悟空を制止させた。

「ちよつと孫君！騒ぎになったら大会出場停止になっちゃう！」

「え？、そりやちと困るなあ」

何事かと野次馬も増えてきて、このまま騒ぎを大きくすれば確実に大会関係者がやってくるだろう。最悪、悟空が居たと知られれば出場停止は確実だ。

「しっかり掴まってるよ？ブルマ」

悟空の声が間近で聞こえ、彼の瑞々しい汗の臭いにブルマは息が止まるほどの衝撃を覚えた。互いの呼吸が分かるほどに、悟空が眼と鼻の先に居るのだ。

あどけない笑顔を見つめるのも束の間、ブルマは強い浮遊感を覚えた。

気付いた時には男達の頭上を飛び越え、更に浮上し近くにある建物の屋根へと降り立ってしまったではないか。

空中回転したのもあったせいか、パフォーマンスと勘違いした人々が悟空の軽やかさに拍手が鳴り響いた。

地上では「降りて来い」と叫ぶ男達が此処まで登って来ようとするが、その前に通報した者が居たのか大会関係者が走ってくるのがブルマの視界に入った。

悟空も気付いたらしくすぐさま隣の建物へ飛び移り、屋根を走り抜け、反対側の道へと降り立った。

「ひゃあ、助かったブルマ。オラ、あーゆーの苦手なんだ」  
「誰だってあんなの苦手よ」

時間が迫ってきているのか、大会出場者へのアナウンスが響いてきた。

見物客達も観客席で見ようと会場へ向かう。自分達は仲間の元へ戻らなければ、きっと待っていてくれるだろう。

しかしこの道は会場へと一直線で繋がっているのか、見物客達が我先にと混雑を始めていた。必死に関係者が押さないで、並んで下さいと言っているが聞く耳を持たないようだ。仲間達が居るのは飲食店が並ぶ場所、此处から正反対の場所だ。

また屋根に飛び移ろうとしたが、きつと関係者に怒られるだろう。どうしたものかと考えていれば、悟空は何の迷いもなくブルマの手を掴むと、見物客達の波を掻き分けて歩き出した。

「離れるなよ、ブルマ」

ブルマが何かを喋る前に、悟空は笑顔で振り返ってそう言った。掴んでくる手は、力を加減してくれているのか優しかった。

大勢の笑い声と視線の波に逆らって、悟空とブルマは走り出す。

駆け出す足は苦もなく軽やかで、眼の前の背中はまだで導くような風に似ていた。

微かに聞こえる悟空の息遣い、掴んでくる腕は、気付いたら指を絡ませ手を繋いだ。人の間を風の様に掻い潜り、それを邪魔する者はいない。

酷く懐かしさがブルマの心を軋ませた。けれどそれは鈍い痛みだったけれど、辛さは無かった。

忘れかけていた、心地よい気持ちだった。

青空と太陽だけを見上げて、ひたすらあの輝く宝珠を求めたあの旅路を。

まだ誰とも出会えなかった、二人だけの出会いだけがあつたあの日。

ランチが寂しいと言っていた、けれど同じとは思えなかった。

彼女には彼女の、自分には自分の思い出があるし、出会いがあつた。皆が自分の知らない彼の話をする度、切なくなる。

正直に伝えられる感情ではなかった。自分はもう、別の人の手を取ったのだから。

悟空の手を握り返せば、汗ばんでいた。

無邪気な笑顔も、自分と呼ぶ声も、仕草も、何もかも変わっていないかった。

変わってしまったのは自分なのだ。

でももう少しだけ、その手を掴んでいたくて。

周りにいる恋人達が、自分達に羨ましそうな視線を向けて来るくすぐったさに嬉しさを覚え、息を切らすまで走り続けた。

風のように走り抜けた恋心は直ぐに打ち砕かれてしまったけれど、この思いは、きっと一生忘れない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6368p/>

---

Clean a wish

2011年11月17日17時59分発行